

靈界物語 第四六卷 舍身活躍 西の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四六卷』愛善世界社

2003(平成15)年04月06日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 仕組の纏絲 しぐみ ねんし

第一章 榛竝樹 はんなみき 〔一 二 一 一〕

第二章 慰勞會 ゐらうくわい 〔一 二 一 一 二〕

第三章 囁言 かむこと 〔一 二 一 三〕

第四章 沸騰 ふつとう 〔一 二 一 四〕

第五章 菊の薫（一 二 一 五）

第六章 千代心（一 二 一 六）

第七章 妻難（一 二 一 七）

第二篇 狐運怪會

第八章 黑狐（一 二 一 八）

第九章 文明（一 二 一 九）

第一〇章 唾狐外れ（一 二 二 〇）

第十一章 變化神（一 二 二 一）

第十二章 怪段（一 二 二 二）

第十三章 通夜話（一 二 二 三）

第三篇 神明照赫

第一四章	打合せ <small>うちあは</small> 〔一一二二四〕
第一五章	黎明 <small>れいめい</small> 〔一一二二五〕
第一六章	想曖 <small>おもひあひ</small> 〔一一二二六〕
第一七章	惟神 <small>かむながら</small> の道 <small>みち</small> 〔一一二二七〕
第一八章	エンゼル〔一一二二八〕

第四篇 謎なぞの黄板わうばん

第一九章	怪 <small>あや</small> しの森 <small>もり</small> 〔一一二二九〕
第二〇章	金 <small>かね</small> の力 <small>ちから</small> 〔一一二三〇〕
第二一章	民 <small>たみ</small> の虎 <small>こ</small> 聲 <small>こゑ</small> 〔一一二三一〕
第二二章	五 <small>いそ</small> 三 <small>あらし</small> 嵐 <small>あらし</small> 〔一一二三二〕
第二三章	黄金 <small>わづこんくわ</small> 華 <small>くわ</small> 〔一一二三三〕

〔 〕

序文

現代の天文学、物理学、化学、幾何学、機械学、解析学、心理学、哲学、歴史、文学、批評、言語等、所謂科学の眼から見れば、この物語は實に文厘の價値もなきものと見えるでせう。十惡無一善の凡夫心から觀察する時は、不道理と矛盾と撞着で充滿してゐるでせう。ベルグソン、オイケンの流行で、生命や生活、又は生だのと色々論議され、近頃はまたプロレタリアにブルジョアに文化生活、相對性原理説など頻りに主唱さるる世の中だから、現代人の耳に入りさうなことはないと思ふ。然しながら、槿花一朝の夢にも等しき現代の流行書「死線を越えて」とか「新約」「舊約」「復活」「出家と其弟子」「懺悔の生活」等の如く、現代人、而も二三年未滿の愛讀者を求むるのではない。幾千萬年の後までも言葉の光を輝かすのが眞の目的なのである。故に現代人に容れられむことを望むのではない、唯々一人なりとも多く讀んで神界の眞相を悟り、大にしては治國平天下のために、小にしては修身齊家の基本となすに致らば、口述者に取つて望外の喜び

なるのみならず、世道人心に裨益する所大なるべきを思つて止まぬのみであります。

大正十一年十二月十五日 王仁識

總説

吾人に後れて現世に生るるものと雖も、吾人に先だつて死する者も、皆吾人の爲には導師である。吾人に對して諸行の無常を教へ、菩提心、大和心を求め、永生を思はしむる大知識である。

人生に帝王の主權の及ばざる無限の深みがある様に、靈界の廣大無邊なる事は、とても現代の法王や教主らの支配の及ぶ限りではない。只人間は惟神に一身を任せて、日々の業務を樂しみ、歡喜の生涯を送ることに努めねばならぬ。故にこの物語も、讀者をして天國淨土の片影を覗はしめむとして滑稽的の言語を聯ねられたのも、大神様の深遠なる仁慈の籠る所である事を口述者は感謝するのでありま

す。『温かい笑ひの波は一座を漂はす』といふ事がある。法悦の歡びは終に笑ひ
となる。笑ひは天國を開く聲である、福音である。併し笑ひは嚴肅を破るもの
やうだが、その笑ひが徹底すると又涙が出るものだ。笑ひ泣きの涙が、最も高調
された悲哀と接吻する様な感じがするものだ。併し法悦の涙と落膽悲痛の涙とは
天地霄壤の差あるは勿論である。讀者は本書を讀んで充分に笑ひ且つ泣き、法悦
の天界に遊ばれむことを希望いたします。人間の笑ふ時と泣く時と顔面の筋肉が
同じ様に作用することを思ふと、善惡、歡苦、笑哭不二の眞理が怪しく光つて來
るやうです。

因に本卷は十二月十五日に八百頁餘を口述筆記し、翌十六日に四百四十頁を口
述筆記し、前後二日間にて脱稿致しました。筆記者の鍛鍊の功は進歩の跡が歴然
と見えて居ります。二日間に出來上つたのは本卷がレコード破りとなりました。
翌十七日より大坂へ或る事件のために出張いたすことになつたので、筆記者も腕
によりをかけられたと見えます。これで本年の口述は終りとする考へであります。

大正十一年十二月十六日

王仁識

第一篇 仕組の纏絲

第一章 榛竝樹（一一一一）

未遂すゑつひに海うみとなるべき山水やまみづも
志しばし木この葉はの下潜したくぐるなり。

此世このよを造り固かためたる 天地てんちの御祖みおやと現あれませる

國治立くにはるたちの大神おほかみの 世人よびとを救すくふ御教みをしへは

天あまつ御空みそらの青雲あをくもの 棚引たなびくきはみ白雲しらくもの

墜居おりぬ向伏むかふす其極そのきはみ 平和へいわの風かぜは吹ふきすさみ

仁慈の雨は降りしきる

天地四方の人草や

草の片葉に至る迄

恵みの露を與へむと

豊榮昇る日の御影

大空傳ふ月の影

きらめく星の數多く

世人を導く宣傳使

四方に遣はし三五の

教を天下に宣べ給ふ

さはさりながら曲津靈の

神も同じく神の御子

陰と陽との御水火より

現はれ出でしものなれば

廣き尊き皇神の

御目より之を見給へば

宇内同胞神の御子

仁慈の心變るべき

日はゆき月はひた走り

星移るふに従ひて

八岐大蛇や醜神の

彼方此方に現はれて

輕生重死の教をば

四方に開くぞうたてけれ

バラモン教やウラル教

ウラナイ教と各自に

體主靈從の魂の

向ふ所に從ひて

あらぬ教をしへを擴充くわくじうし
神かみの御子みこたる神人しんじんを

惑まどはしゆくこそ忌々ゆゆしけれ
高姫たかひめ司つかさの後あとをうけ

北山きたやま村むらを立出たちいでて
小北こぎたの山やまに立籠たてこもり

支離滅裂しりめつれつの教理けうりをば
道理だうりを知らぬ愚者ぐしや共に

有難ありがたさうに説ときつけて
漸やうやう茲ここに神しん殿でんや

教をしへの射場いばを建たて立たべ
蠓いもり別りわけを教けう主しゆとし

魔我彦まがひこ、お寅とらに文助ぶんすけや
其外そのほか百ももの幹部かんぶたち

神かみの御おん爲ため世よの爲ためと
迷まよひ切きつたる心こころより

一心いつしん不亂ふらんに妖言えうげんを
コケ徳利どつくりのドブドブと

吐はき出だし世よ人びとの魂たましひを
醉よはせ濁にごらせ曇くもらせつ

世界せかい唯一ゆゑいつの御教みをしへと
自みづから信しんじ又また迷まよひ

盲聾めくしうぼも同どう様やうに
身みもたなしらに進すすみ行ゆく

蠓いもり別りわけは曲まが神かみに
魂たまを破やぶられ朝あさ夕ゆふに

神かみの出入でいりの肉宮にくみやと
言いひつつ酒さけに醉よひくらひ

呂律もまはらぬ舌の根で
數多の男女を根の國や

底の國までおとしゆく
何にも知らぬ信徒は

盲の手引と知らずして
自分も盲となりすまし

尊き道と信じつつ
隨喜の涙と諸共に

暗黒界へ一心に
知らず知らずに墮ちて行く

其慘状を救はむと
神の御言を畏みて

三五教の宣傳使
治國別に仕へたる

萬公、五三公始めとし
バラモン教の信徒なる

松彦、アク、タク、テク四人
神のまにまに河鹿川

一本橋の袂にて
不思議の綱にまとはれつ

小北の山の神殿に
登り來れば曲神は

何とはなしに怖ぢ恐れ
次第々々に逃げ去りて

蠓蝮別や魔我彦や
お寅婆さまを飾りたる

金箔忽ち剥脱し
思ひもよらぬ醜状を

演出せしぞ可笑しけれ

蝶蜋別は高姫を

束の間も忘れ得ず

戀の焰に胸こがし

鬱を散ぜむ其爲に

毒と知りつつ無理無體

酒に紛らす果敢なさよ

箸とる事にまめやかな

彼は又もや衣笠の

村より來るお民をば

此上なきナイスと思ひつめ

お寅婆さまの目を忍び

互に秋波の交換を

開始しゐたる折もあれ

松彦さまや熊公が

突然ここに現はれて

身の置所なきままに

お寅の隙を窺ひて

命より大事と貯へし

金を懷中に托しこみ

戀しきお民と手をとつて

暗に紛れて隨徳寺

あと白浪と消えてゆく

お寅婆さまは腹を立て

髪ふり亂し阿修羅王が

荒れたる如き勢で

言靈濁るひきがへる

ガアガア聲を張上げて

尻しりひつからげ坂道さかみちを おのれいもりわけ蠓いもりわけ別わけの奴やつ
どこの何處いづこに潛ひそむとも 後あとつけねらひ素首そつくびを
とつつかまへて泡吹あわふかせ 思おもふ存ぞんぶん分はな鼻はなをねぢ
恨うらみを晴はらさにやおくべきか それについてもお民奴たみめを
許ゆるしておいちや身みの破目はめと 金かねと戀こひとに村肝むらぎもの
心こころを紊みだしあとさきも 水音みなおと清きよき河鹿川かじかがは
一本橋いつほんばしを打うち渡わたり 野中のなかの森もりに逃にげて行く
二人ふたりの後あとを追おっかけろ 悪わるい時ときには悪わるいもの
蠓いもりわけ別わけが逃にげしなに 道みちの片方かたへの木きの幹みきに
網つなをしばりて追おひ來きたる お寅婆とらばさまの足あしさらへ
こかして泡あわを吹ふかせむと 企たくみおいたる其畏そのわなに
もろくもかかりステンドと こけた拍子ひやうしに鼻はなをうち
ウンウンウンと唸うなりつつ 氣絶きぜつしたるぞ是非ぜひなけれ
後あとに残のこりし松彦まつひこは お寅婆とらばさまや蠓いもりわけ別わけ

逃げ行く後を打眺め

五三公、萬公其外の

三人の男を遣はして

二人の後を追はしめぬ

又魔我彦は戀慕ふ

お民の姿の消えしより

假令お民が天かけり

地下鐵道に打乗つて

何處の果へかくるとも

探さにやおかぬと氣をいらち

鼻息荒くトントンと

これ亦後を追うてゆく

かかる怪體な騷動を

無心の月は山の端に

利鎌のやうな光なげ

遙に地上を瞰下して

ニコニコ笑ひ眺めゐる

五三公、萬公外三人

松彦さまの命令で

これ亦尻をひんまくり

三人の行衛を探さむと

一生懸命汗をかき

矢を射る如く大地をば

ドンドンドンと威喝させ

一本橋をギクギクと

弓張月に撓ませつ

危く渡る大野原

野中の森を目當とし

月の光を浴びながら　　ゲラゲラゲラと笑ひつつ

くり出し進むぞ可笑しけれ　　あゝ惟神々々

此面白き物語　　洩らさず落さずまつぶさに

述べさせ給へ惟神　　月照彦の御前に

畏み畏み願ぎまつる。

五三公の一行はお民、蝶蛸別、お寅、魔我彦の遁走した後を追っかけ、漸く一

本橋を渡り二三町ばかり北進し、榛の樹の道の両方に立竝ぶ樹蔭までやつて来た。

ウンウンと怪しき聲が聞えて来た。

萬公「オイ御一同、どうやらお寅婆アさまが芋をいけてをるとみえて、ウンウン

と氣張つてゐるぢやないか。どうもウンの悪い婆アさまと見えるワイ。一寸ここ

らでウン動中止をやらうぢやないか」

アク「中下先生のお言葉に従つて、ここで一先づ停車する事にしよう。何だか榛

のかげでシツカリ分らないが二人あるやうだ」

「そりや大方蠓蠓別さまと此處にやつてゐるのだらう、そりや都合が好い、オイ、イヤもうし、ウラナイ教の教主様、立派な家がありながら、物好きな、こんな所まで出て来て安眠するといふ事がありますか、サア起きたり起きたり」と側そばに寄つてよく顔かほをのぞいて見れば魔我彦であつた。魔我彦はお寅婆アさまの倒れた體からだに躓つまづいて、ここに足をひっかけ、ひっくり返り、膝ひざをしたたか打つて痛さをこらへ、僅わずかにウンウンと息いきをもらしてゐたのである。お寅婆アさまも一旦氣絶いつたんきぜつしてゐたが、魔我彦に踏ふまれてハツとして氣きがつき、めしやげた鼻はなを兩手りやうてで押へ地上ちじやうに倒れて居たので、魔我彦が側そばにこけてゐることに氣きがつかなくつたのである。

タク「ヤア、これはこれは互違たがひちがひの御夫婦ごふうふだ。これ魔我彦さま、俺わしぢやからよいが、蠓蠓別さまの目めについたら、それこそ大變たいへんに怒おこられますよ。お寅さまと枕まくらを並ならべて、草くさの褥しとねに星ほしの夜着よぎ、餘あまり物好ものずきにも程ほどがあるぢやないか、サア起きたり起きたり」

魔我彦はお寅婆アさまをお民たみだと思おもひつめ、一生懸命いっしやうけんめいに裾すそを握にぎつて、一方いっぽうの手

で膝を撫でて居つたが、お寅婆アさまと聞いて、稍落膽失望的の聲をあげ、
「あゝあ、何だ、人違ひか、お民の奴、どこへ行きやがつた。大方螾螾別と逐電
しやがつたのだろ。何處までも追つかけて、とつつかまへねば俺の男が立たぬ。
これお寅さま、お前は螾螾別を、とつつかまへて、十分に鼻でも捻ぢて、お民の
事を思ひ切らして下さい。さうすりや、お前もよし、私もよし、かたみ恨みもな
し、こんな上分別はありませんせぬ」
と半泣聲で膝の疵を撫でながら口説いてゐる。

お寅「エ、残念やな、高姫にお民、「た」のつく奴は何處までも私に崇ると見え
る。假令他國へ走るとも尋ね出して叩きつけ、澤山膏を取つてやらねば、ただで
は濟まされぬ。エ、口惜しい」

萬公「ハツハ、ハツハ、失戀黨の秘密會議が開催されてゐるワイ。これお寅さま、
みつともないぢやないか、チツトしつかりせぬかい、エ、エ、何をメソメソ泣い
てゐるのだ。海千山千川千の下つ腹に毛のない所を御覽なさいと云ふ様なシタタ
力者の癖に、さてもさても戸惑うたものだなア。螾螾別一人が男ぢやあるまいし、

何ならここにテクが一人、お前さまの事を大變に褒めてゐたから、一つ鞍替をし
たらどうだい。河鹿川でサツパリ洗ひ張りと云ふ幕を開くのだな。さうすりや戀
の執着もスツクリ晴れて、新しい立派な若い夫が持てると云ふものだ。なア、テ
ク公、お前もお寅さまなら満足だらう

テク「馬鹿にするない、太平洋で牛蒡洗つてる様な大きな代物は御免だ。一つ暴
風が吹いて見よ、忽ち帆柱まで沈没の厄に遭ふからなア」

萬公「イツヒツヒツヒ、これ魔我さま、チツトしつかりせぬかいな、何時だと思
つてゐるのだい、物好に、こんな老朽船の後を追うて來るといふ事があるものか、

サア小北山へ歸らうぢやないか」

魔我「アイタ、此魔我彦も男だ。トベラに焼酎をふいたやうな臭のするやう
なお婆アさまを、何ぼ俺だつて追跡するものかい、俺はこんな梅干婆アさまは元
より眼中にないのだ」

お寅はめしやげた鼻で、妙な聲を出しながら、

「コリヤ、魔我公、失禮な事申すと承知せぬぞ、どこが梅干だ、梅干といふのは

皺しわ苦く茶ち婆ばの事ことだよ。まだ此この通とほりデデッッププリと肉にく付つきのよよい白しら浪な婆みアあさま、元げん氣き盛さかりを、
餘あまり見み下さげるものぢやない。そんな失しつ禮れいな事こと申まをすと、蝶い蠟もり別わけさまのやうに鼻はなを捻ねぢ
つてやるか」

魔ま我が「エ、滅めつ相さうな、梅うめ干ぼし……と云いつたのは粹すゐ人じんと云いつたのだ、梅うめ位くらゐ【すい】なものはないからな。さう悪わる取とりして貰もらつちや、魔ま我が彦ひこもママガ悪わるくて困こまりますワイ」
お寅とら「お前まへの云いふ事ことに詐いつはりがなければ、それでよい、ヤヤッッパパリわたしは粹すゐ人じんだらうがな、ココラ魔ま我が、そんな甘うまい事こと云いつても、このお寅とらさまは駄だ目めだから諦あきらめたがよからうぞ」

タタク「ウウツツハハツツハハ、自うぬ惚ぼれとカカササケケのものない者ものはないと云いふ事ことだが、本ほん當たうに妙めう
チチキキ珍ちんだ、イイツツヒヒ、」

魔ま我が「此このお寅とらさまはエエライライものだよ、横よこ根ね疔かん瘡さう骨ほねううづづきの關くわん門もんをとほの昔むかしに突とつ破ぱ
し、トトベベララ峠たつげを打うち越こえ、屏びやう風ふうヶヶ嶽たけを進しん行かう中ちゆうだからなア、何なんせよ兩りやう屏びやう風ふうの豪かう傑けつだか
らな、ウウツツフフツツフフ、フフツツフフ」
タタク「兩りやう屏びやう風ふうつて何なんだい、妙めうな事ことを云いふぢやないか、家いへの中なかぢやあるまいし、こ

んな所へ屏風持つて来て何にするのだい、こんな道の真中で屏風引きまはして結婚でもあるまいし」

魔我「ハツハ、ハツハ、餘程世間見ずだな、貴様は未だ【おぼこ】いワイ、兩屏風と云つたら兩方の横根だ、片つ方の横根を片屏風と云ふのだ。そしてなア、お寅さまのやうに毎木毒で頭髪のうすくなつたのを、トヤといふのだ。此道にかけたら魔我さまもマガなスキがな研究してゐるから随分博士だよ」

萬公「何時までもこんな所でグツグツしてゐても仕方がないぢやないか、兔も角、小北山まで歸らう、俺が神變不思議の神術で、お民や蠚蟪別の足止めをしてやるから、安心せい」

アク「三五教の神力で足止めのみならず、小北山へ兩人が歸つて来る様に神さまに願つて鎮魂をしてやるワ、サアお寅婆アさま、魔我さま、歸なう、小北山の狸も足を洗うて寝る時分だ、モウ子の刻だ。氣の利いた化物も引込む時分だぞ。サア下腹に毛のない婆アさま、歸らう歸らう、偕老同穴だ。アツハツハツハ」

お寅「何、三五教の神力で蠚蟪別とお民を返してやらうと云ふのかい。實際にそ

んな事が出来るとすれば、此お寅もこんなに骨を折る必要がない、あ、それなら一先づ歸る事にしよう。併しお民はモウ返していらぬから、蠓蝮別だけを此方へ引寄せて貰ひたいものだ。さうすりや、私も三五教にスツパリと歸順してしまますワ」

萬公「ハ、ハ、ハ、随分現金な婆アさまだな。モシ先生、どうでせう、蠓蝮別を

引戻す豫算は成立してゐますかな」

五三「確かに成立してゐる、併しこれも婆アさまの心次第だ。ヤアお寅さま、歸

なう歸なう」

お寅「何は免もあれ、旅装束もせず、腹立紛れにまつ跣足でやつて來たのだから、

旅をしようと言つても此儘ではいかなぬ、一遍歸りませう。コレ魔我さま、お前

は蠓蝮別の後を追うて、お民の手を取りドツカ山奥へでも暫く隠れてゐなさい、

モウ小北山へ歸る必要はないから……」

魔我「俺だつて、まつ跣足で、此通り帶取裸だ。一本橋を渡る時に履物をおとし、

帶も禪も川の中へおち込んで了つた、懷中物もドコで落したか分らぬ、免も角一

遍歸らな何うする事も出来ない。私は私でウラナイ教の副教主といふ絶対權威を
持つてゐるのだから、是非歸らなくてはならない、教祖の出た後は副教祖が教權
を掌握するのは當然だ」

お寅「それなら仕方が無い。魔我さまもお歸りなさい」

萬公「魔我さまが副教祖で、之からは全權を握るのだから、さうするとヤツパリ

お寅さまは、蠓蠓別に對する同様の待遇振を、魔我さまに對して捧ぐるのだな」

お寅「ヘン、阿呆らしい、玉が違ひますわいな、ホツホ、」

五三公、お寅外五人は、ヤツトの事で小北山の教主館まで歸つて來た。

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 松村眞澄録)

第二章 慰勞會(一一二一二)

松彦、松姫はお寅婆アさま、魔我彦、蠓蠓別などの早く歸り來れかすと、大廣

間に於て祈願をこらし、教主館の玄関口まで歸つて來たところへ、ガヤガヤと囁きながら一行七人が歸つて來た。

松彦「あゝ五三公さま、蠓蠓別さまは如何なつたかなア」

五三「大廣木正宗の生宮は取逃しましたが、其代り奥さまの鈴野姫の肉宮を奉迎して來ました。將を射むと欲する者は先づ其馬を射よですから、女偏の馬を引張つて歸つておけば大丈夫です、鯨でも牝を取るとキット牡がとれますからな、それにモ一つの副産物は義理天上日の出神の生宮を拾うて參りました、ハツハツハツハ」

「それは御骨折でした。サア兔も角内へお這入りなさいませ」

松姫「皆さま、御苦勞でしたねえ、蠓蠓別さまとお民さまは、たうとう取り逃がしましたかな、残念な事でムいますね」

萬公側から、

「逃げた魚は大きいと云ひましてな、ヤツパリ吞舟の魚は網を破つて逃げましたよ。海老が一疋と帆立貝が一つ、ゴク貧弱な獲物でムいますが、これでも今晚の

お酒の肴には可なり間に合ふかも知れませぬ、エへへ、

松彦「ハア、兔も角結構だ、之から松姫館へ歸つて神様にトツクリと願つて来る

から、先づ發見祝にお神酒でもあがつて下さい」

お寅「どうぞ蝶蝶別が貴方の鎮魂で、今夜のうちにでも此處へ引着けられて歸りま

すやうに御祈願して下さいな、松姫様も宜しく御願ひ致します」

松姫「ハイ、力限り願つて見ませう」

魔我「私もお民さまが引着けられて歸るやうに祈つて下さい」

松姫「ハイ、祈りませう」

萬公「何と云つても、末代日の王天の大神様と上義姫様とのお祈りだから大丈夫

だよ、なア海老に帆立貝、マア安心したがよからうぞ」

松彦「アハへ、左様なら皆さま、御緩りと慰勞會でも開いて、賑かうして下さい

いませ」

松姫「どうぞ十分にお神酒を召し上りませ、何程酩酊しても、鼻を捻ぢることだ

けはなりませんぞや、ホへへ、」

と云ひながら、松彦、松姫は二百の階段を足で刻んで行く。萬公は下から二人の姿を打仰ぎ、

「御夫婦萬歳、よく似合ひまつせ。お浦山吹さま、アツハ、ハ、ハ、」

松彦、松姫は後振り向きもせず、別館さして歸り行く。

一同は大廣間に参拜し、終つて教祖館に於て慰勞の祝宴を開いた。ソロソロ醉がまはり出し、すべての障壁を取つて「くだらぬ」ことを喋り始めた。お寅も魔我彦も迷信家の事とて、ユラリ彦、上義姫夫婦の生宮が、早ければ夜明け前、遅くても明日の晝頃には、キット兩人の戀人を此處へ引戻してくるものと思ひ、大船に乗つたやうな心持でニコニコしながら、無性矢鱈に土手を切らして酒を飲んだ。

萬公「ア、ア、エライ労働をやつたものだ。餘程報酬を請求しなくちや、バランスが取れない。御苦労さまだつた位な報酬では、根つから有難くないからな、夜業までさされて、幾分かの割増を貰つたて、やり切れないワ」

五三「オイ萬公、労働は神聖だ。俺だつて労働は貴様と同様にやつたのだ。労働

の量に相當したただけの報酬を、權利として要求するのは道德的には根據のないものだよ。労働の報酬のみを以て當然の權利とみるならば、それこそ社會に弊害百出して世を混亂に導くより仕方がない、老者、病者、小兒などは労働をせなからパンを與へないと云つたら何うするのだ。労働させて貰ふのもヤツパリ神様のおかげだよ。現代八釜しく持上つて來た労働問題は、人類の集團若しくは階級間の問題でなくして、神様と人間との問題だ。吾々三五教の宣傳使又は信者たるものは、如何なる場合にも、永遠の眞理の上に立ち、時代を超越して居なければならぬ。神聖な神の道でありながら、労働問題を云々するやうな事は、チツと謹まねばなるまいぞ』

『それだとして、労働は天の恵を開拓するのだ、宣傳使だつてヤツパリ労働者でもあり、又報酬を要求する權利がなくてはヤリ切れないぢやないか』

『宣傳使、信者の神より賜はる報酬といふものは、信と愛と正しき理解との歡喜の報酬を即時に神から賜はつて居るぢやないか。假令世の中の物貨生産の労働に従事し、相當の報酬を得るのを、今の人間は自分が儲けるのだと云つてゐるが、

決して儲けるのではない、神から與へられるのだ。おかげを頂くのだ。自分が儲けるなんて思ったら大變な間違だ。人間と云ふものは自分から生きるこたア出来ない、許されて生きてゐるのだ。それだから人はパンのみにて生きるものに非ずと神が仰有るのだよ。パン問題のみで人間の生活の解決が付くのならば、世の中は殺風景な荒野のやうなものだ」

「吾々は、つまり言へば筋肉労働者だ。チツとしてゐて、口の先やペンを使つてゐるやうな屋内労働者とは、苦痛の點に於て天地霄壤の差があるのだからなア」

「そりや實に淺見だ。筋肉労働者は人體自然の道理に従つて活動するのだから、假令汗を搾つても愉快なものだ、苦しいと云つても宵の口だよ。ペンを持つて著述をしたり、椅子に掛つて調査などをやつたりしてゐる者の労働の苦しみと云つたら、筋肉労働者の夢想だも及ばざる所だ。凡て人間と云ふものは人のやつてゐる事が善く見えるものでなア、誰だつて其局に當つてみよ、随分苦しいものだよ。上になる程責任も重く、單純な筋肉労働者の比ではない。俺も一度は青表紙と首つぴきをして、澤山の参考書をあさり、著述に従事したこともある。又土工にも

なり、百姓にもなり、車力にもなつたが、ヤツパリ筆を持つ御用が一番樂さうに見えて一番苦しかったよ。靈界物語の口述者だつて筆記者だつて苦しいものだ。お寅婆アさまの後を追っかけ、息切れするやうな苦しい目に會つたと云つても、體を休め酒の一杯も飲めば、それで濟んで了ふものだ。著述家なんかになつてもよ、一分間だつて心のゆるむ隙はない、夢にだつて忘れることが出来ない程、心身を疲勞させるのだ。マアそんな小六かしい話は打切りにして、今日は氣樂にお神酒を頂き、又明朝の新しいお日様を拜むことにしようぢやないか。なアお寅さま、魔我さま、一つやりませうか、どうぞ一杯注いで下さいな」

お寅「婆アでお氣に入りますまいが、御免を蒙りませう」

とニコニコしながら五三公に杯を渡し、爛徳利からドブドブと注いだ。かくして杯はクルクルまはり、宴ますます酣となつて來た。

萬公は思ひの外酔ひつぶれ、獨舞臺の様になつて言靈を發射し出した。

「随分何だなア、雀百までとか云つて、年がよつても戀愛といふものは下火にならないものと見えるな、エ、ン、現にお寅婆アさまだつてさうぢやないか、俺や

どうも此問題の解決にや、實の所が迷つてゐるのだ」

五三 「戀愛は神聖だ、宗教的信仰と正しき戀愛とは、人間の靈魂を優美に向上させるものだよ。正しき信仰と完全な戀愛は人間の心靈を發育せしめ、永遠無窮の生命を與ふるものだ。併し現代科學者のいふやうな淺薄な戀愛觀では駄目だ。凡て戀愛といふものは性欲から分科したものだ。そして性欲の中に可能性の形に於て始めて含蓄されてるのが戀愛だ。此世を造り給うた誠の神様が、人間の生命に性欲を與へ給うた時から、戀愛といふものを含蓄させておかれたのだ。信仰と戀愛は歡喜の源泉だ。歡喜といふものは心靈を永遠に保存し、且心靈の優美完全なる活躍を起さしむるものだ」

「成程、それだから今晚の大活躍も、ハアそこから起つたのだな。さう聞けば、お寅婆アさまの鈴野姫様が御活躍遊ばしたのも、義理天上さまが、舍身的活動の理由も解決がついて來た。五三公さまのやうに、さう綿密に云つてくれると、俺も戀愛に對しての煩悶を綺麗サツパリ排除することが出來たやうだ」

タク 「ハ、ハ、ハ、ハ、戀愛の煩悶だなんて、そんな面でもよくいへたものだ。チツと

お前の顔と相談してみよ、エ、ン

アク「お菊さまの様なナイスと結婚させてもよい様な口吻を、お寅さまが洩らし
たものだから、俄に色氣づきよつて、變な氣になつたのだから、正しからざる戀
愛の煩悶に襲はれよつたのだ、アハ、ハ、ハ、

五三「こんな七六ケしい問答はやめて、今晚は盛にやらうぢやないか」

お寅「サ皆さま、今日は十分に酔うて下さい、メツタに鼻はつまみませぬからな
ア」

とお寅も今日は何と申うてか、主人氣取になつて一生懸命に酒をあふり出した。
だんだんと酔がまはつて來た。

萬公「オイお菊さま、戀愛は先づ打切りとして、一つ御馳走に歌をうたひ、舞う
て見せて貰へまいかいな」

お菊「萬公さまのために歌ふのは一寸考へさして下さい、皆さまの御馳走ならば
歌つても宜しい」

お菊は立上り、扇を擴げて自ら歌ひ自ら舞ふ。一同は手を拍つて囃す。

『小北の山の神床で

花のお菊が酌をする

酒より肴よりお菊さまが

萬公さまの目についた

ホ、、、、

萬公『コリヤお菊、馬鹿にするない、目についたのは俺ばかりでない。すぐに俺

を向ふにまはし挑戦的態度を取るのだな』

タク『ヤツパリ萬公さまが氣にかかると見えて、乙姫さまが挑戦遊ばすのだよ、

何事も善意に解するのだな』

萬公『アハ、、、』

お菊は又歌ふ。

『目につかば、つれてムれよ海の底、龍宮の海の底までも』

アク『妙々、面白い面白い、お菊さまに限る。モ一つ願ひます』

お菊『エ、、、今日の日もエ、、、』

くれーたアレど くれーたアレど

エ、ヤのサ、エ、ーエ、ー

わがア殿どのはア

ヤーレ、マーだ見みえぬ

ハーレーヤーレーヤのサア、

オホ、、、、大きおほに不調法ぶてうはふ、これで御免蒙ごめんかうむりませう」

萬公まんこう「萬萬萬まんまんまん、モ一つ所望しよぼうだ。こんな所ところでやめられてたまるかい」

お菊きく「萬さま、お前まへさまも男をとこぢやないか、返報へんぱうがへしといふ事ことをようせないやう

な者ものは、男をとこぢやありません。何でもいなんから一ひとつ歌うたつて御覽ごらん、さうすりや又私またわたし

も取とつときを放はなり出だしますから……」

萬公まんこう「エ、仕方しかたがない、女王ぢよわうさまの御託宣ごたくせんだ」

と云いひながら立上たちあがり、

「あそばむ爲ためとて生うまれけむ いたづらせむとて生うまれけむ

あそ……ぶ子供こどもの聲聞こゑきけば 吾身わがみさへこーそゆるがるれ

あゝ惟神々々………だ、アハ、ハ、ハ

一同「ウツフツフ、」

萬公「花の盛り………が再びあらうか

枯木に花は咲きはせぬ

ドツコイシヨ ドツコイシヨ………だ

龍宮は近いな 近いな

乙姫さまが鼓うつ

聲が聞えて来るぢやないか

其又鼓を何とうつ

とどろ とどろと六つにうつ………

サアこれで満期免除を願ひたい、サア乙姫さまの番だ

お菊「一枚、二枚」

「コリヤコリヤ、一枚二枚はモウこりこりだ、もつと氣の利いた事を言はぬかい」

□ ホツホ、、

岩屋いはやの中なかで蛸踊りたこをど

珊瑚さんごの島しまでは龜歌かめうたふ

龍宮りうぐうの波なみのはさまにて

お菊きく乙女をとめが黄金こがねまく

其その又また黄金こがねを何なんとまく

萬公まんこうさまにやると言いうてまく

ホツホ、、

アク □ オイ中下先生ちうげせんせい、得意とくいの程ほど、お察さつし申まをします。モシ涎よだれがこぼれますよ、才

ホ、、

一同いちどう □ ワハツハ、、

萬公まんこう □ エへ、、皆みなよつてかかつて、此この萬更まんざらでもない萬まんさまを馬鹿ばかにしよる、併しか

し随分ずぶん持もてたものだなア、オツホ、、、ウツフ、、、

タク □ お菊きく乙姫おとひめさま、モ一ひとつ願ねがひます、餘あまり萬公まんこうに擲からか揄かつて貰もらふと、後あとの始末しまつに

困こまりますからな、そこはよく取捨按配しゆしやあんぱいして歌うたつて下ください、何なんなら私わたしの事ことも一ひとつ、

歌うたつて貰もらひたいものだな〆

お菊きく「これこれもうしタクさまえ

私わたしに會あひたくば河鹿かしかの流ながれ

おやなぎ小柳蛇籠こやなぎじやかこのあひの

小砂利交こじやりましりの荒砂あらすなつかみ

背戸せどの小窓こまどにバラバラと

投なげておくれよ小雨さめふると

思おもうて私わたしは出でて會あはう

もしも萬まんさまであつたなら

雨戸あまどをピツシヤリ閉しめ立たてて

長持ながもちの底そこにてふるうてゐる

好すきと嫌きらひはこんなもの

ヨイトサア ヨイトサア

エ、エエー、はれやーれエイヤのサ………

モウこれで品切となりました。又製造が出来ましたら、皆さまの前に陳列致しま

す、ホ、ホ、ホ、

五三「ヤア有難い」

お菊「先生、貴方も一つ願ひます。貰ひずては不道德ですよ、ねえ皆さま」

五三「わたしは生れつきの無粹漢だ。面白い歌はうたへない、宣傳使としての相

當な歌を歌つてみませう、折角の酒の興がさめるかも知れませぬが、やはらかい

所へ堅いのが這入るのも、調和が取れてよいかも知れませぬ」

萬公「何と乙姫様の前ぢやと思つて、シカツウ仰有るワイ、イヒ、イヒ、サ早く

所望だ所望だ」

五三「天地を造り給ひたる
神は常住にましますぞ

お姿見えぬぞ果敢なけれ
人のおとせぬ曉に

仄かに夢にみえ給ふ
あゝ惟神々々

神の姿ぞ尊けれ

祝詞の力は春の水

罪障氷と解けぬれば

萬法空寂の波立ちて

眞如の岸にぞ打寄する

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

萬公「何時と場所を考へない結構のやうな、結構でないやうな歌だなア」

お寅「何だか先生の歌を聞きますと、髪の毛がシーンとして來ました。ヤツパリ

萬さまの歌とは大變に品格が違ひますなア、心の色が言葉に出るとか云つて、大

したものですワ。何とはなしに爽快の氣分が漂ひました」

萬公「モシ先生、お目出度う。お寅さまは餘程思召があると見えますよ。オ

ホ、ホ、色男といふものは變つたものだな。何と云つても昔の別嬪だからなア、

イヒ、、、

魔我「コレ萬さま、そんな事云つては失禮ぢやありませんか」

萬公「そら失戀です。何と云つてもお菊さまにエツパツパをやられた立派な御人格者と、お民さまに肱鐵を喰つた、どこやらの哥兄さまと、三組揃うた失戀會議だから、チツパのペアで置去りにされた、昔の別嬪さまと、三組揃うた失戀會議だから、チツとは失戀な事も仰有りませうかい。思へば思へば同情致します。同病相憐れむ同情ヨシノリさまだ。柔道行成次第に打つちやつておく譯にも行きますまい。あゝ不義理の天上日の出神に對し、輕業師玉乘姫が、あらう事があるまい事が、大廣木正宗さまをくはへて走るといふのだから、困つたものだい。イヒ、、、」

魔我「大廣木正宗さまに玉則姫

かつさらはれて玉なしの魔我。

鈴野姫ガチャガチャガチャと鳴り渡り

後追つかけて行くぞ可笑しき。

打倒れうちたふ鼻打ちはなうち砕くくだ鈴野姫すずのひめ

われて飛出すとびだ玉は何處ぞたまはいつこ。

地上ちじやう姫戀ひめこひの願ねがひお菊きくと思へばおも

固いかた約束やくそくたがやし大神だいじん。

面白おもしろい其面付そのかほつきは何の事なんこと

萬まんさま寅とらさま思おもひやりますます」

萬公まんこう「コラ魔我まがよ此萬このまんさまを何なんと思おもふ

戀こひにかけたら世界せかい一人いちにん」

魔我まが「萬人まんにんを口説くどいて一人ひとり出來できぬ奴やつ

廣ひろい世界せかいに只ただの一人いちにん。

ウフ、、、うろたへ騒ぎ暗の夜の
お菊幽霊に肝つぶす哉

萬公「自分のみ二世の妻よと思ひしに

玉乗りそこね落つる魔我彦。

大廣木正宗さまに金とられ

後追つかけて鼻をとられつ。

お寅さま何れおとらぬ戀衣

破れて今日は縫ふすべもなし

お寅「喧しい腰の曲つた魔我彦が

戀を語らふ資格あるべき。

片^{かた}思^{おも}ひ固^{かた}く思^{おも}うてゐたものを

玉^{たま}乗^のりそこねヒメ（悲^{ひめい}鳴^い）をあげつつ
』

萬^{まん}公^{こう} 『萬^{まん}これ^で失^{しつ}戀^{れん}黨^{たう}の酒^{さけ}もりも

一^ち寸^{よつと}濟^すみけり後^{あと}は無^ぶ禮^{れい}講^{かう}』

アク 『見^み渡^{わた}せば女^{をんな}男^{をとこ}の好^すき此^{この}む

面^{つら}した奴^{やつ}は一人^{ひとり}だもなし。

其^{その}中^{なか}でアクのぬけたるアクさまは

中^{ちゅう}立^{りつ}地^ち帯^{たい}で安^{あん}全^{ぜん}なもの
』

タク「タクさんにお宮みやに神かみはありながら

此この騒さわぎをば他所よそに見みるかな。

此この神かみは夫婦喧譁ふうふうげんくわの災わざはひを

守まもり給たまへる不義理ふぎりてんじやう天上てんじやう」

テク「魔我まがひこ彦ひこの顔かほは青森あをもり白木上しらきじやう

蠖いもりの別わけに横領わつりやう姫ひめされて」

魔我まが「花依はなよりの姫ひめではなくて鼻打はなうちの

婆ば姫ひめさまとなりなりにける哉かな。

花依はなより姫ひめ身み魂たま變へん化げて猿彦さるひこ姫ひめ

赤恥あかはぢ柿かきのみのみののるる姫ひめかな」

お寅とら 『金龍姫きんりゅうひめ取とられて難儀なんぎに大足姫おほだるひめ

正宗まさむねさまは常世とこよひめ姫ひめへ逃にげたか』

魔我まが 『ユラリ彦ひこ、上義じやうぎの姫ひめは今頃いまごろは

さぞ睦むつまじくおはしますらむ』

かく互たがひに脱線だつせん歌うたを歌うたひつつ、何時いつの間まにやら、カラリと夜よを明あかして了しまつた。
數多あまたの參詣さんけい者しやはゾロゾロと大廣前おほひろまへ指さして參拜さんぱいする、下駄げたの足音あしおとが亂雜らんざつ的に聞きこえて
來くる。

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 松村眞澄録)

第三章 嚙言かむこと〔一一二一三〕

夜はカラリと明け放れ、大門神社廣前の合圖の太鼓が七五三に聞えて来た。五三公、萬公、お寅、魔我彦其他阿克、タク、テクは數十人の信者の中を通つて一段高き祭壇の前に座を占め、魔我彦先づ天津祝詞を奏上した。つづいてお寅は又もや神言を奏上した。

小北の山に神言。

小北の山に神つまります、五六七成就の大神、旭の豊榮昇り姫の命もちて、嘘八百萬の神等を餓鬼集へに集へ給ひ、餓鬼議りに議り給ひて、大廣木正宗、鈴野姫命は、泥足原の水鼻汁を安國平姫命と知らぬ事依さしまつりき。頭と恥をかくよさしまつりし國土に汗膏とり神共をば、雁燈まはしにまはし給ひ、神掃に掃出し給ひて、今年は岩根木根立穴草の片屏風をも斷りて、頭の髪の毛ぬき放ち、頭の焼を何時の間にやら墨塗つて、頭かくし依さしまつりき。斯く冠せまつりし夜の鬘と大山子欲高姫命、ヤンチヤ女と定めまつりて、白髪頭に墨塗立て、高姫の腹に枉津高知りて、雀親方の命の耳の御穴を塞ぎまつりて、頭の御鬘、日の焼を隠しまして、やさし女と誑り、喋る口中に泣き出でむ、赤の他人等が過ち犯しけ

む、クサグサの罪事は、枉津罪とは、頭はられ、耳引かれ、目玉は火放ち、尻頻
蒔き、禿頭に櫛さし、鶏屋の頭の、生剥ぎ、逆毛剥ぎ、糞小便屁許々多久の罪を、
枉津罪と詔り別けて、臭き罪とは、生膚斷、即ち腋臭、死膚斷、即ちトベラ、白
日床組、黒日床組、夜も晝も、己が母のやうな、年の違つた女と、をかしことせ
る罪、ハアハアと息喘ませ、叱言云ふ罪、獸犯せる罪、襟に這ふ蟲蝨の災、高姫
神の災、黒姫鳥の災、借り借り倒し、うまい事せる罪、此處彼處でボツタクリの
罪、澤山出でむ、斯く出でば、枉津神亂れ言以て、餘りもせない金を、元も子も
無く、打きり取られ、血を吐く思ひの、吾身の果、剩へ、此お寅姫を置去りにし
て、剩へ元のお民を連立ち、末の末までと、目を忍び、二人の仲を取り割きて、
枉津の鶏屋の太い婆だと、旅装束にて、川を乗り越え、逃げ失せにけり。斯くな
らば、最早是非なし、枉津神は魔我の岩戸を押開きて、魔我の八重雲を、嚴の千
別に千別きて、聞召さむ、碎けつ神は、高姫の尻に、黒姫の尻に、とりつきまし
て、高姫の便、黒姫の便を、嗅別けて聞召さむ、かく聞召しては、罪と云ふ罪は、
充ち充ちにけりと、吝みたれ神の、阿呆の瘦我慢、泡吹き放つ事の如く、惡縁生

みきり、夕のお神酒を、悪神、貧乏神の、吹拂ふ事の如く、尻をうつべに居る大
船を、屁こき放ち、糞こき放ちて、雪隠の中に放き落す事の如く、落ちた沫が、
元に返りて、返り討する事の如く、飲んだる酒は一つもあらずと、腹を痛め氣を
痛め給ふ事を、高姫の尻、お民の尻より、眞逆様に落ち瀧津、河鹿川の瀬に在す
性悪姫と云ふ神、蠓蠓別を大肌の腹の中に喰はへ行かむ、かく喰はへ行けば、阿
呆らしの尻の、尻糞の、焼糞の、沫の矢鱈に飛びます、穴あけつ姫と云ふ神、大
廣木正宗、お民を抱へ持ち、嬢となして酒飲みてむ、かく嬢と酒飲みては、屁吹
き戸に在す屁放戸主と云ふ神、根の國、底の國に屁こき放ちてむ、かく屁放き放
ちては、根の國、底の國に在す、腹立ち擦り姫と云ふ神、揉みさすらひ失ひてむ、
かく牛馬泣いては、ウツソリした、お寅の身にも、心にも、戀と云ふ戀はあらま
し、遂げさし給へと、議らひ給へ、氣をつけ給へと申すことを、馬鹿の耳振り立
てて聞召せと、頭つつこみ、つつ込みも枉申す、あゝ叶はぬから、目玉飛び出し
ましませよ』

お寅『さあ、皆さま、御苦勞で△りました。これで大方、蠓蠓別さまも歸つて來

るだらう。もしも歸らなかつたら神罰が當り、野垂死をせにやならぬから、嫌でも應でも歸つて來るだらう。松姫さまが御祈願して下さつてるのだから、もはや間もあるまい。大廣木正宗の肉の宮、貞子姫命、行長春命、言足姫命、鈴野姫さま、桃上彦命さま、地上姫命様、いつもお前さまは俺の世話になつてるのだから、正念があるのなら、今日一遍でよいから、手別けて大神様のお助けによつて、大廣木正宗さまの肉の宮を、袖か袂を皆銜へて引張つて來るのだよ。之が出來ぬやうの事だつたら、お前は犬より劣つた狐だ。如何しても今日中に大廣木正宗さまの肉の宮を俺の前に「つん」出して下さらなくちゃ、もう此お寅もお給仕致しませぬぞや。お給仕どころか、皆宮から放り出して焼いて了ふのだから、お前さまも今日は千騎一騎の處だ。狐が出世して神の名を名告り、結構なお給仕をして頂いた方がよいか、放り出されたがよいか、ここは一つ思案のし所ぢやぞや。此お寅に對しても素知らぬ顔をして居られる義理ぢやあるまい」

と何時の間にやら、人の前も忘れて大きな聲で喋り出し、ハツと氣がつき袖に口をあて、顔を隠しながら教祖の館へ逸早く姿を隠した。

五三公、萬公はアク、タク、テクを信者の中へ交へ、一同の噂を聞き取らしむ
べく云ひ含めおき、松姫の館をさして上つて行く。

七五三の太鼓の音 響き渡ると諸共に

彼處や此處の宿舎より 寄り集まりし信徒は

大門神社の廣前に 有難涙を零しつつ

鼻汁をすすつて太祝詞 唱へ居るこそ殊勝なれ

お寅婆さまは中啓を 右手にキチンと握りしめ

左の手にて袖たたみ 其足音も淑かに

水色袴をサラサラと 音させながら五三公や

萬公其外三人を 後に從へ神壇の

前に現はれ叩頭し 手を拍ち終り例の如

天津祝詞を奏上し 生神言を宣りつれど

心亂れし其故か 側より耳たて覗へば

以前の如く不可思議な

祝詞の如くに聞え來る

心のせいが耳のせいか

或は曲津の悪戯か

合點の行かぬ次第ぢやと

五三公、萬公初めとし

竝み居る信者も首傾げ

思案にくれて居たりけり

中上先生のアクさまは

鳥なき郷の蝙蝠を

氣取つて壇上にはね上り

高卓子を前に置き

コツプの水をグツと飲み

演説氣取りで述べ立てる

其スタイルの可笑しさよ

懐探りて塵紙を

取り出し鼻をツンとかみ

又もや紙を折り重ね

再び鼻をツンとかみ

目【やに】を拭ひ齒糞とり

無雜作に懐へつつ込んで

又もやグツと水を飲み

オホンと一聲咳拂ひ

☐ これこれ満場の諸君たち

貴方は此處の神様を

信仰なさるは宜けれども

随分用心なさらぬと

商賣繁昌病氣平癒

子孫長久は中々に

思うた様には出来ませぬ

天國淨土の有様を

皆さま心に刻み込み

中有界や地獄道

いろいろ雑多の神様の

尊き教を體得し

置かねば何程信神を

して見た處で無益ぞや

私はもとはバラモンの

神に仕へた者ですが

野中の森で圖らずも

三五教の宣傳使

治國別の弟なる

松彦一行に廻り會ひ

誠の道をよく悟り

此處迄ついて参りました

まだ温々の信者として

教理はしつかり知らねども

岡目八目人の目は

あんまり違ふものでない

バラモン教に比ぶれば

ウラナイ教はましだらう

さはさりながら皆さまよ 此處に祀つた神さまは

天地の元の根本の 月日の神や世の初め

御用なされた神さまが 祀つてあると思ひますか

それ程尊い神ならば ウラナイ教を開いたる

高姫さまは何として 三五教に兜脱ぎ

黒姫さまと諸共に 神の司になつただらう

ここの點をばよくよくも 考へなさればウラナイの

教の値打も分るでせう 正宗さまの肉宮は

信者となつて來て居つた 衣笠村のお民さまと

暗に紛れて此館 脱け出で一本橋渡り

野中の森を乗り越えて もう今頃は河鹿山

祠の森の近邊に 逃げて行つたに違ひない

お寅婆さまが驚いて 髪ふり亂し其後を

追つ驅け行きし其様を 眺めて愛想がつきたぞえ

之でも皆さま御一同は
まだ懲りずまにウラナイの

道を信仰なされますか
一寸意見が尋ねたい

同じ事なら三五の
神の教を信仰して

喜び勇んで現界に
生れ出でたる本分を

盡して神をよく信じ
天國浄土へ上るべき

準備を早くなされませ
松姫さまは久し振り

別れて程經し夫に會ひ
夫婦親子の名告りをば

首尾克くなされましたぞや
頂上に建つた石の宮

三社ともに祀り替へ
此世の元の神様を

齋きまつりて天地に
怯ぢも恐れも致さない

國治立の大神の
誠の御靈を鎮祭し

神の恵を十分に
頂く事になりました

是非に今夜は小北山
小宮の端に至る迄

一つも残らず祀り替へ
變性男子の御靈

教へ給ひし神様を お祀り替へる段取と

愈なつて來ましたぞ 嘸や皆さま驚いて

狼狽へなさることだらう もしや嫌なら今の内

ここをば捨ててスタスタと 吾家をさしてお歸りよ

あんまりうまい口車 乗り切りなさつた皆さまは

容易に私の言ふ事を 受取り遊ばす筈はない

もしや此中一人でも 分つた人があるならば

今夜の此處の御遷宮に 参加なさるが宜しからう

強つて勧めはせぬ程に 一寸氣をつけ置きます

あゝ惟神々々 御靈幸はひましますよ

斯の如くアク公は小北山の祭神の素性をスツパ抜いた。百人許り集まつてゐた

金太郎の信者は俄に騒ぎ出し、形勢刻々に怪しくなり、彼方此方の隅々から、

「アク公とやらを引摺り落せ、叩き伸ばせ、道場破りだ、宮つぶしだ。俺達は、

こんなことを聞いて見逃しにやならない。リントウビテン大臣の生宮が承知致さぬ」

と喚き立てるものがある。一方には岩照姫の生宮が承知致さぬぞやと、金切り聲を絞つて泣聲でぞめく。其外五六七成就の大神、木曾義姫の大神、大照皇大神宮の肉宮などと自稱する信者が、俄に狂ひ立ち、壇上のアクを目がけて襲撃し、鐵拳の雨を降らす、足を取つて引摺りおとす、恰も日比谷ヶ原の選良其儘の光景を演出した。アクは人込の中を、スバしこく潜つて姿を隠した。其代りにタクが捉へられ、悪言暴語の代償として鐵拳の雨を浴びせかけられ半死半生となつて、其場に倒れて了つた。忽ち大門神社の廣前は阿鼻叫喚、一大修羅場が勃發することとなつた。あゝ叶はぬから目玉飛出しましたませよ。

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 北村隆光録)

第四章

沸騰〔一二二四〕

リントウビテン大神の肉の宮と自稱する、細作りのオホン徳利の様な顔した男、糊付物の様に固くなり、タクの首筋をグツと握りて強力に押へ付けながら、喜久「コ、コラ、キ、貴様は何處の奴だい。この結構な地の高天原を何と心得て居るか。此處は人民の肉體の初まつた元だぞ、エーン。もつたいなくも大將軍様が、常世姫の命と共に、人間の種は申すに及ばず、五穀、わさ物、すゑ物、鳥獸、蟲族に至るまでお生み遊ばした、根本の根本の神聖な、結構な結構な御地場だ、エーン。貴様等のやうなフワフワの風來者に、昔の神様の因縁が分つて耐らうかい。サア、リントウビテン大神の肉の生宮が、見せしめのために、其方をふん縛り、あの首懸け松に引っかけてやらう。オイ木曾義姫の生宮、早く綱をもつて来い」

木曾義姫の生宮と云はれた女は、喜久公の女房お覺であつた。お覺はおるおる聲を出して、悲しさと腹立たしさにびりびり慄へて居る。又一方から、一人の男が立ち現はれ、

「コリヤ、貴様はバラモン教から三五教へ鞍替へ致した不信仰者の癖に、何を偉

さうにぬかすのだ、エーン。俺を誰だと心得て居る、勿體なくも五六七成就の大
神様の生宮だぞ。貴様のやうな悪魔が天下を横行するよつて、この世の中が日に
増し亂れて來るのだ。さうだから、天の五六七の大神様が小北山の聖場に現はれ
て、神政成就のお仕組をしてゐるのだ。サア速に大神様にお詫を致すか、どうだ、
エーン。この竹さまを何と心得て居る。聞くに耐へざる雑言無禮の言葉を並べ、
この聖場を汚さむとする。返答次第で容赦はならぬ』
と喚き立てる。

タク『リントウビテンか五六七成就が知らぬが、俺はタクと云ふものだ。やかま
しく云つたのはアクが云つたのだ。なぜアクをつかまへて詮議をせぬのか、俺の
迷惑ぢやないか。勿體なくも神の宿りたまふお頭を打擲きやつて、エーン、そ
れでも神の信仰と云へるか。耄碌不成就の神の生宮め』
竹『耄碌不成就の神とは何だ、狸野郎め、もう了簡はならぬぞ』

竹公の女房お福は目を釣り上げ、口をもがもがさせながら首を頻りに振り、
旭の豊榮昇り姫の大神が氣をつけるぞや。五六七成就の大神の生宮殿、リント

ウビテン大神の生宮殿、木曾義姫の肉の宮殿、暫らく待つて下されよ。今に豊榮
昇り姫の生宮が善と悪とを立別けて御目にかけるぞや。アク、タク、テクの如き
人間を相手に致すぢやないぞ。今の人間は神でも叶はぬやうな理屈を轉るによつ
て神でも口には叶はぬぞよ。今に實地を見せて改心を致させてやるから、お控へ
なされよ。旭の豊榮昇り姫が氣をつけるぞよ。この男はアクを働いて行き詰り、
此小北山の神殿へ強請に來よつた、アク公であるぞよ。こんな四つ足人間に相手
になりて居りたら、又熊公のやうに駄々をこねられて、一萬兩呉れと申すぞよ。
ぢやと申して一萬兩は愚か、一錢たりともやることはならぬぞよ。又此のタクは、
アクの委託を受けて來て居るのだから、澤山のお金を絞るつもりで居るなれど金
神が許さぬぞや。そこに慄うて居る男は手癖が悪から「テク」と名がついたの
であるぞよ。早く改心致さぬと眩暈が來るぞよ。神政成就の御時節が來て居るの
に、何をグツグツして居るのだ。人間で神の事は分らぬぞや。ウンウンウン
テク「アハ、ハ、ハ、何を吐しやがるのだい。アタ阿呆らしい。缺伸の友呼び、猿
の木登り姫の生宮奴、能くもそんな馬鹿な事が云へたものだ。サアこれから俺が

審神をしてやらう、こりや耄碌不成就の神の生宮、早くタクの體を離しよらぬか、今にグツグツ致して居ると、上義姫の肉の宮がお出で遊ばしたら、貴様は忽ち免職だぞ。こりやカリン糖、鼬貂の大神奴が、鼬貂の肉宮、貴様も同類だ。今に末代日の王天の大神の生宮に告發するからさう思へ」

竹「何と言つても貴様が道場破りに來たのだから、上義姫さまだつて末代さまだつて、お叱り遊ばす道理があらうか、サア首懸け松へ引っかけてやらう」

後の方から又一人の女が首をふり囀り出した。

「此方は岩照姫の神の生宮だ。此場の争ひは神が預かるぞや、お鎮まりなさい」

喜久「ヤア、これはこれは岩照姫の生宮様、貴女は生羽神社大神様の奥様、御仲裁とは恐れ入ります。然らば貴女のお脇立たるリントウビテンの大神、オイ五七成就の大神の生宮、お前も鎮まつたらどうだ。岩照姫の肉の生宮様のお言葉には背かれまいぞ」

竹「五七成就の大神も、それなら、これで鎮まらう」

テク「アハ、ハ、ハ、いや有難う。岩挺姫様、やつぱり貴女は神力がありますなア。

なるほど岩挺姫様ほどあつて、岩でも挺でも動かぬ御神力だ。南無岩挺大明神さ

ま、叶はぬから靈幸倍坐世たまちはへませ」

かくガヤガヤと亂癡氣騒ぎの最中に慌しくやつて來たのは、お寅にお菊、お千代の三人であつた。

お寅はこの有様を見て、一寸ばかり吃驚したが遠の強者、ジツクリと様子を考へ、仲裁の勞を取らむと言靈を打ち出した。

「これこれ竹さま喜久さまえ 旭の豊榮昇りさま

木曾義姫の肉の宮 大事のお客をつかまへて

何を愚圖々々言ひなさる 五六七成就の大神も

リントウビテンの大神も お前さまの行ひ悪ければ

忽ち歸つて仕舞ひますぞ 一を聞いたら十を知る

氣の利いた身魂でない事にや どうしても神業はつとまらぬ

假令アクさまがどう云はうと タク、テクさまが笑ふとも

そんな枝葉の問題を 捉へてゴテゴテやかましう

目に角立てて泡を吹き 怒り散らせる時ぢやない

皆さま考へなさいませ これのお山に祀つたる

二十三柱の神さまは 高姫さまが言ひ出した

素性の分らぬものばかり それに勿體をつけなされ

へぐれのへぐれのへぐれ武者 身魂の變化れたへぐれ神社

何ぢや彼んぢやと旨い事 構へて神名をつけて置き

朝な夕なに一心に 祀つて居たが何一つ

神徳現はれない故に 肝腎要の教祖さまが

眼をさまして三五の 道にお入りなさつたは

皆さま知つて居る通り 蝶蜷別の教祖さまが

糟を拾うて小北山 開いて祀つた神様ぢや

それ故曲津が憑依して 玉則姫と云うて居た

お民と昨夕手を引いて 私頭を打ち叩き

お金を取り出し懐に入れてサツサと逃げ出し

お民の奴の手を引いて スタスタ逃げて行きよつた

それでも蠨螋別さまは 正直一途の人だから

お寅は決して厭やせぬ 神さまだとして其通り

お憎みなさらう筈がない そんなくだらぬ喧嘩をば

ゴテゴテして居る間があれば お前等の教の親とます

正宗さまが一時も 早く歸つて来るよに

御祈願なさるがよからうよ グツグツして居る時ぢやない

魔我彦だとして其通り 玉則姫のお民をば

正宗さまにさらはれて どうして男が立ちますか

私も聊か氣が揉める 皆さま早う神様に

お祈りなさるがよからうぞ とは云ふものの小北山

神に祈ると思へども 何とはなしに信用が

一寸置けなくなつて來た ならう事なら皆さまよ

あななひけうの神様を
祈つて下さる氣はないか

叶はぬ時の神頼み
正宗さまが歸つたら

又其後で更めて
これのお山に祀つたる

二十三柱の神様を
拜めばそれでよいぢやないか

今の間は三五の
神をたらしめて手を合せ

拜み倒して正宗の
肉のお宮を逸早く

ここへ歸して貰はねば
お寅の胸がをさまらぬ

これこれ魔我彦、義理天上
何をグツグツして居るか

一つ鉢巻締め直し
一生懸命三五の

神を祈つてお民奴と
目ひき手を引き袖を引き

一旦この場を逐電し
お民の奴を手の中に

丸めて私の禍を
早く除いて呉れるよに

何故拜まぬか焦つたい
これこれ皆の信者さま

何をクツクツ笑ふのだ
神に對して濟みませぬ

早くお詫をした上で 神の御爲め人の爲め

殊更お寅の身のために 一心不亂に祈つとくれ

義理天上の御教を 朝な夕なに聞いた人

ちつとは義理も分るだらう 早く拜んで下されよ

これこれタクさま、テクさまも 一緒に拜んで下しやんせ

私は腹が立つわいな 腹立つばかりか氣が揉める

あゝ惟神々々 お寅が神の御前に

赤心こめて頼みます」

と一生懸命に、恥も外聞も忘れて、仲裁どころか、信者に向ひ、自分の戀男の引き戻しを早く祈つて呉れなくては、信者としての義理が濟むまいと、妙な所へ理屈をつけて、嫉妬の餘炎をもらして居る。

タク「アハ、ハ、ハ、ここへ來てから痛い目や、苦しい目や、をかしい目や、面白

い目に遇はされ、今又お寅さまの婆勇を拜見して、實に爽快の念に打たれました。

年はとつても矢張り若い男を亭主に持つだけあつて元氣旺盛なものぢやな、いやもうお寅さまの精力家には舌を巻きましたよ。啞然が中有に迷ひましたよ。實に小北山と言ふ處は、種物神社が祀つてあるだけあつて、澤山の話の種を頂戴致しました。これが小北山へ吾々の參拜した餘徳と云ふものだ。南無種物神社大神殿、守りたまへ幸へたまへ」

テク「お寅さま、随分ウライナイ教には英傑が澤山に居りますね。第一五六七成就の大神の生宮、リントウビテン大神の生宮、旭の豊榮昇り姫、木曾義姫なんかの活動振りと云つたら、随分見物でしたよ。それに、も一つ感心なのは岩照姫さまの生宮だつた。いやあまりの御神徳の絶無なのに感心致しました。オツホ、竹「おい、テク、テクの棒、お前はここへ騷りに來たのか、冷かしに來たのか、エーン、怪しからぬ事を云ふぢやないか。五六七成就の生宮を耄碌不成就の生宮だなんて言つたぢやないか。どこが耄碌だい」

テク「今は世が逆様になつて居るから、逆様を云つたのだよ。五六七の世が成就致したならば、萬歳を祝するために縁毛の龜がお祝に出て來て踊るだらうと思つ

たから、緑毛を逆様に読んで毛縁と云つたのだよ。何事も見直し聞き直すのだよ。それが神ながらの道だ。あゝ皆に「力チ」こまれて、叶はぬからたまちはへませ、
叶はぬからたまちはへませ」
一同「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 加藤明子録)

第五章 菊の薫(一一二一五)

お菊は満座の騷擾を見て、慌しく壇上に登り、白扇をもつて卓の脚を叩きながら歌ひ始めた。

「ウラナイ教の大教主
正宗さまと名告りつつ
蝶蝶別は大廣木
高姫さまの後襲ひ

魔我彦さまの義理天上 怪しき日の出の神さまと

北山村を立出でて こんな所へ出張し

唯一無二なる聖場と 讚へてお寅の鈴野姫

人には云はぬ隠し妻 夫婦の水火を合せつつ

大神業を起さむと 朝から晩まで酒を飲み

世に落ち給ひし神さまに 神酒を献上するといひ

朝から晩まで「づぶ」六に 酔つてムつた其姿

張子の虎のやうだつた 露國の土地に生れたる

大海原の女神が 大「ふね」さまと生れ變り

その又靈が變化して 八坂の盛竹大臣と

御成りなさつたといふ事だ 大舟さまの兄弟に

大岩大藤二柱 あるとか教へて下さつた

元下則武日吉姫 夫婦の仲に出來た子が

時文といつて其家來 八坂盛竹を隨へて

神の御國に渡り來る

其又日吉の姫さまは

大海原姫又の御名

平野の姫の變化だと

譯のわからぬ御説教

何時も御聞かせ遊ばした

露國の土地の頭領は

山竹さまで又の名は

黄龍姫と言ったげな

黄龍姫は又へぐれ

大鶴姫とならしやつた

常世の姫が又へぐれ

猿田子の姫や平野姫

大海原姫や日吉姫

てるむす孟子路易出づる

何だかわけの分らない

前後矛盾の御神名

【てるむす】姫の又の名は

【たらた】姫だと云ふ事だ

口から馬が生れたり

獅子が飛出る孔雀生む

蜈蚣に蛇に蟆蛙

その又蛙と狐さまが

つるんで人を生んだとか

わけのわからぬ事ばかり

酒の上にてベラベラと

仰有るのだから忪らない

之を思へばアクさまが

名の無き神ぢやというたのも あながち無理ではあらうまい

神の戸籍は何うあると 決して心配は要りませぬ

ただ神徳を頂いて 此世が樂に暮せたら

それで皆さまは宜しかる 天地尋常の神さまや

青森白木上の神 日の出神の義理天上

常世の姫や黄龍姫 大足姫や言上姫

金山姫や未姫 地上大臣地上丸

【たがやし】大臣杵築姫 朝日子姫や【みのる】姫

【はやざと】姫や地上姫 以上十六神柱

これが根本の根本の 昔の昔のさる昔

まだも昔のその昔 靈の【もと】なる十六の

お菊の御魂と云ふ事だ お菊は今や十六の

冬を迎へた花盛り 神の御名をばとらまへて

ゴテゴテいふより此の菊を 拜んだ方が御利益が

よつぽど澤山あるだる

義理天上が預つて

御育て申した七人の

神は天照彦さまに

天若彦や八王さま

大野大臣大廣木

正宗さまや同情の

ふかい道上義則や

柔道行成此神を

合せて二十三神と

崇めまつると聞きました

此神さまは親が子に

なるかと思へば子が親に

なつたり又も主従に

なつたりなされてこれといふ

定つた判定がつきませぬ

不思議と思つて正宗に

神名の由來を聞いた時

正宗さまは仰有つた

へぐれのへぐれのへぐれ武者

「へぐれ」神社と云ふぢやないか

如何に矛盾があるとても

へぐれといへば一言で

どんな事でも解決が

つくではないかお菊さま

馬鹿正直に神さまを

崇める奴が何處にある

お前は文明の空気をば

吸^すうた女^{をんな}に似^にもやらず
 馬鹿^{ばかしやうぢき}正直^{ちか}のものだたと
 笑^{わら}うてゐられた事^{こと}がある
 之^{これ}を思^{おも}へば此^{この}山^{やま}に
 祀^{まつ}つた神^{かみ}は皆^{みな}怪^{あや}し
 末^{まつ}代^{だい}日^ひの王^{わう}天^{てん}の神^{かみ}も
 上^{じやうぎ}義^ぎの姫^{ひめ}も皆^{みな}嘘^{うそ}だ
 五^み六^{ろく}七^{しち}成^{じやう}就^{じゆ}の肉^{にく}宮^{みや}も
 リントウビテンの肉^{にく}宮^{みや}も
 生^{いき}羽^ば神^{じん}社^{しゃ}も岩^{いは}照^{てる}姫^{ひめ}も
 旭^{あさひ}の豊^{とよ}榮^{さか}昇^{のぼ}り姫^{ひめ}も
 木^き曾^そ義^{よし}姫^{ひめ}の肉^{にく}宮^{みや}も
 日^ひの丸^{まる}姫^{ひめ}も天^{てん}上^{じやう}さまも
 玉^{たま}則^{のり}姫^{ひめ}も大^{だい}將^{しやう}軍^{ぐん}も
 常^{とこよ}世^よの姫^{ひめ}も皆^{みな}「うそ」だ
 四^し個^この野^や狐^{かん}が憑^{のり}依^{いつ}り
 こんな他^た愛^{あい}もない事^{こと}を
 喋^{しゃべ}つて人^{ひと}を暗^{あん}黒^{こく}へ
 導^{みちび}くものと覺^{おぼ}えたり
 お菊^{きく}はこれから皆^{みな}様^{さま}へ
 立^{りつ}腹^{ぶく}させているいろと
 責^せめ立^たてられるか知^しらねども
 他^{ひと}人^とを助^{たす}ける神^{かみ}の道^{みち}
 嘘^{うそ}と知^しりつつこれが又^{また}
 何^どうして黙^{だま}つて居^をられませう
 何^{なに}卒^と妾^{むすめ}の言^いふ事^{こと}を
 直^な日^ひに見^み直^なし聞^き直^なし
 よくよく悟^{さと}つて下^{くだ}さんせ

生命いのちをかけて皆みなさまに 一伍一いちぶしじふの内幕うちまくを

ここに打明うちあけ奉たてまつる あゝ惟神かむながらかむながら々々

みたま幸さちはひましませよ 旭あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まこと一つでない事ことにや 此世このよに榮さかえて行ゆかれない

妾わたしは未み來らいが恐おそろしい 短みじかい此世このよに生命いのちをば

保たもたむために嘘うそばかり ならべて人ひとを迷まよはせつ

永ながき地獄ぢごくの苦くるしみの 種たね子を蒔まくのは嫌いやだ故ゆゑ

物質ぶつしつ上の得失とくしつを かへりみせずあめつちに天地あめつちの

眞理しんりをここに現あらはして 迷まよひ切きつたる人々ひとびとの

御眼おんめをさましおきまする 悪わるく思おもうて下くださるな

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる あゝ惟神かむながらかむながら々々

みたま幸さちはひましませよ 『

テクは歌ひ出した。

松彦さまに随ひて
小北の山の坂道を

テクテク上り来て見れば
木造石造いろいろの

澤山な宮が立つてゐる
お寅婆さまに随ひて

大門神社の受付を
たづねて見れば白衣をば

つけたる爺さまがただ一人
蕪大根をセツセツと

一生懸命に描いてゐる
不思議な神もあるものと

疑ひながら山中を
廻つていよいよ曲神の

醜の住處と悟りました
大方此處は幽冥の

世界に通づる八衢か
六道の辻かさもなくば

八萬地獄の入口と
思つた事は違はない

いよいよ真相を暴露して
教祖と名告つた蝶螈別さまは

夫婦喧嘩をおつ始め
お民とひそかに喋し合ひ

闇にまぎれてすたすたと 尻尾をまいて逃げ出した

後姿をながむれば 狐狸か山犬か

合點の行かぬ其姿 後から唸を立てながら

夜叉の如くに追っかける お寅婆さまを眺むれば

牛にもあらず虎ならず よくよく見れば古狐

戀路の暗に閉されて 後前見ずにトントンと

戀しき男の後追うて 生命からがら追つて行く

小北の山の神殿が 果して誠の神様の

集まりいます所なれば 肝腎要の教祖さま

醜の悪魔に憑依され 靈をぬかれて此場をば

逃出しなざる筈はない 此有様を見たならば

如何なる堅き迷信も 忽ち夢が醒めるだろ

わたしは神の道を行く 誠一つのテク司

決して他處の教をば 誹る心はなけれども

見るに見かねて身を忘れ 憎まれ口をたたくのだ
此場に集まる人々よ 直日に見直し宣り直し
よきに省み給へかし あゝ惟神々々
みたま幸はひましませよ

斯くテクが歌ひ終るや、又もや大廣前は喧々囂々として騒ぎ立て、怒るもの、
泣くもの、笑ふもの、叫ぶもの、千態萬状、言語に絶する醜態を演出し始めた。
テクは壇上より聲を張りあげて、

道のため世人のために身をすてて

生言靈を宣り初めにけり。

人々よ心安らに平かに

しづまりませよ神の大前。

やがて今元の誠の神様を

齋いつきまつりて世よを開ひらきゆかむ。

閑こがらしにうたれて散ちりゆく木き々の葉はは

枝えだにとどまる力ちからなきもの。

閑こがらしに吹ふかれたたかれ何どこ處こまでも

梢しやうにのこるは生いきたみたまぞ。

何なに事ことの出いで來きたるとも世よの元もとの

神かみにしたがへ百ももの人ひと々びと。

蝶いもり別わけ、魔ま我が彦ひこ、お寅とら婆ばアさまの

迷まよふ心こころを照てらす今日けふかな。

魔ま我が彦ひこも今日けふを嘸さぞかし悦よろこばむ

迷まよひ切きつたる【やみ】をはなれて

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 外山豊二録)

第六章 千代心（一一二一六）

竹公は立上り、演壇に登つて面をふくらし、錫の瓶からコップに水を、ついで
は飲みついでには飲み、オホン徳利の様な面をさらし、顎を斜に前の方へニコツと
つき出し、両手で卓をグツと押へ、腰を弓に曲げながら、述懐を述べ始めた。

浮木の村に生れたる 竹公さまとは私のこと

親の代から蓄へた 資産は餘り多くない

さはさりながら夫婦等が 一生遊んで暮すだけ

物質的の財産が あつた所へお寅さま

朝も早うから飛んで来て ウラナイ教の祝詞をば

聲高々と唱へ上げ コレコレモウシ竹さまよ

此世の立替始まつて 悪の世界は滅亡し

世界は三分に減りますぞ さうした後へ世を救ふ

五六七菩薩が現はれて 結構な神世を立てなさる

之を神政成就と 教祖のきみが申された

結構な事ではないかいな こんな時代に生れ来た

私は云ふも更なれど お前等夫婦のお靈は

昔の昔のさる昔 此世の先祖とあれませる

國治立の神様の 根本の根本の御系統

五六七成就の大神の 靈がうつつてゝるぞや

物質的の財産を 皆神様に獻り

家をたたんで小北山 大聖場に参上り

朝から晩まで結構な 御用を遊ばす氣はないか

お前の家のお福さま こなたも結構なお靈だ

旭の豊榮昇り姫 五六七神政成就の

尊き神の奥様だ なぞと甘い事竝べたて

枯木に餅がなるやうに よい事づくめで云ふ故に

首くびを傾かたむけ思案しあんする 間まもなくお福ふくが手てをふつて

突然とつぜん起おこつた神憑かむがかり 旭あさひの豊榮とよさかのほ昇のぼり姫ひめ

神かみの憑うつつた因縁いんねんの 靈みたまのお福ふくぢや竹公たけこうよ

お前まへは五み六ろく七しち成じやう就じゆの 皇神すめかみさま様さまの生宮いきみやぞ

旭あさひの申まをす神勅しんちよくを もしも疑うたがひ反そむくなら

きつい神罰しんばつ當あたるぞや 七生しちしやうまでも崇たたるぞと

現在げんざい在に女房にようぼうの口くちをかり なだめつ おどしつ言いふ故ゆゑに

神かみはウソをば云いはないと 思おもひ込こんだが病やみつきで

近所きんじよとなり隣りや親族しんぞくの とめるも聞きかず家倉いへくらを

二足にそく三文さんもんに賣飛うりとばし 残のこらずお金かねにとりまとめ

何いづれ此世このよが替かはるのだ 物質ぶつしつてき的てきの財寶ざいほうは

ガラガラガラガラ メチヤメチヤと 今いまになるのは知しれてゐる

結構けつこうな神かみの御教みをしへを 人ひとより先さきに聞きいたのは

ヤツパリ身魂みたまのよい故ゆゑだ コリヤ斯かうしては居をられぬと

お寅婆さまのお言葉を

一も二もなく承諾し

夫婦は茲にウラナイの

信者の中の世話役と

選まれ朝から日暮まで

碌でないもの食はされて

蕪大根芋牛蒡

これを唯一の御馳走と

今まで勤めて來ましたが

タク、テクさまやお菊さまの

今の話の聞くにつけ

どうやら眼がさめかけた

五六七成就の大神と

得意になつてゐたけれど

どうやら此奴ア怪しいぞ

小北の山の古狸

俺の體を宿として

巢ぐつてゐるに違ひない

女房お福の體にも

古い狸が巢をくんで

天眼通だといひながら

女房の眼をくらませつ

妙な所を見聞きさせ

馬鹿にしてゐるに違ひない

思へば思へば恥しや

騙したお寅さまは憎けれど

これもヤツパリ昔から

惡を働いた其酬い

今いまに現あらはれ來きたのだる
こんな事ことにて今迄いままでの

罪つみや汚けがれがスツパリと
拂はらはれ清きよまる事ことならば

眞まことに安やすい代償だいしやうだ
かうなる上うへは三五あななひの

誠まことの神かみの御教みをしへを
遵奉じゆんぽうなして道みちの爲ため

世よびと人の爲ために眞心まごころを
捧ささげまつらむ惟神かむながら

神かみの御前みまへにねぎまつる
お福ふくよお前まへもこれからは

心こころをスツパリ立直たてなほし
旭あさひの豊榮とよさかのぼ昇のぼり姫ひめ

なぞといふよな慢心まんしんを
致いたしちやならない惟神かむながら

神かみに目めざめて竹公たけこうが
一寸ちよつとお前まへに氣きをつける

あゝ惟神かむながらかむながら々々
御靈みたま幸さちはひましませよ」

お千代ちよは壇上だんじやうに登のぼり、
小ちひさき顔かほに笑ゑみを湛たたへながら歌うたひ出だした。

天地てんちを造つくり給たまひたる
尊たふとき誠まことの神様かみさまの

智慧と力に比ぶれば 神の生宮人間の

知識と力は大海の 水一滴に如かざらむ

そは云ふものの人は又 萬の物の靈長だ

尊き神が守護して 守り給へる上からは

決して曲の犯すべき 道理はなかる、あの様に

一心不亂に眞心を こめて天地の神様を

祈り遊ばす上からは 其信仰の力にて

八岐大蛇も醜鬼も 金毛九尾も如何にして

犯さむ由もなかるべし これの御山に集まれる

人は残らず世の中に すぐれて正しき人ばかり

ちつとは理解のある方と 思つて居たに情なや

子供の私の目にさへも 分り切つたる詐りが

欲に迷つた魂にや てつきり誠と見えるそな

尊き誠の神様を 朝から晩まで誹謗して

名もなき詐り神どもを 立派なお宮の中に入れ

鬚面男が嬉しそに 十能のやうな手を合せ

一生懸命に祈るさま 横から眺めた其時は

フツと吹出し笑ひこけ 尻餅ついて【べべ】よごし

松姫さまにお叱言を 頂戴致した事もある

ホんに人間といふものは 身欲に迷うた其時は

二つの眼もくらみはて 耳は塞がり曲事が

神の慈言に響くのか 五官の作用は忽ちに

大變調を來しつつ 肝腎要の心靈まで

ねぢけ曇りてあとさきの 見えぬ心の盲目と

なつて憐れな生涯を 送るに至るあはれさよ

松姫さまは朝夕に 皆さま方の迷信を

拂ひて誠の大道に 救はむものと心をば

配らせ給ひ皇神の 眞の御名を讃へむと

心を焦ち給へども

神素盞鳴大神や

豊國姫大御神

かかる尊き神名を

公然唱ふるものならば

蝶螭別が目をむいて

御機嫌殊に斜なり

婆アさままでが尾について

いかい小言を云ふ故に

こらへ忍んで今日迄も

館を別になされつつ

人に聞かさぬやうにして

誠の神を一心に

祈つてムつた甲斐あつて

今日はいよいよ天地を

包んだ雲は晴れ渡り

誠の日の出神様が

輝き給ふ如くなる

目出度き道の開け口

謹みここに祝します

只何事も神様の

深き仕組にあやつられ

曲津の神の手をかつて

よせられ來たのに違ひない

心の曇つた人間を

初めの中から正直な

誠ばかりを教へたら

中々容易によりつかぬ

それ故天地の神様は
 御目をとちて黎明の
 迷へる魂を天國に
 これを思へば皆さまが
 事に一つも仇はない
 立派に仕へまつりたる
 落さずとみに弱らさず
 今日から身魂を立直し
 誠の神の御光が
 あゝ惟神々々
 御靈幸はひまませよ

曲津のなすが儘にして
 來る時をば待たせつつ
 お救ひ下さる有難さ
 今まで神に盡したる
 皆神様の御神業
 殊勳者なれば力をば
 益々勇氣をほり出して
 小北の山の神殿に
 輝き渡るを待ちませう

喜久公は壇上に登り述懐を歌ふ。

𠄎
 蠓蛭別や魔我彦の
 神の司に従ひて

北山村を出立し やうやう此處に來てみれば

坂照山の急坂を コチコチコチと穿ちある

二人の親子がありました 不思議と側に立ちよつて

あなたは何れの神様か お名告りなされて下されと

いと慇懃に尋ぬれば 坊主になつた鶴嘴を

巖の上に投げ出して 滴る汗をふきながら

わしは丑寅金の神 世におちぶれて今は早

いやしき賤の野良仕事 そのひまひまに此山へ

登つて岩を打碎き 尊き神の鎮座ます

下津岩根を親と子が 朝夕穿つて居ります

わたしも卑しき首陀なれど 大將軍の生宮だ

此子の靈は地上丸 何だか知らぬが自ら

一人腕がうごき出し これ程堅い岩山が

いつとはなしに平坦な 場所が澤山出來ました

ここに神さまを祀つたら さぞや結構になりませう

此御言葉に蝶螈別 魔我彦さまは手を拍つて

實に感心々々だ これが人間だつたなら

どうしてここまで開けよぞ てつきりここは聖地だろ

一先づ神に伺うて 實否を尋ね探らむと

私の女房のお覺をば 神のうつらす生宮と

定めて祝詞を奏上し うやうやしくも伺へば

女房のお覺は手をふつて 聲の色まで變へながら

喜久公しつかり聞くがよい お覺はお前の女房だが

木曾義姫の生宮ぞ これから神がかる程に

此聖場に立派なる 神の御舎建つまでは

決して女房と思ふなよ 夜のしとねも別に

河鹿の川で水垢離 夫婦が取つて御神業に

仕へてくれる事ならば 喜久公さまの守護神を

あつばれあら
天晴現はしやりませうと
いと嚴かに宣り給ふ

やまたをろち
八岐大蛇の守護神か
金毛九尾の身魂かと

あん
案じ煩ふ折もあれ
リントウビテン大臣の

いんねんふか
因縁深き生宮と
聞いたる時の嬉しさよ

それより夫婦は朝夕に
普請萬端氣を付けて

夜の目もロクに寝もやらず
御用をつとめて参りました

タク、テク、お寅さまの言ふ事を
眞とすれば吾夫婦

はなし
話にならぬ呆け方
バカの骨頂を盡したと

そろそろ腹が立ち出して
神のお宮を小口から

こはしてやらうと思ふ折
年端もゆかぬお千代さまが

せいめいむく
清明無垢の魂に
尊き神がかかられて

ぜんあくふじ
善惡不二の道理をば
教へ給ひし嬉しさよ

このうへ
モウ此上は何事も
皇大神の御心に

したが
従ひまつり一言も
決して不足は云ひませぬ

其その日ひ々そのひ々ひをたのし樂しんで　しつつかり御ご用ようをいた致しませう
 ここにな竝なみる皆みなさまよ　定さだめてわたし私わたしのことやうな事こと
 思おもうてムごつたでありませう　私わたしにならひ之からは
 只ただ何なに事ごともか神かのまま　謹つしみう敬やまひご御ご奉ほう公こう
 身みもたなしらに勵はげみませう　あゝ惟かむ神な々ながら々かむ
 神かのみ御ま前へにき喜く久こう公こうが　迷まよひの雲くも霧きりふき分わけて
 リントウビテンの稱しやう號がうを　御お返かへしま申ました民たみ草ぐさの
 一ひとつの數かずにく加はへられ　心こころのか限かぎりみ身みのきはみ
 盡つくしまつるを平たひけく　いと安やすらけくき聞きしめせ
 偏ひとへにこひのみ奉たてまつる
 『

(大正一一・一二・一五　舊一〇・二七　松村眞澄録)

第七章 妻難（一二一七）

お覺は歌ふ。

高姫司の開きたる

北山村の本山を

蝶蛸別や魔我彦の

司に従ひ喜久さまと

これの聖地に來て見れば

思ひもよらぬ神憑

思ひがけなや吾魂は

古き昔の因縁で

木曾義姫の守護神

尊き神の御裔と

聞いたる時の驚きは

何に譬へむものもなく

其驚きと嬉しさの

雲に包まれゐたりけり

尊き神の命令は

反くに由なく喜久さまと

三年を越えし今日迄も

身を慎みて褥さへ

別にいく夜の淋しさを

涙と共にしのびつつ

これも昔の神代から 世を持ちあらした天罰が
 酬うて来たのに違ひない かうして身魂の借銭を
 つぐなひ下さる事ならば こんな結構な事はない
 限りもしれぬ罪惡を 直日に見直し聞き直し
 百目の質に編笠を 一介出してすますよな
 ボロイ尊い話ぢやと ここまで教をよく守り
 神に仕へて参りました そのおかげやら今日は又
 結構な事が分り出し 半信半疑の雲はれて
 げに爽快な魂と スツパリ生れ變りました
 これもヤツパリ小北山 鎮まりいます曲神の
 一つはおかげに違ひない 吾身に憑つた神様は
 木曾義姫といふ事ぢや どの狐か知らねども
 ようマア人の肉體を うまく使うたものだなア
 これぢやに依つて人間は 注意をせなくぢやならないと

あななひけつ 三五教の神様が 赤子の口にそら豆を

かみくくめるやう親切に 諭して下さる御仁愛

其お言葉をいつとなく 忘れて了ひウライの

をしへつかさ 教司の高姫が 水も漏らさぬ辨舌に

迷うた爲に肝腎の 尊き親を袖にして

譯の分らぬ神様に 迷うて來たのが情ない

大きな顔して家の外 どうしてこれが歩けよか

とは云ふもののこれも亦 仁慈無限の神様の

お試しならむと見直せば 見直されない事もない

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

此神山に天地の 誠の神の降りまし

世人を普く善道に 教へ導き吾身魂

救ひ給ひて天國の 榮えを與へ給へかし

旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令^{たとへ}大地^{だいち}は沈^{しづ}むとも
星^{ほし}は天^{てん}より下^{くだ}るとも

山^{やま}さけ海^{うみ}はあすると
三五^{あななひけう}教^{しんとく}の神^{しん}徳^{とく}に

眼^{まなこ}を覺^さした上^{うへ}からは
如何^{いか}なる事^{こと}の來^{きた}るとも

決^{けつ}して邪^{じゃ}教^{けう}にや迷^{まよ}はない
曇^{くも}つた眼^{まなこ}は今^{いま}あけて

眞^{しん}如^{にょ}の光^{くわう}明^{みやう}ありありと
心^{こころ}の海^{うみ}に照^てり出^だした

仁^{じん}慈^じ無^む限^{げん}の神^{かみ}様^{さま}よ
天^{てん}の誠^{まこと}の五^み六^{ろく}七^{しち}様

何^{なに}卒^そ々^な々^な吾^{われ}々^{われ}が
汚^{きた}い心^{こころ}を憐^{あは}れみ

誠^{まこと}一^{ひと}つ^つの三^{あな}五^なの
教^{をしへ}を完^う全^まに委^つ曲^ばかに

さ^さと^とら^らせ給^{たま}へ惟^か神^む 珍^{うづ}の御^み前^{まへ}に願^ねぎまつる

お福^{ふく}はまた歌^{うた}ふ。

【さだ】子^この姫^{ひめ}の肉^{にく}宮^{みや}と
鈴^{すず}野^のの姫^{ひめ}をかね給^{たま}ふ

内^{ない}事^{じつ}司^{かさ}のお寅^{とら}さま
吾^{わが}家^やに現^{あら}はれ來^{きた}りまし

ウラナイ教の信仰を

お勧めなさつた時もある

不思議や妾の身体は

地震の如く震動し

胸苦しくもなつて来た

此奴ア不思議とわれながら

怪しみ疑ふ時もある

腹の底からウンウンと

唸り出したる玉ゴロが

漸く喉へ上りつめ

口を切らうとした時は

後にも先にもないやうな

苦しい思ひを致しました

お寅さまが吾家へ来るや否

不思議な事が出来たのは

偉い神徳ある人だ

只のお方ぢやあらうまい

尊き神の御化身と

信じて拜む折もある

息は追々楽になり

旭の豊榮昇り姫

これからお前は因縁で

俺が肉體かる程に

小北の山へ罷り出で

信仰せよとおごそかに

自分の口から宣り傳ふ

かうなる上は夫婦とも

疑ふ餘地もあらざれば

お寅婆さまの云ふままに 屋財家財を抛つて

これの館に轉住し 吾身に持てる財産は

櫛笄に至るまで 賣代なして神様の

お宮の御用に立てました それから私は何となく

心驕りて知らぬ間に 旭の豊榮昇り姫

靈肉一致の神柱 何たる結構な體よと

夫婦が朝夕會ふ毎に 一人笑壺に入つてみた

然るに何ぞ計らむや 皆さまのお話聞くにつけ

愛想もコソもつきました 何程神の仕組でも

私をこんな目に會はずとは 餘りヒドイ神様ぢや

私はこれからスツパリと 思ひ切ります神いぢり

御幣をかついで笑はれて どうして此世が渡れませう

コレコレもうし竹さまえ お前は五六七成就の

神のお宮ぢやなかつたか まるで狐につままれた

やうな思ひがすぢやないか 思ふ所か正真正銘の

坂照山のド狐が 騙してゐたのに違ひない

コレコレもうし竹さまえ 思ひ切るのは今だらう

グツグツしてると松姫や 松彦さまに又しても

眉毛をよまれ尻の毛を 一本もないまで抜かれますぞや

あゝ怖ろしや怖ろしや 神を表に標榜し

正しき此世の人間を 騙して食はうとする奴は

虎狼の眷屬だ 長居は恐れ逸早く

ここをば立つて歸りませう 竹さまそれが不承知なら

私は勝手に歸にますよ コレコレもうし春さまえ

お前と私と平常から 互に心が解け合うて

しつぽり話をしたぢやないか 私が信仰やめたなら

お前もやめると云ふただる サアサア早く歸りませう

トチ呆け爺の竹さまは まだまだお目がさめませぬ

サアサア早う』と言ひながら 春公さまの手を取つて

太い女がひんにぎり トントントンと廣前を

夜叉の如くに驅け出し 坂道さして歸りゆく

竹公驚き立上り お福の後を追驅けて

旭の豊榮昇り姫 暫く待つた一寸待つた

お前に言ひたい事がある 短氣は損氣ぢや待てしばし

待てと申さば待つがよい 之には深いわけがある』

聲を限りに叫びつつ 坂道指して追うてゆく。

お福は半狂亂の如くになり、河鹿川の川べりにある笠松の麓の堺の神政松の神

木としるしてある千引岩の傍に走りより、

『コリヤ、神政松の神木、よう今迄おれを騙したなア。此普請は俺が蝶蜷別に騙

されて拵へたのだ。モウ今日から信仰をやめた上は、叩き潰さうと何うしようと

私の勝手だ、エ、怪體の悪い』

さまだから、三年先になれば一粒萬倍にして福を返して下さると、蠧螋別や魔我彦が言ひやがつて、人の金を残らず巻上げよつた。丸三年になつた時、今日は萬倍にしてくれるかと思つて待つてゐたら、一文も、どこからもくれやせぬ。それでも神政成就に近付いたら、百萬倍にして返してくれるだると待つてゐたのだ。最前から聞いてみれば、坂照山のド狐に騙されて居つたと云ふぢやないか、阿呆らしい、どうしてあんな處に居れるものか、今まで大勢の信者に旭の豊榮昇り姫様といつて崇められてゐたのに、大勢の前でスツパぬかれて、どうして此お福の顔が立ちますか。お前さまは氣のきかぬ頓馬だから、私が人に顔が會はされないやうにして了つたのだ。此儘泣寝入りをしては世間へ會はず顔がないから、假令何時までかかつて、此岩をひつくり返し潰さねば承知をせないのだよ。竹さま、春さま、何だ、ヒヨツトコ面して、何青い顔してるのだい、さうだから意氣地なしと言はれるのだ」

「貴様がせうもない神憑をするものだから俺までが巻き込まれたのだ。罪は貴様にあるのだ、俺に不足をいふ筋は一つもあるまい」

「それだから頼馬といふのよ。何程嬢が勧めても、夫は夫の権利があるぢやないか、なぜ其時に一言氣をつけてくれないのだ。お前も一緒に賛成をするものだから、此お福も怪しいとは思つては居つたが、竹さまが男の身で居ながら一番に賛成したものだから、ヤツパリ私の守護神は結構な神様だと思つて賛成したのだ。それがヤツパリ當が外れて、世間へ顔出しが出来ぬ事になつて了つたぢやないか。本當にいまましい、アンアン、返せ戻せ、私の出した金を」

「俺だつて、怪しいとは思つて居つたが、お前が一寸も怪しまないものだから、ヤツパリ本眞かと思つたのだ。つまりどちらの魂も間が抜けとつたのだから、責任は両方にある。マア俺の云ふ事を聞いて、マ一遍大廣間まで出て来てくれ、結構な話を聞かして貰つてやるから……」

「ヘン、責任は二人にあるなんて、何とマア卑怯な男だ事、女は陰者、表には立ちませぬぞや。家長權の執行者はお前ぢやないか、何と云つてもお前が悪いのだよ。馬鹿野郎の頓癡氣野郎だよ」

竹公はムツとして、つかみつく、茲に夫婦は組んづ組まれつ、互に髪をつかみ

合ひ、キヤアキヤア犬の噛み合ひのやうに云ひ出した。春公は中に割つて入り、
「マアマア待つて下さい、五六七成就の大神様、旭の豊榮昇り姫の大神様、神様の生宮が人間なみに喧嘩するといふ事がありますか、みつともないぢやムいませぬか。これから五六七神政成就して旭の豊榮昇りに榮える松の神代が出て來うとしてゐるのに、肝腎の神柱がそんな事で如何になりますか。どうぞ三千世界を助けると思つて、春公に免じてお鎮まりを願ひます」

お福「何、春さま、お前はヤツパリわたしを旭の豊榮昇り姫と思つてゐるのかい」
「へーへー、誰が何と云つても私は飽くまで信じます。そして竹さまは何處迄も五六七成就の大神様です、こんな事が違つてなりますものか。私はお寅婆アさまにタク、テク、お菊さまの云ふ事が氣に喰はないのです。ドタマを力チ割つてやると、腕が鳴り肉が躍つて仕方がなかつたのに、神様の前だと思つて涙を呑み辛抱してゐたのだ。誰が何と云つても、五六七成就の大神様、旭の豊榮昇り姫の大神様に間違はありませぬ」

春公の言に二人はケロリと喧嘩を忘れ、ニコニコしながら、

お福ふく「ソラさうでせうねえ、そんな事ことがあつてたまりますものか。コレ竹たけさま、春公はるこうさまが證明しょうめいしてくれるのだから安心あんしんしなさい。これから二人ふたりが小北山こぎたやまを背負せおつて立たねばなりませんので、三千世界さんぜんせかいの爲ためですからね」

竹公たけこう「ウン、さうだな、大變たいへんだな、これから」

お福ふくは腹立はらだちまぎ紛れひに引きむしつて川かはへ流ながした松まつの事ことを思おもひ出だし、忽たちまち大地だいちに平伏ひれふし、拍手かしばでをうつて涙聲なみだこゑ、

「榮さかえの神政しんせい松まつ、ミロク神代かみよの御神木ごしんぼく様さま、十六本じふろくぼんの柱神はしらがみ様さま、眞まことにすまない事ことを致いたしました。どうぞ許ゆるして下さいくだませ、其代そのかはりにすぐ十六本じふろくぼんの松まつを植うゑてお返かへし申まをします、あゝ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ」

春公はるこう「竹たけさまの胸むねの村雲むらくも晴はるさまは

松まつの根元ねもとでキン言げんをふく」

竹公たけこう「アハ、お目出度めでたう」

お福ふく「神様かみさま、眞まことにすみませぬ、有難ありがたうございます、それなら之これから、マいちど一度大廣間おひろまへやらして頂いたきませう」

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 松村眞澄録)

第二篇 狐運怪會こうんくわいくわい

第八章 黒狐くろきつね (一一二—一八)

お寅とらは晝過ひるすぎになつても蝶いもり蝶わけ別べつが歸かへつて來こないので、ソロソロ神かみの神力しんりきを疑うたがひ出だし、松姫館まつひめやかたに驅かけ込こんだ。

お寅とら「ご免めんなさいませ、お邪魔じやまにはなりません、下の御廣間おひろまは随分ずぶん亂らん癡氣ちき騷さわ

ぎが起つてみました。が、餘り御夫婦仲がいいので、お耳に達せなかつたと見えま
すな。ソリヤ無理もムいませぬワ」

松姫「あゝお寅さま、よう来て下さいました、何か急用でも出来ましたのですか」

「コレ、鷹の上義姫様、ようそんな事を又ツケリコと言うてゐられますな。蝶鰯
別さまはどうして下さつたのです。早うて夜明、遅くて晝時分には引寄せてやら
うと仰有つたぢやありませんか。モウ殆ど八つ時、蝶鰯別さまの影もささぬぢや
ありませんか」

「あゝさうでしたねえ、お氣のもめた事でせう。もし松彦さま、蝶鰯別さまはど
うなつたのでせうかな」

松彦「さうだなア、お寅さまの改心次第だ。二つ目にはつねられたり、鼻をねぢ
られたりしられぢや、誰だつてコリコリするからな」

お寅「コレ、鷹の末代様、お前さまは私に何と仰有つた。そんなウソを言つて、
神様の御用する人が、よいのですか。他の人の守護神はウソにした所で、松姫さ
まは上義姫様、あなたは末代様に違ないと、今の今まで深く信じて居りましたが、

そんなこと仰有ると、末代様も上義姫様も、疑はずには居られませぬぞや」

松姫「ホ、ホ、ホ、あのお寅さまの六かしいお顔わいの。私は松姫だと云つてるのに、お前さま等が勝手に松と云ふ字がついとる以上は、末代様の奥様の靈に違ひない。さうすると上義姫の生宮だと、お前さま等がよつてかかつて祭り上げたのぢやないか。決して私の方から上義姫だと名告つたのぢやありませんよ。今更贗だの本物だと云つて貰つても、私に關係も責任もないぢやありませんか」

「そんなこと、あとで承はりませう。一體全體、蝶蝶別さまは何うなさつたのですか。今日歸るとか明日歸るとか、ハツキリと白状しなさい」

「ホ、ホ、ホ、私がかくしたものか何ぞのやうに、白状しなさいとは痛み入ります。あんな酒飲男が二日や三日居らなくてもいいぢやありませんか。何一つ世間の間にも合はず、酒ばかり飲んであられちや、どんな物好きな人だつて、愛想をつかして放り出して了ひますよ。さうすりや止むなく此處へ歸つて來な仕方がないぢやありませんか」

「お金なしに出て居るのなら歸つて來るかも知れませぬが、何と云つても九千兩

の金かねを持つてゐたのですから、其金そのかねを持つて、そこら中ぢやうをお民たみの奴やつとウロつきま
すわいな」

「何程なにほどウロついたつて、遊あそんで食くへば山やまもなくなるとか言いひますから、金かねさへな
くなれば歸かへつて來こられますワイ。何程なにほど澤山たくさんに使つかつても、九千兩きうせんりやうあれば、お民たみさま
と夫婦ふうふが二十年にじふねんや三十年さんじふねんは大丈夫だいぢやうぶですからなア、マアそれ迄までお待まちやしたら何どう
です」

松彦まつひこ「ウツフ、、、」

お寅とら「コレ、末代まつだいさま、何なにが可笑をかしい、私わたしがこれだけ氣きをもんでるのに、お笑わらひ
遊あそばすのか。人ひとの悲かなしみがあなたは可笑をかしいのですか」
と喰くつてかからうとする。

松姫まつひめ「事情じじやうを聞きけばお氣きの毒どくですが、併しかしこれも自分じぶんから出でた鑄さびだから仕方しかたがな
いぢやありませんか。チイと金かねのありさうな信者しんじやに、リントウビテン大臣だいじんとか、
五六七成就みろくじやうじゆの神様かみさまだとか、旭あさひの豊榮とよさかのぼ昇あり姫ひめ、岩照いはてるひめ姫ひめ、木曾きそよしひめ義ぎ姫ひめなどと、ありもせ
ぬ名なをお附つけ遊あそばして、隨喜ずいきの涙なみだをこぼさせて集あつめたお金かねが、なぜあなたの身みに

つきますか。蠓蠓別さまは、お前さまの罪を取つて上げようと思つて、其金を持つてお逃げ遊ばしたのですよ。つまり蠓蠓別さまとお民さまはお前さまの罪取主、助け舟、命の御恩人だから御喜びなさい。正しき信仰上の目から見れば、お寅さま、あなたは随分よい御かげを頂きましたね」

お寅「馬鹿らしい、こんな御かげが何處にありますか。私もこれから、蠓蠓別の後を追つかけて、金を取返し、恨みを言はねば承知しませぬ」

「オホ、、、、貴女の恨はよう利きませうよ。清浄潔白の貴女のお言葉なら釘も利きませうが、弱點を知り合うた仲、犬も食はぬ夫婦喧嘩になつて了ひますよ。

それにお民さまは娘盛りのキレイなお方、お前さまは五十の尻を作つた、言ふとすまぬが古手婆アさま、誰だつて浮氣者だつたらお民さまの方へ肩をもつのは當然ですわ。お前さまもいい年して蠓蠓別様の愛を独占しようなぞとは餘り蟲がよ過ぎるぢやありませんか。貴女、其鼻何うなさいました。ハチケてゐるぢやありませんか。大方夜前追つかけていた時に轉けて打ちなさつたのでせう。神様の教にも、改心致さぬと鼻を打たねばならぬ事が出来るぞよと示されてあるぢやあり

ませぬか。貴方は實地教育をうけ、結構な御かげを頂きやしたねえ、本當にお羨ましようムいますワ」

「へん、馬鹿にしなさるな、よい加減に人を嘲齋坊にしておきなさい。此お寅だつて石地藏や人形ぢやありませんから、チツとは性念がありませんよ。お前さまは松彦さまといふ夫に會ひ、吾子が分つたのだからソラ嬉しいでせう、又勢も強いでせう。それだからそんな氣強い事がいへるのだ。私の身になつて御覽なさい」

松彦「モシお寅さま、モウいい加減に蝶鰍別さまのこたア思ひ切られたら何うです。又何うしても夫がなくちやならぬのならば、適當な男をお世話致しますワ」

「へん、餘り馬鹿にして下さるな、私は男が欲しいので騒いでるのぢやありません。只神様の爲、世人の爲になくはならぬ蝶鰍別さまだから、天下の爲に氣をいらつてゐるのですよ。五十の尻を作つて男なんか要つてたまりますか。そんな柔弱な魂だと思つて貰ひますと、へん、チツト片腹痛い」

「あゝさうですか。それで時々徳利が舞うたり、杯が碎けたり、鼻をねぢつたり、氣絶したり、いろいろな珍妙な活劇をおやりなさるのですな」

「エ、なになつと勝手に言つておかつしやい。御夫婦仲よう、しつぽりとお楽しみ、左様なら、永らく殺風景な婆アが久しぶりの御対面、嬉し泣きの場面を汚しましてはすみませぬ。エライお邪魔を致しました。氣の利かぬ婆アでムいますから、どうぞお許し下さいませ」

かく毒ついでる所へ、スタスタと上つて来たのはお菊であつた。

お菊「ご免なさいませ、お寅さま、否お母アさまは来てゐられますかな」

お寅「コレお菊、お前は何しに、こんな所へ来るのだい、サアお歸りお歸り、年

も行かぬくせに小マしやくれた、ぢきに私の内證話を聞きに来るのぢやな」

別に聞きに来たいこたないのだけれど、何時も蝶螈別さまと酒に酔うて、大きな聲で恠氣喧譁をなさるものだから、又ここへ岡焼にでもしにムつたのかと案じ

て来て見たのよ。お母アさまは法界恠氣が上手だからねえ」

「早く歸りなさい」

「五六七成就の生宮さまと、旭の豊榮昇り姫の生宮さまとが大廣間を飛出し、春さまざまが後について、悪口タラダラ坂を降り、神政松の下へ行つて、十六本の

松を引抜き、岩を砕かうとして居るさうぢやから、一寸知らしに來たのよ

松位引いたつて、また植ゑ替へたらいいのだ。何程お福さまや竹さまが力が強うても、あの石はビクツともならないから、放つときなさい。それよりも早くお歸り

それなら歸りますワ。萬公さまが首を伸ばして待つてゐますからねえ

松姫 才ホ、ホ、ホ

お寅 親を弄るといふ事があるものかいな、お前はそれ程萬公さまに惚れてゐるのかい

お菊 惚れてますとも……ほれたほれた、何がほれた、馬が小便して地がほれた……といふ程惚れてますのよ。ホツホ、ホツホ、併しお母アさま、あなたの喜ぶ事が出來ただけれど、餘り憎らしい事をいふから、もう言はないワ、ねえ松姫さま、こんな憎い口を叩くお母アさまには、何ぼ娘だつて、バカらしうて言つてやれませぬわねえ

松姫 結構な方がみえましたね、定めてお喜びでせう、お母アさまは……

お寅とら「ナア二、結構けつこうな事こととは、コレお菊きく何なんぢやいなア、早くはや言いつておくれ、私わたしも都合つがふがあるから」

お菊きく「そらさうでせう。言いはうなかなア、ヤツパリ言いはうまいかなア、こんな事ことさうツケツケといつて了しまふと、互たがひに樂たのしみが薄うすくなるから、これは夢ゆめにしておきませうかい」

「エ、焦心じれつたい、早くはや言いはぬのかいなア」

「イのつく人ひとが、神様かみさまのおかげで、スタスタと歸かへつて來きましたよ」

「ナア二、蠚いもり別わけさまがな、さうだろさうだろ、ヤア松彦まつひこさま、松姫まつひめさま、誠まことにすみませなんだ。貴方あなたの御神ごしん力は偉えらいものですな。御教みをしへとは一時半程ひとときはんほど遅おくれましたけれど、歸かへつてさへくれたら、これで神政成就しんせいじやうじゆの太柱ふとばしらがつかめます。神様かみさまもさぞお喜よろこびでムいませう」

「神様かみさまはお喜よろこびなさるか、なさらぬか知しりませぬが、お母かアさまは嘸さぞお喜よろこびでせうね。私わたしだつて餘あまりイヤな事ことは、ない事ことはありませぬわねえ、ホツホ、

夢寐にも忘れぬ戀男

待ちあぐみたる其時に

蝶蜋別が歸つたと

聞いてお寅は飛び上り

閻魔のやうなきつい顔

忽ち變る地藏さま

松彦夫婦に打向ひ

失禮な事をベラベラと

お喋り申してすみませぬ

コレコレお菊、お前さま

ここで暫く御世話に

なつてゐなされ又しても

内證話をきかれては

みつともないと言ひながら

狐のお化と知らずして

誠の戀しき男だと

細き階段トントンと

二つ三つもふみまたげ

眼くらんでガラガラと

ころがる拍子に頭打ち

アイタ、タツタと言ひながら

男に心を取られてや

頭や腰の痛みをも

さのみ心にかげずして

轉げるやうに下りゆく

何は免もあれ教祖殿

歸つて蝶蜋別さまに

不足のありだけ言ひ並べ

お金かねをこちらへボツたくり　　動きうごの取れぬやうにして

男をとこの愛あいを獨占どくせんし　　此喜このよろこびはここよりは

外ほかにやらじと酒さけでつり　　チツとも外そとへは出ださぬよに

守まもらにやならぬと囁ささきつ　　歸かへつて見みれば蝶いもり蝶わけ別

火鉢ひばちの前まへに丹前たんぜんを　　かぶつたままに泰然たいぜんと

すわつてゐるぞ嬉うれしけれ。

お寅とら　　「マアマアマア、よう家うちを覺おぼえて歸かへつて來きなさつたな。私わたしは又また、どこのどな

たか知しらぬと思おもひましたよ。あのマアすましたお顔かほわいの」

蝶いもり蝶わけ　　「歸かへつてくる積つもりではなかつたのだが、どうしても思おもひ切きれないものが一ひとつあ

つたので引返ひっかへして來きたのだ。マア酒さけでも出だしてくれ」

「思おもひ切きれないものとは、此爛このかんどくり徳利ちよくと猪口ちよくでせう。サアサアこんな所ところで飲のんで貰もら

ふと、又また御機嫌ごきげんをそこねるとすみませぬから、早はやく狐きつねの森もりへでもいつて、お民たみと

シツポリやつて來きなさい」

「さう悪氣をまはして貰つちや困るぢやないか。お民の奴、一本橋を渡る時、あわてて川へおち込み、それきりになつて了つたのだ」

「何、お民……が……川へはまつて死にましたとな。エ、氣味のよい……イヤ氣の毒な事だなア。さぞお前さまも悲しかつただらうな。なぜ飛込んで一緒に心中なさらぬのだい、随分水臭いぢやありませんか」

とツンとして他人行儀になつてゐる。

蠓螞 「何ともはや、魔我彦は惜い事をしたものだ。魔我彦が聞いたらさぞ悔むだろ、不憫な者だ」

お寅 「悔む人が違ひませう、へん、仰有いますワイ。そんな事に化かされる、海千山千ぢやありません。モツトモツトすぐれた劫を経た狸婆アを騙さうと思つても、ダメですよ。時に蠓螞別さま、お金はどうなさつたの」

「お金か、ありやお前、餘りあわてたものだから、一本橋の上からパラパラと落して了つたのだ。拾つてみようと思つたけれど、何分夜叉のやうな勢で、どこの婆アさまか知らぬが、追つかけて来るものだから、つい恐ろしくなつて野中の森

までに逃にげていつたのだよ」

「そんなウソを云いつたつて駄目だめですよ。お前まへさまの懐ふところにチヤンとあるぢやないか」

「ソリアある、併しかしこれは拾ひろうた金かねだ、お前まへの金かねは一旦いつたん落おとしたのだ、落おとしたものを

拾ひろはうと云いつたつてダメだらう。それを改あらためて蠚いもり蠚わけ別けが拾ひろうて來きたのだから、

所有しよいうけん權けんは俺おれにうつつてるのだ。最早もはや指ゆび一本いっほんさへる事ことはさせないから、此この金かねに未みれん練れん

はかけてくれるなよ。其その時ときの用意よういの金かねだからなア」

「盗ぬす人びとたけだけしいとはお前まへさまの事ことだ。どうあつても斯かうあつても、此こちら方へひ

つたくらねばおきませぬ」

「アハ、お前まへの力ちからで取とれるものなら取とつてみるよ。此この蠚いもり蠚わけ別けは今いままでとは

チツト様やうす子が違ちがふのだから、ウツカリ指ゆび一本いっほんでもさへようものなら、大たい變へんな目めに

會あふぞ」

「ナアニ、グツグツ言いふと又また鼻はなをねぢようか。そんな事ことを言いはずに素す直なほに出だしな

さいよ。又また要いる時ときにや私わたしにこたへてさへ下くださつたら、惜をし氣げもなく出だして上あげます

から、今日けふはお酒さけを上あがつて宵よひからグツスリとお休やす見みなさい。お前まへさまが飛とんで出で

たものだから、此神館は大騒動が起つてゐるのよ。信者の信仰がグラつき始めて、此城が持てるか持てぬか分らないといふ九死一生の場合だから、せめて此お金なつと持つてゐなくちや心細くて仕方がない。千兩だけお前に持たしておくから、八千兩こちやへお返しなさい」

「それならモウ邪魔臭いから、十分の一だけお前にやらう。サア検めて受取つてくれ」

とポンと前へつき出したのは、三萬兩の大判であつた。お寅婆アはビツクリして、
「コレ蠨蛸別さま、コリヤ、サ、三萬兩ぢやないかい」

蠨蛸「ウン三萬兩だ、まだ二十七萬兩懐にあるのだ。これだけあれば、一代遊んで暮しても大丈夫だ」

「其お金、こちらへ預つて上げませう」

「お前の金は九千兩、二萬一千兩も利をつけてやつたぢやないか。お前もそれだけあれば得心だろ、二十七萬兩は俺の使用権利があるのだから決して渡さない。もしも之を無理にも取らうものなら、それこそ泥棒だ」

「決して取らうといふのぢやない、預つておかうといふのだ。お前さまに此金持たしておいては險難だから、預らうといふのだよ」

「此金を以て、實の所はお民を或所へ預けて來たのだ。お民にも二十萬兩の金もたしてあるのだ。サア之から御免蒙らう、お寅婆アさま、随分【まめ】で暮して下さい、左様なら」

と立ち上らうとする。お寅はビツクリして立上り、大手をひろげ、

「エ、それ聞くからは、何と云つても行かしはせぬ。命にかけてもお前をお民に渡してなるものか」

と武者ぶりつく途端に、蝾螈別の體は長い毛だらけであつた。ハツと驚き手をはなす途端に、蝾螈別の姿はどこへやら、黒い牛の子のやうな大狐がのそりのそりと後ふり返りながら向ふの森林さして逃げて行く。これはお寅婆アの副守護神で、小北山の發頭人ともいふべき親玉であつた。松彦、松姫、五三公の神威に恐れて姿を現はし、お寅の肉體からスツカリと放れて了つたのであつた。

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 松村眞澄録)

第九章 文明（一一二一九）

文助は朝から晩まで置物然として白装束に白袴を着け、相變らず松に一本角の黒蛇、蕪、大根を描いて居た。そこへお菊がソツとやつて来て、

「もし、文助さま、お前チヨツト此方へ来て下さらぬか。大變面白いものを見せてあげますよ」

文助「何程面白いものでも、俺に見せてやらうと云ふのは無理な注文だ。盲の芝居、聾の淨瑠璃聞と同じだから、まあ止めておかう」

お菊「何、お前さま、蕪や大根が書ける位なら見えぬ筈がない。見ようと思つたら屹度見えるだらう。本當に妙な事があるのよ。人に分らぬ中、ソツと来ておく

れよ」

「さう受付役が席を立つて此處をあけておく譯にもゆかないから、又暇の時に見せて貰はう」

「そんな氣の長い事を云つてゐたら駄目よ。今の中に来て見なくちやいけない。」

實の處は、蠨蛸別さまが歸つて來たのよ。さうして三萬兩の金をお母さまにやつて居るのよ」

「何、三萬圓のお金をお母さまにあげられましたか。流石は蠨蛸別さまだ。夜前夜ぬけをなさつたとかで随分上を下への大騒動、どうなることかと俺も心配してをつたが、あゝ有難い有難い、あの方が歸つて下さつたら小北山は大丈夫だ。神様有難うムります」

「一寸見に来て下さいな。どうも不思議で堪らないのよ」

「何、お金は人間の持つものだから三萬圓位持つて歸つたつて別に不思議はない。あの方だから人の物を泥棒なさる筈がない。それは神様からお情でお金を降らして下さつたのでせう。さうして其お金をお母さまは如何なさいました」

「直様懐へ捻込んで了つたのよ」

「そりや良い事をなさいました。あの方にお持たせして置くといけませぬから。神様有難うムります」

と又拜む。

お菊「何、そればつかしぢやないのよ。後から聞いて見れば、まだあと二十七萬

兩、懷に持つて居ると云つてゐたよ」

文助「何、二十七萬圓、八、そりや大方聞き違ひだ。二十七錢だらう」

阿呆らしい、二十七萬圓と二十七錢と取違へる様な私は馬鹿ぢやありません。

確に二十七萬兩、十分の一與らうと云つて三萬兩放り出したのだもの、さうして

まだお民さまに二十萬兩やつて來たと云つてゐましたよ。文助さま、早う來て下

さいな。お民さまの處へ、これから行くなんて云つてゐますよ。私、それ聞いて

氣が氣でないので、ソツと貴方を頼みに來たのよ。蝶蝨別さまは貴方の云ふ事は

聞いて呉れるけれども、お母さまの事は聞いてくれぬのだから」

「そりや大變だ。あんな人に、そんな大金を持たせておいたら、どんな事をする

か知れやしない。人間が好いから直に人にとられて了ひ、神様の名を悪くするや

うにしちや大變だから。それなら行きませう」

「文助さま、ソツと來て下さいや。あまり人に聞えちや都合が悪いかも知れぬか

ら

受付係うけつけがかりの文助ぶんすけは 思おもはぬ話はなしを聞きかされて

何なんとはなしに勇いさみ立たち 重おもたい尻しりをあげながら

咫尺しせきも見みえぬ目めを持もつて 杖つゑを力ちからにトボトボと

お菊きくの後あとに従したがひて 蝶いもり蛸わけ別の住居すまゐなる

館やかたをさして出いでて行ゆく お菊きくは先さきに立たちながら

「これこれもうし文助ぶんすけさま 此處ここが表おもての入口いりぐちよ

さあさあ私わたしが手てを曳ひいて 教祖けうそのお居間ゐまへ参まゐりませう」

云いへば文助ぶんすけ首肯うなづいて 一寸ちよつと笑ゑみをば湛たたへつつ

年としの若わかいに似にもやらす 何なにから何なにまで蕪かぶらから

大根菜種だいこんなたねの端はしまでも 氣きのつく娘むすめと褒ほめながら

奥おくの一ひと間まへ進すすみ入いり

「これこれもうしお寅とらさま

目出度めでたい事ことが出来できました

蠓いもり別わけの教祖けうそさまは 御無事ごぶじでお歸り遊あそばして

私わたしも嬉うれしうこぎムります 其の上うへ澤山たくさんのお金かねをば

土産みやげにもつてお歸りかへと 私わたしは聞きいて飛とび上あり

大神おほかみ様に御禮おんれいを 直様すぐさま申上まをげました

昨夜ゆうべ蠓いもり別わけ様さまが 驅落かけおちなさつたと聞きいてから

館やかたの上下うへした大騒動おほさうどう 數多あまたの信者しんじやの信仰しんかうが

ぐらつき出だして私わたしまで 頭あたまを痛いためて居をりました

其上そのうへ尚なほも神様かみさまの 尊たふとき恵めぐみによりまして

三十萬兩さんじふまんりやうの金かねもつて 無事ぶじにお歸りかへなさるとは

何なにに譬たとへむものもなき 歡喜くわんきの極きはみでムります

これこれもうし教祖けうそさま 私わたしは文助ぶんすけ受付うけつけの

時間じかんを盗ぬすんで御挨拶ごあいさつ 致いたさにやならぬとお菊きくさまに

お手てをひかれて参まゐりました 何卒どうぞ結構けつこうなお話はなしを

私わたしに聞きかして下くださんせ 眞まことに嬉うれしい事ことですよ

鶴は千歳と舞ひ遊あそび
龜萬歳と歌ひ舞まふ

こんな目出めでた度いお目出めでた度い
事が如何どうして來たものか

これもやつぱりユラリ彦ひこ
末代日の王天わうてんの神かみ

五六七成就の大御神おほみかみ
リントウビテン大神おほかみや

日の出神でのかみの義理天上ぎりてんじやう
大將軍だいしやうぐんや常世とこよひ姫

旭あさひの豊榮とよさか昇のぼり姫ひめ
其外そのほか尊たふとき神かみ様の

御守護ごしゆごの徳とくでムりませう
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

何程なにほど嬉うれしいと云いつたとて
口くちが塞ふさがる筈はずがない

蝶いもり別わけさま、お寅とらさま
あまり私わたしをじらさずに

早はやくお話はなし下くださんせ
氣きがせきますすと呼よばはれば

お寅とらは呆あきれて倒たふれたる
身からだ體たふムツと引ひき起おこし

火鉢ひばちの前まへに座蒲團ざぶとんを
キチンと敷しいて行儀ぎやうぎよく

膝ひざに兩手りやうてをおおきなながら
文助ぶんすけさまか、よくもまあ

お目めの悪わるいにトボトボと
お訪たつねななさつて下くださつた

わたしは結構な御神徳

今日は初めて受けました

天の岩戸が開けたる

やうな心地が致します

何卒喜んで下さる

本當に目出度い吉日と

申せば文助勇み立ち

「そりやまあ結構な事でした

蠓蠓別の教祖さまは

大きな神徳頂いて

三十萬兩を懐に

入れてお歸り遊ばして

十分一の三萬兩

お前さまにスツパリ下さった

やうにお菊さまに聞きました 本當に目出度い事ですな

私に直接頂いた

やうに嬉しうムります

さうして蠓蠓別さまは

お聲が根つから聞えぬが

疲れ果ててグツスリと

お寝みなさつてムるのか

それならそれで私も

お寝みなさる邪魔をしちや

眞に濟まない事故に

これからお暇申します

これこれもうしお寅さま

娘御寮のお菊さま

これから御免蒙つて 書き残したる蕪の晝

スツカリ仕上げた其上で お暇を頂き見えの番

足を伸ばして今夜こそ ゲツスリ寝さして貰ひませう

何れもサラバと立上る 此時お寅は聲をかけ

「文助さまよ今私が 結構なお神徳を頂いた

天の岩戸が開けたと 云つたは金の事でない

百萬兩はまだ愚か 幾千萬とも限りなき

譬へ方なき神徳を スツカリ受けた事ですよ

蝶鰻別が突然と 此場に歸り来りまし

三萬兩の小判をば ゴロりと私の目の前に

竝べて呉れたと思ふうち 豈圖らむや蝶鰻別

忽ち姿を變更し 牛の様な古狐

クワイ クワイ クワイと泣きながら 向ふの谷の森林を

目蒐けて姿をかくしました あまり私は胴欲で

汚きたい事ことのみ朝夕あさゆふに 思おもつて居ゐたのが罪つみとなり

清きよい尊たふとい魂たましひが 自然しぜんに曇くもつて居をつたのか

此この有あり様さまを見みるよりも 一いち度どに開ひらく蓮はちすばな花はな

サラリと開あいた胸むねの暗やみ これ程ほど嬉うれしい事ことはない

蝶いもり蛸わけ別の教けう祖そさまは お前まへも知しつてゐる通とほり

酒さけに身み魂たまを腐くさらして 前ぜん後ご夢む中ちゆうに首くびをふり

精せい神しん病びやう者しやとなつてゐる あんな分わからぬ男をとこをば

何なに程ほど大だい切じにしたとても 神かみのお道みちは何ど處こまでも

擴ひろまりさうな事ことはない 又またあの人ひとはお民たみと云いふ

女をんなに迷まよひ三五あななひの お道みちにムごる高たか姫ひめを

慕したうて朝あさ晚ばん胸むね痛いため 鬱うつ散さんばらしに酒さけをのみ

居ゐるやうな人ひとを私わたくしが 何なに程ほど大だい切じに思おもうても

最も早はや駄だ目めだと知しる上うへは 執し着ふち心やくしんも何なにもかも

速はや河かはの瀬せに流ながし棄すて 今いまは嬉うれしき水すゐ晶しやうの

御空みそらの如ごとくになりました

喜よろこび勇いさみ神かみ様にさま

お禮れいを申まをして下くださんせ

私わたしもこれこれから魂たましひを

入いれ替かへ天地てんちの祖神おやがみを

祀まつり直なほして神妙しんめうに

一いっ心しん不ふ亂らんに仕つかへます

文助ぶんすけさまよ今迄いままでの

私わたしの醜行しうかう見直みなほして

愛想あいそつかさず何處どこまでも

交際かうさいなされて下くださんせ

今日け更ふあらためて願ねがひます

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

もう此上このうへは吾心わがこころ

決けつして決けつして變かはらない

天地てんちの神かみよ百神ももがみよ

初はじめて悟さとる吾々われわれが

眞まことの道みちの御光みひかりを

いや永とこ久しへに照てらしつつ

此肉體このにくたいは云いふも更さら

此世このよを去さつて神界しんかいへ

旅立たびだちする時とき吾魂わがたまを

安やすきに救すくひ給たまへかし

神かみは吾等われらの救すくひ主ぬし

心こころも身みをも傾かたむけて

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち』

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 北村隆光録)

第一〇章 啞狐外れ〔一二二〇〕

戀こひにやつれし魔我彦まがひこは

晝狐ひるぎつねをば追おひ出だした

やうな間ま抜ぬけた面つらをして ノソリノソリと坂道さかみちを

下くだつて橋はしの袂たもとまで 思おもはず知しらず進すすみ來くる

時ときしもあれや向むかふより 云いふに云いはれぬ美うつくしき

衣服いふくを着き飾かざり濡ぬれ烏がらす 欺あひまくばかりの黒髮くろかみを

サツと後うしろに垂たれ流ながし 紫袴むらさきばかまを穿うがちつつ

紅葉のついた被衣をば

サラリと着流しトボトボと

此方に向つて進み来る

何人なるか知らねども

どこともなしに見覚えの

ある女よと佇みて

口をポカンと開けながら

指を銜へて眺め居る

女はやうやう丸木橋

此方に渡つて魔我彦の

前に佇みホ、と

やさしく笑へば魔我彦は

夜分の事なら驚いて

逃げる處をまだ晝の

最中なるを幸に

ビクとも致さぬ面構へ

よくよくすかし眺むれば

豈圖らむや戀慕ふ

衣笠村のお民さま

ハツと驚き胸を撫で

「これこれもうしお民さま

お前は本當にひどい人

蠓蝨別と手をとつて

私に肱鐵喰はしおき

暗に紛れて何處となく

逃げて行くとはあんまりだ

此處で會うたを幸ひに

怨みの數々竝べたて

何うしても聞いて下さるにや お前を抱いて此川へ

ザンブとばかり身を投げて あの世とやらへ行く心算

お返事如何とつめよれば 女は又もやホ、ホ、と

いと愉快氣に打笑ふ はて訝かしと魔我彦は

衝つ立ちよつて細腕を グツと握ればお民さま

山も田地も家倉も 吸ひ込みさうな鷹をば

両方にポツと現はして 腰つきさへもシナシナと

首をクネクネふりながら しなだれかかる嬉しさよ

魔我彦案に相違して グツと腰をば抱きしめ

『これこれもうしお民さま お前の心は知らなんだ

何卒許して下さいませ 私も嬉しうムります

夢か現か幻か 夢なら夢でよいけれど

萬劫末代醒めぬやうに 神さま守つて下さる

偏に願ひ奉る さはさりながらお民さま

蠓いもり別わけは如何どうなつた
それが一言ひとこと聞ききたい□と

詰なればお民たみは打笑うちわらひ
□私わたしは蠓いもり別わけさまに

秋波しゅうはを送おくつて居ゐたやうに
見みせてゐたのも只ただ一つ

お前まへと添そひたい目的もくてきが
心こころの底そこにあればこそ

蠓いもりさまをおだてあげ
昨夜ゆうべの暗やみを幸さいはひに

野の中なかの森もりへつれ行ゆきて
隠かくし置おいたる二十萬兩にじふまんりやう

言葉巧ことばたくみに説ときつけて
薄野呂うすのろさまを説とき落おとし

漸やうやく目的もくてき相達あひたつし
二十萬兩にじふまんりやうのお金かねをば

これ此この通とほり懐ふところへ
入いれてスゴスゴ歸かへりました

もう之これからは大丈だいぢやうぶ夫ぶ
小北こぎたの山やまの聖場せいぢやうで

お前まへは教けう主しゆ私わしは妻つま
これだけ金かねがあつたなら

末代まつだいさまも上義じやうぎ姫ひめも
おつ放ほり出だして小北山こぎたやま

主權しゆけんを握にぎる其準備そのじゆんび
サアサア之これから致いたしませう

金かねが敵かたきの世よの中なかと
分わからぬ奴やつは云いふけれど

お金かねは吾身わがみの味方みかたぞや

金かねさえあらば何事なにことも

成就じやうじゆせない事ことはない

どんな阿呆あほうな男をとこでも

賢かしこう見みえるは金かねの徳とく

一文半いちもんきなかめく錢せん惠めぐまない

人ひとにも旦那だんなさま旦那だんなさまと

持もて離はなされて世よの中なかを

我物わがもの顔がほに渡わたり行ゆく

こんな結構けつこうな事ことはない

魔我彦まがひこさまよ私わたくしの

心こころの底そこが分わかつたか

何卒どうぞ仲なかよう末永すえながう

私わたしを妻つまと慈いづくしみ

添そひ遂とげなさつて下くださんせ

云いへば魔我彦まがひこビツクリし

戀こひしき女をんなと合衾がふきんの

式しきまで擧あげて其上そのうへに

生うまれて此方このかた目に觸ふれた

事こともない様やうな大金たいきんを

持參ぢさん金きんとは何なんの事こと

併しかし心こころにかかるのは

蠓いもり別わけの事ことである

魔我彦まがひこ言葉ことばを改あらためて

『それは誠まことに結構けつこうだ

併しかし一つの心配しんぱいが

二人ふたりの仲なかに横よこたはり

至幸しかう至福しふくの妨さまたげを

するやうに思へて仕様がな
い 何とか工夫があるまいか

蝶螭別がヒヨツとして
この場に歸つて来たなれば

俺とお前は如何しようぞ
これが第一氣にかかる

如何にせむか 〓と尋ねれば
お民はホ、と打笑ひ

〓必ず心配なさるなや
こんな謀反を起す私

何處に抜け目があるものか
野中の森で鞆丸を

しめて國替さして置いた
もう此上は大丈夫

天下晴れての夫婦ぞや
一時も早く小北山

教主の館へ堂々と
夫婦が手に手を取り交はし

これ見よがしに大勢の
中をドシドシ行きませう

お寅婆さまもさぞやさぞ
お前と私の肝玉に

ビツクリなさる事だらう
あゝ面白い面白い

天下晴れての夫婦連れ
金がとりもつ縁かいな

何を云うても二十萬兩
もしゴテゴテと云うたなら

此大金を見せつけて
荒肝とつてやるぢやないか

魔我彦さまよ心をば
丈夫にもつて下さんせ

私もお前と添ふのなら
此大金は要りませぬ

皆貴方の懐に
預けておきます改めて

何卒受取つて下されや
語れば魔我彦喜びて

涎をタラタラ流しつつ
開けたる口も塞がずに

お民の後に引添うて
嶮しい坂をエチエチと

肩で風きり嬉しげに
館をさして歸り来る

其スタイルの可笑しさよ
意氣揚々と魔我彦は

嶮しき坂を攀ぢ登り
受付前に来て見れば
「オツトドツコイ、アイタツタ

魔我彦さまぢやありませんか
貴方は何處へ雲隠れ

なさつてムつたか知らねども
此大廣前は大騒動

上を下へと泣き叫び
怒りつ猛びつ修羅道の

大惨劇が演ぜられ
信者の信仰がぐらついで

危き事になつてゐる
お前はそれをも知らずして

お民の後をつけ狙ひ
何をグツグツしてゐる

氣をつけなされ
魔我彦鼻を蠢かし

「お前は盲で分らねど
私は目出度い事だつた

お目にかけてたうてならないが
生憎お前に目がないで

如何にも斯うにも仕様が
二十萬兩のお金をば

首尾よく私の手に入れて
天下無雙の美人をば

女房にきめて揚々と
歸つて來ました所ですよ

世界に竝ぶものもなき
幸福者とは俺の事

明日に屹度お祝を
致してお目にかけるから

お前も楽しみ待つがよい
女の好む男とは

決して美しいものでない
氣前と根性がシヤンとして

居りさへすれば神様が
自分の思ふ存分の

女房にようぼうを持たして下くださるよ お前まへは私わたしを平生へいぜいから

曲まがつた男をとこと見縊みくびつて フ、ンと笑わらふ鼻はなの先さき

随分ずぶんむかつきよつたけど もうかうならば神直日かむなほひ

大直日おほなほひに見直みなほして お民たみを女房にようぼうに貰もらうたる

其そのお祝いはひに帳消ちやうけした 俺おれの器量きりやうは此この通り

サアサアこれから奥おくへ行いて 内事司ないじつかさのお寅とみさまに

羨けなりがらしてやりませう これこれ吾妻わがつまお民たみどの

早くはや魔我彦まがひこ後あとにつき トツトとお入はいりなされませ

お寅婆とみばさまが嘸さぞや嘸さぞ 驚おどろき喜よろこぶ事ことでせう

私わたしは之これから大教主だいけうしゆ お民たみは一躍いちやく奥おくさまで

羽振はぶりを利きかし飛たつ鳥とりも 落おとさむばかりの勢いきほひで

ウラナイ教けうの御道おんみちを 残のこる隈くまなく世よの中なかに

輝かがやき渡わたさうぢやないかいな あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはひましませよ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

魔我彦さまとお民さまは
萬劫末代變らない

金勝要の神様が
結び給ひし縁ぢやもの

如何してこれが變らうか
もしも中途で變るやうな

悪い行ひあつた時や
忽ち神が現はれて

吾等二人の身の上に
お罰の當るは知れた事

これこれもうしお民さま
此事ばかりは心得て

何卒忘れて下さるな
ほんに嬉しい有難い

小北の山の神様を
信神してゐたお蔭にて

夢にも見ぬやうなボロイ事
吾身に降つて來たのだよ

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

お寅は何か妙な聲がするなと思ひ門口をガラリと開け、外面を見れば魔我彦が
眞蒼の顔をし、顔に黒いもんを處斑に塗りつけられ、ポカンと口を開け、唾の様

第一章 變化神（一一二二二）

萬公まんこう「アク公こうさまが演臺えんだいに登のぼるや否いなや小北山こぎたやま

變化神へぐれじん社の種たねあかし 怯おめず臆おくせず滔々たうたうと

數多あまたの信者しんじやの目めの前まへで 喋しゃべり立てたが仇あだとなり

上うへを下したへと大騷動おほさうどう 亂癡氣騷らんちきさわぎが始はじまりて

五み六ろく七しち成就じやうじゆの生宮いきみやと 自みづから信しんじ人ひとも亦また

許ゆるして居ゐたる竹公たけこうが 獅し子し奮ふん迅じんの勢いきほひで

攻せめかけ來きたるアク公こうが 夕ゆふを犠ぎ牲せいに立たてながら

敏さとくも其場そのばを立たち出いづる 此このとき時ま萬公まんこうは只ただ一人ひとり

へグレ神じん社しゃを一いち々いちに 調しらべて廻まり頂上ちやうじやうの

月つきの大おほ神かみ日ひの御神みかみ 社やしろの前まへに突つつ立たつて

蠓いもり蛭わけ別わけが奴ど狐ぎつねに つままれよつてこんな神かみ

勿體らしくも祀りこみ 馬鹿を盡すも程がある
狐狸に騙されて 出て来る信者の顔見れば
一人も碌な奴はない 目玉の一つ無い奴や
聾に聾、肺病やみ 横根、疔瘡、骨うづき
陰辜、田蟲で苦しんだ ガラクタ人間蜘蛛の子が
孵化つたやうにウヨウヨと 此世で役に立たぬ奴
固まり居るこそ可笑しけれ それ故こんなガラクタの
お宮を立てて古狐 八疊敷の古狸
嚴めしさうな名をつけて 末代日の王天の神
上義の姫や常世姫 大將軍と齋ひこめ
祀つて居やがる馬鹿らしさ 闇の世界と云ひながら
これ程阿呆が世の中に 澤山居るとは知らなんだ
さアこれからはこれからは 松彦さまや松姫が
被つて居つた猫の皮 すつぱり脱いで曲神の

素性を露はし諸人の
眼をさましやるならば

如何に驚く事だらう
この萬公は精神が

確りして居る其お蔭
狐狸の曲神に

騙されないので不思議だよ
世界の奴は尊きも

富めるも卑きも賤しきも
欲に心を眩ませて

知らず知らずに迷ひ込み
曲神どもの玩弄に

されて居るのが氣の毒ぢや
これを思へば一日も

早く三五教をして
暗き此世の光とし

暗夜を照らして救はねば
三千世界は忽ちに

荒野ヶ原と變るだらう
あゝ惟神々々

御靈幸倍坐しませよ

かかる所へお菊はスタスタ登つて來た。

お菊「もし萬公さま、私最前からどれだけ探したか知れないのよ。こんな寒い所

に一人何してゐらしたの」

萬公「お前には肱鐵を「かま」され竹公さまには怒られ、身を置く所がないので、ユラリ彦さまのお宮の前まで避難のためにやつて來たのだ。お前は又、こんな強い山をどうして一人登つて來たのだ」

「私だつて足がありますわ。況してスカートハートした萬公さまがゐらつしやるのだもの、思ひの外足が軽くて知らぬ間に此處に登つて來たのよ」

「馬鹿にするない、年端も行かないのに男に調戲ふと云ふ事があるものか。随分酷い目に會はしたねえ」

「そりや極つた事ですわ。親の前や人さまの前で、何程好きだとして好きな顔が出來ますか、恥かしいから嫌ひだと云つたのよ」

「それでも昨夜大變俺に恥をかかしたぢやないか。あの時こそ誰も居なかつたのに、ありや餘り念が入り過ぎるぢやないか」

「何を言つてゐらつしやるの、あの時も暗がりには、アク、テク、タクさまが隠れて、私と貴方との立ち話を聞いて居たぢやありませんか。それだから私あんな事

を云つたのよ」

「成程さうだつたな、お前は随分細かいところへ気がつくな」

「そらさうですとも、前後に氣をつけにや人に發見されては大變ですもの」

「發見されてもよいぢやないか、何れ夫婦になるのぢやもの」

「それだつて、野合夫婦なんか云はれては末代の恥だわ」

「それなら、何故こんな處へ來たのだ。夜分なら兔も角も、誰が見とるか分らぬ

ぢやないか」

「夜分なら疑はれても仕方がないが、晝の最中だもの、誰が怪しみませう。却つ

て物事は祕密にすると人に感づかれるものですよ。此處なら何しとつたて大丈夫

だわ」

「エへ、、、、オイお菊、お前は小さい時から可愛い奴だと思つて居たが、ほん

とに可愛いものぢやな、それ程私を思つて呉れてるのか」

「極つた事ですよ。あれ程目許で知らして居るのに、萬さまは一寸も氣がつかな

いのだもの、ポンポン怒つて居らつしやるのだから本當に焦つたかつたわ」

「なんと本當に分らぬものだな。恐れ入ったよ。そこまで念が入らなくては戀愛の趣味がない、併しお寅さまが承知せなかつたらどうする心算だ」

「何れ容易に承知しては呉れますまいよ。それだから私も一つ考へがあるのよ。

萬さまはこんな所へ来て、神様の悪口ばかり云つて居ましたでせう」

「ウン、餘り業腹だから、小口から狐の神に引導を渡してやつたのだ」

「そんな惡戯せいでよいに、狐が怒つて魅んだらどうします」

「ハ、ハ、ハ、そんな心配して呉れるな、狐に騙されるやうな精神ぢやない。狐の奴、俺の顔を見ると尾を巻いて忽ち十里位逃げ出すのだから大したものだよ」

「時に萬さま、喜んで下さい。二十七萬兩の金を手に入れました」

「そんな金を何うして手に入れたのだ」

「お菊は耳に口をあて、

「今蠨蛸別が三十萬兩の金をもつて野中の森から歸つてきたのよ。そして三萬兩

をお母アさまに與へ、二十七萬兩の金をグツと懐に入れて酒を飲みだしたから、

私が酒を飲まして酔ひ潰し、二十七萬兩の金を引つたくつて、そつと此處まで逃

私

げて來たのよ」

「女をんなに似に合あはぬ豪がう膽たん者ものだな、そんな金かね何なににするのだ」

「ホ、ホ、ホ、この金かねもつて山やま越こしにお前まへと私わたしと驅かけ落おちをする積つもりで逃にげて來たのよ。サア足あしのつかない間まにこの山やまを南みなみに渡わたつて月つきの國くにへ逃にげようではありませぬ

か」

「ヤアマア待まつて呉くれ、私わたしは神かみ様さまの御ご命めい令れいで月つきの國くにへ往ゆく者ものだが、今いまは治はる國くに別わけさまのお供ともしてア、メニヤにゆくのだから、其その間あひだはお前まへと一いつ緒しょに居ゐる譯わけにはいかな

い」

「これ萬まんさま、好いい加か減げんに呆とほけて置おきなさい。それならお前まへはこのお菊きくは本ほん當たうに可か愛あいいのぢやないのだな」

「可か愛あいくなうてかい」

「それなら私わたしの云いふ事こと聞きいて下くださいな」

「ウン、聞きくの段だんぢやないが、御ご用ようの濟すむまで待まつて呉くれ」

「エ、好すかぬたらしい、神かみ様さまの御ご用ようなんかどうでもよいぢやないか。サアこれか

ら私と行きませう、二十七萬兩の金さへあれば、どんな立派な家も建つし、そんな危ないバラモン教を征伐するため、宣傳使のお供して野宿したり、乞食のやうな眞似するよりも、茲は一つ考へ所だ。サア往つて下さい、頼みぢやから」
「困つたなア、エ、仕方がない、自暴だ、それならお前と手に手を取つて此山越しに行かう」

「そりやまア有難うムいます、よう云つて下さいました。私もあんな「やんちゃ」親にひつついて居るのは嫌だし、こんな神様の所へ居るのは猶ほ嫌だし、兄様と知らぬ他國で苦勞するのなら、こんな嬉しい事はないわ」

「そんな事言つて又中途で俺を放かすやうな事はすまいなア」

「滅相な、變り易いは男の心だから、萬さまこそ心を變へないやうにして下さい。ねえ貴方、私好きで好きで仕方がないわ」

「エへ、へ、へ」

と涎を繰りながら、

「サア、それなら松彦さまや五三公に濟まないけれど、二十七萬兩の金を有つて

彌高飛びぢやいよいよたかと

お菊は山の尾の上を傳ひながら、萬公の先に立ち歌ひつつ進んで行く。

此世の中に生れ来て 何樂しみに人は生く

浮世の中の樂みは 酒と博奕と色ばかり

これに越したる樂みは 人間界にはあらうまい

それに治國別さまは 窮屈至極の三五の

教のお道に耽溺し 乞食のやうにブラブラと

可愛い女房を家におき お道のためとは云ひながら

そこらあたりをウロウロと うろつき歩くをかしさよ

萬公さまも神様の 教に些つと陥りこみ

河鹿峠の峻坂を 越えて漸く小北山

ウラナイ教の廣間まで やつて來たのは面白い

私がいづも戀ひ慕ふ 大事の大事の殿御ぞや

何とかが工夫を廻らして

萬公さまを銜へ込み

日頃の思ひを達成し

知らぬ他國で水入らず

一つ苦勞をして見よと

思つて居たらアラ不思議

一本橋の袂にて

結びの神の引き合せ

お目にかかつた嬉しさよ

さはさりながら何うかして

母の蓄へおかれたる

一萬兩のそのお金

盗み出して萬さまと

驅落するまで親の前

嫌な男と云ひはつて

油斷をさして目的を

達せむものと思ふ中

降つて湧いたる儲けもの

蝶蜋別が澤山の

お金をもつてニコニコと

歸り來るを見るにつけ

心の中に雀躍りし

頻りに酒を勧めつつ

思ふ存分酔ひ潰し

内懐にしめ込んだ

二十七萬兩の金

旨く手に入れ小北山

頂上の宮の御前に

登りて見れば萬さまが たつた一人で待つて居る

こんな結構な事あるか 早速情約締結し

山の尾の上を渡りつつ 吹く凧も何のその

温いポツポに勢を 得たる嬉しさ戀人と

手に手を取つて何處となく 逃げ往く身こそ嬉しけれ

あゝ惟神々々 御靈幸倍坐しませよ

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 加藤明子録)

第一二章 怪段(一一二二二二)

萬公は後髪引かるる心地しながら、肝腎要の神務を打ち忘れ、お菊の愛に溺れ、金と色との二道かけ、木枯荒ぶ高山の尾の上の薄雪を踏みしめながら、お菊

のやさしき後姿を打ち眺め、顔の紐まで解いて道々歌ひ出した。

☐ 神が表に現はれて 善と悪とを立てわける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は 直日に見直し聞き直し

身の過ちを宣り直す 三五教の神様は

この萬公が戀の暗 迷うて脱線した事を

心安らに平らかに 必ず許させたまふべし

河鹿峠をのり越えて 治國別と諸共に

野中の森迄やつて来た 時しもあれや龜彦は

弟子の萬公を振り捨てて 雲を霞とかくれけり

これを思へば萬公も もはや御用が濟んだのか

一本橋の袂にて 戀しきお菊に廻り會ひ

お寅婆さまにいろいろと 苦い意見を聞かされて

大分心も改まり
松彦さまと諸共に

悪魔の征途に上るべく
喜び勇んで居たものを

どうした身魂の因縁か
結ぶの神の引き合せ

いとし可愛の愛娘
お菊に深く思はれて

引くに引かれぬ羽目となり
心ならずも神の道

暫く捨てて往きます
國治立大御神

豊國主大御神
三五教の太柱

神素盞鳴大御神
誠に濟まぬ事ながら

暫くお暇を下しやんせ
是から二人は山の尾を

傳ひ傳ひて月の國
何處の果にか身を潜め

二人仲よく世を送り
さうした上で神様の

きつと御用を致します
今暫くは是非なしと

何卒見直し下さつて
戀を許させたまへかし

まだ十七の愛娘
肩揚さへも取れぬよな

あれ程可愛い女をば

何程神の道ぢやとて

これが見捨ててやれませうか

夫婦となるも前世の

深い縁でありませう

お菊の姉も中々に

人に勝れた器量もの

ほんとに惜しい事をした

そのお里にも彌勝り

鈴のやうなる丸い目に

花のやうなる唇で

ニツと笑うた其時は

知らず知らずに魂が

中空に飛んで往くやうだ

エへ、へツへ何とまア

面工のよい事出来たのか

矢張り身魂がよい故に

心の花が咲き初めて

福の神めが降つて来て

二人の仲をば圓満に

神聖な戀を完全に

お守りなさるに違ひない

思へば思へば俺のよな

幸福者が世にあるか

これこれお菊ちよつと待て

お前は子供に似合はない

随分早い足だなア

道もないよな山の尾を

さう安々と歩くのは 矢張り結ぶの神様が

お前の體を委曲に お守りなされるに違ひない

暫く待つて呉れぬかい 俺等は呼吸が切れさうだ

待てよ待てよと呼ばはれば お菊は後を振り向いて

「これ萬さま焦つたい 今暫くは身の限り

足の續かむ其限り 走つて往かねばなりません

もしも追手に見つけれぬ 捕はれようものならば

それこそ甚い事になる 大泥棒の驅落奴

此儘許しは致さぬと 蠓蝮別が腹を立て

どんな事をなさるやら 分つたものぢやありません

それが私は氣にかかる もう一息ぢや萬さまよ

サアサア早う往きませう

言葉ことばを後あとに残のこしつつ　小松こまつ茂しげれる山やまの尾をを

見みえつかくれつ走はしり往ゆく　萬公まんこうは息いきを喘はづまして

「おいおい待まつたお菊きくさま　それ程ほど早はやく走はしるなよ

姿すがたが見みえずなつたなら　この深山しんざんで何なんとする

お前まへと俺おれと唯ただ二人ふたり　外ほかに力ちからになるものは

猫ねこの子こ一匹いっぴき居をらぬぞや　まアまア待まつて下くだしやんせ

アイタ、タツタ躓つまずいた　途みちなき處ところをスタスタと

ようまアそれだけ走はしられる　遠さすの萬公まんこうも舌したを卷まき

尾をを卷まき降かう参さんせにやならぬ　そりや其その筈はずぢや誰たれだとして

大膽だいたん至極しごくな事ことをして　何どうしてゆつくり歩あるかれよか

これから肝玉きもたま放はり出だして　もう一ひと氣張ときばりお菊きくさまの

後あとを慕したうて往いつて見みよう　何なんとはなしに呼こ吸きめが

苦くるしくなつて來きたわいな　此處ここで一いつ服ぶくしよぢやないか

これだけ逃にげて來きた上うへは　よもや追手おつてもかかるまい

アイタ、タツタ目をついた 松葉の奴めが出しやばつて
大事な大事な眼をば 遠慮もなしに突きよつた
こりやこりやお菊どこへ往つた 子供の癖にとんとんと
はぐれて仕舞つたら何とする 向ふ見ずにも程がある
待て待て暫し待て暫し 〇

と云ひながら、呆けたやうな面をして細い階段を登つては下り、下つては登り、
何か口をもがもがと動かして幾度となく上下して居る。

お菊とお千代は手を引きながら石段の所まで下りて来た。見れば萬公が何かブツ
ツ分らぬ事を呟きながら、石段をトントントンと下つたり上つたりして居る。
お菊「お千代さま、あの萬公さまを御覽、間抜けた顔して、お千代をして居るぢ
やありませんか、何で又あんな妙な事をするのでせうなア」
千代「萬公さまが、狐に撮まれて居るのでせうよ。随分小北山には古狐の穴が澤
山ありますからなア」

「一つ背中でも叩いて氣をつけてやりませうか」

「兔も角「オイ」と云つて見なさい。そしたら氣が付くかも知れませぬぜ」

お菊は登つて來る階段の上に立ち一聞程前から、

「オイ萬公さま、確りせぬかいな」

と聲をかけた。萬公は矢庭に口重たげに、

「オーイお菊、さう走つては追付かれない。二十七萬兩の金を落しては大變だぞ。

まアちつと待つてはどうだ。もう此處まで逃げて來たら大丈夫ぢや」

「ホ、々、好かぬたらしい。萬公さまは私と驅落をして居る夢でも見て居るのだらうか、なアお千代さま」

「きつとさうですよ、あの顔を御覽なさい。あれは狐に撮まれて居るのですよ。

さうして夢を見て居るのですよ。困つた氣の利かない男ですなア」

萬公は又下を向いてトントントンと汗をタラタラ流しながら下つて往く。魔我

彦が散々狐に膏を取られ、松彦館を訪ねむと階段を上り往くと、萬公が氣のぬけ

たやうな顔して下りて來るのにベツタリと出會つた。魔我彦は、

「ハ、此奴も悪い狐にやられよつたのぢやな。俺ばかりかと思へば、伴侶もあるワイ。こいつは大方、お菊と驅落でもして居る積りで撮まれて居るのだらう、オイ萬公、何をグツグツして居るのだ、何を喋つて居るのだ」

と云ひながら、力をこめて背を三つ四つ打ち叩く途端に萬公は氣がつき、

「ア、一體此處は何處だ、お菊は何處へ往つたのだ、オーイ、お菊ヤーイ、オー

イ」

魔我「アハ、ハ、これ萬、確りして呉れい、最前から随分ここを上つたり下つ

たりして居たさうだが、大方狐に撮まれたのだらう。餘りお菊を思つて居るから、

こんな目に遇ふのだよ」

萬公「ここは一體何處だと云ふのだ」

「分らぬ奴だなア、小北山の階段だ。目を閉いどつては分らぬぢやないか。何だ

い、大きな口を開けやがつて」

「エ、馬鹿にしゃがつた。餘りド狐の悪口を言つたものだから、奴さん仕返しを

しゃがつたな」

「アハ、ハ、ハ、俺の二代目が出来たわい、ウフ、ハ、ハ、」

お菊は傍に走り来り、

「これ萬さま、お前最前からここに何して居るの」

萬公はお菊の首筋グツと握り、

「これド狐、何で人を馬鹿にしやがるのだ。サアもう了簡せぬぞ、覺悟せい」

お菊「萬さま恐い、魔我さま助けてえ」

魔我「こりやこりや萬公、狐の化けたお菊と、本物のお菊とごつちやにしては困

るぢやないか、ちつと確りさらさぬかい」

萬公「ウンさうだったか、そりや濟まぬ事をした。神さまは恐いものぢや、もう

斯うなつては白状するが、實はお菊と驅落をした積りだった。矢張り神様に氣を

引かれたのかなア」

斯く云ふ所へ、五三公、アク、タク、テク四人は松彦館を訪ねむと階段の下ま

でやつて来た。魔我彦は直に、

『小北山醜の狐にだまされて

この階段を上りつ下りつ。

お菊さまと手を引きあうて驅落を

してる覺悟で同じとこゆく』

五三 『お寅さま魔我彦さまをたばかりし

醜の狐の仕業なるらむ』

萬公 『二十あまり七萬兩の金もつて

驅落せしと思ひけるかな』

アクア 馬鹿ばか だ 阿ア お菊きく に う つ つ 抜ぬ か し よ つ て

狐きつね に ま で も 騙だま さ れ て け り 』

萬公まんこう 』 木石ぼくせき に あ ら ぬ 身み な れ ば 俺おれ だ と て

女をんな に 心動こころうご か ざ ら め や 』

タク 』 女をんな な ら 是ぜ 非ひ は な け れ ど 狐きつね に

ま ゆ 毛げ よ ま れ て 馬鹿ばか を 見み る か な 』

萬公まんこう 』 俺おれ だ と て 狐位きつねぐらゐ に や だ ま さ れ ぬ

つ も り ぢ や け れ ど ま ん が 悪わる う て 』

タク 『慢心まんしんが頂上ちやうじやうまでも登りのぼりつめ
この浅猿あさましき態さまとなりぬる』

萬公まんこう 『狐きつねまで化ばけて惚ほれよる俺おれの顔かほは
どこかに柔和やさしいところあるだらう』

テク 『テクテクと二百にひやくの階段かいたん下り上りのぼり
騙だまされきつた馬鹿ばか者ものあはれ』

萬公まんこう 『ここは又また高天たかまに登のぼる階段かいたんだ
何もなに知らしずにゴテゴテ云いふな。

狐きつねにもせめて一度いちどは撮つままれて
見みねば社しゃ會かいの事ことは分わからぬ〆

五い三そ 村むら肝きまの心こころに迷まよひある時ときは

醜しこの曲まが津つの誘さそふものなり。

萬まん公こうさま心こころの駒こまを立たて直なほせ

狐きつねのやつにもてあそばれて。

如い何かにして神かみの御み業わざがつとまるか

ほうけ男をとこを伴ともなひし身みは〆

萬まん公こう 恥はづかしや戀こひの狐きつねにたばかられ
思おもはぬ醜しこ態さま現あらはれにけり。

大神おほかみの道みちおろそかにした罪つみは
今目いままのあたり現あらはれてけり

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 加藤明子録)

第一三章 通夜話つやばなし(一一二二三)

八岐大蛇やまたをろちや醜狐しこぎつね 曲鬼まがおにどもの棲すみ居ゐたる

ウラルの山やまや常世とこよくに國 口ツキ一山ざんに現あらはれし

常世とこよの姫ひめの系統けいとうが 惡鬼あくき邪神じやしんに憑依ひょういされ

ウラルの道みちやバラモンの教をしへを四方よもにひらきつつ

天あめが下したをば攪亂かくらんし 汚けがし行くこそゆゆしけれ

國治立の大神は 神の恵みも大八洲
 彦の命を始めとし 言靈別や大足彦
 神國別の四柱を 國魂神と任せ給ひ
 島の八十島八十の國 隈なく守らせ給へども
 惡魔の勢たたくして 刈り取る草の其跡に
 又もや芽を出し伸びる如 根絶せざるぞ忌々しけれ
 バラモン教に仕へたる ウラルの系統の高姫は
 三五教やウラル教 三つの教をこきまぜて
 實にも怪しきウライの 教の射場をフサの國
 北山村に建設し 羽振りを利用して居たりしが
 遂に我を居り三五の 教の道に歸順せし
 後をばついで蝶蛸別 魔我彦二人が語り合ひ
 坂照山の山腹を 岩を切りとり土ならし
 へぐれのへぐれのへぐれ武者 へぐれ神社といふやうな

怪しき社號をつけながら 邊りの老若男女をば

鼠が餅をひくやうに チヨビリ チヨビリとつまみとり

今は漸く四五百の 堅き信者を得てければ

茲にいよいよ宮殿を 營み仕へ羽振よく

教を開きゐたりしが 天地を守る生神は

何時まで醜の曲業を 許させ給ふ事もある

松彦一行現はれて ユラリの彦となりすまし

別れて程經し吾妻の 松姫及び吾娘

優しきお千代にめぐり合ひ 一夜をあかす時もあれ

神の神罰めぐりきて 蠚蟧別は酒に酔ひ

お寅と喧嘩をおつ始め 土崩瓦解の運命を

自ら招き大廣木 正宗さまと自稱する

蠚蟧別は夜にまぎれ 信者のお民と諸共に

此場を遠く逃げ去りぬ お寅は後に地團駄を

ふんで無情を怒りつつ

後追っかけて行て見れば

榛の根元に結へたる

綱に足をばひつかけて

もろくも其場に轉倒し

神樂鼻をば打碎き

ウンウンウンとうなり居る

そこへ又もや魔我彦が

お寅の後を追ひかけて

力限りにかけ來り

お寅の體につまづいて

ウンとばかりに轉倒し

膝の頭をすりむいて

苦しみ悶えみたる折

五三公、萬公他三人

後追っかけて出で來り

二人を助けて小北山

教祖館に連れ歸り

ヤツと安心する間なく

いろいろ雑多の奇怪事が

次から次へと突發し

ウラナイ教の内面は

麻の如くに亂れける

あゝ惟神々々

一度は曲は榮ゆとも

誠の神力なき故に

脆くも自ら破れけり

これぞ全く神界の

犯し方なき御稜威 發露し給ひし證なり

あゝ惟神々々 如何なる曲も天地の

神の眼は濁し得ず 自らつくりし其穴に

陥り自滅を招くもの ただウラナイの道のみか

世のことごとは一として 悪のほろびぬものはなし

之を思へば人の身は 誠一つを立て通し

撓まず屈せず何處迄も 眞理のためには奮進し

一歩も退く事勿れ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

大廣前に残つた數人の男女は夜の更ける頃まで、いろいろと懷舊談に耽つてゐる。

甲「これお徳さま、お前さまは花依姫の命さまぢやないかい」

トク「どうだか、しつかり知りませぬけれど、教祖さまがさう仰有るのだから、

マアそれにしときまほかいなア」

源公「アハ、お徳さまもよつぽどお目出度いなア。鼻賣姫なんて、一つよ
りない鼻を賣つたら、後は何うするつもりだ」

「サア一つの鼻を賣るまでには中々苦勞が要りますよ。男の百人や二百人は今迄
迷はして來たけれど、まだ鼻が落ちるとこまで行きませぬからなア、此鼻をソツ
クリと賣つて了ふ迄には三百人や五百人は手玉にとつても大丈夫ですよ。せめて
千人のお客をとつたら鼻を賣つて了つても得心ですわ」

「サウするとおトクさま、お前は今まで賣女をやつてゐたのだなア」

「コレも悪神さまの御用だからなア、仕方がないのよ。併しモウ妾も改心したの
だから、誰か一人にきめておかうかと思つて居るのよ」

「四辻の小便桶見たよなナイスを、誰が眞面目に女房にするものがあらうカイ。
兩屏風の姉さまだからなア」

「おかまいツ、放つといて下さい、自由の權ですわ。源さま、お前は奥さまを何
うしたのだイ」

「かもて呉れない、放つといて貰ひませうカイ。滅多にお前の婿にはなる氣遣ひはないからなア」

「ホ、、、、、お【かん】さまにはほつとけぼりをくはされ、自分が使うて居つた僕と手に手をとつて驅落され、後にシヨンボリと力をおとして十日許りも泣きくらし、それから辨當持ちで三年許り山の神の所在を探しなさつたぢやないか。それでもカラツキシ御行方がわからぬのだから、氣の毒なものぢや。此頃は嬢に置去りにせられた男の代名詞をサツパリ源助と言ひますぞや、オホ、、、、」

「アーねぶたい、ドレもう寝ようかい。アタ面白うもない。鰯のどうけん壺をかきまぜたよな匂ひのする女にひやかされとつても、根つから氣が利かないからなア」

「源さま、一寸お待ち、だまつて聞いてをれば、妾を屏風だとか、鰯のどうけん壺だとか、餘りぢやないカイ。それだからお前は源助といふのだよ。ゴンボ先生はゴンボらしくして居りさへすれば、こんな恥はさらさいでもよいのだけけれど、あまり口がすぎるものだから、到頭すつぽりぬかれるのだよ」

「帆立貝の虐使に堪ふべく焼酎をふいてふいて吹きさがすものだから、堤防も何にも硬ばつてゐるぢやないか」

「大きに憚りさま、お前のお世話になるといふのでなし、お氣をもませましてすみませぬなア」

初公「時にお徳さま、あの鐵燈籠は何うなつたのだ」

トク「ハア、鐵燈籠かいなア。燈籠だけは最早出來て來たのだから、神様に早く

奉納したいと思つてゐるのだけれど、まだ蠟燭が揃はぬので躊躇してゐるのよ。

何處ぞ一本でもいいから、賣つとる所はないのだからかね」

初公「一本でいいのか、それなら源さまに頼んで見なさい。何時も一本持つてゐ

ると云ふ事だよ」

源公「馬鹿にするな。お徳さまの土器に油を注して奉納したらそれでいいのだ。

アハ、ハ、ハ、アー眠たい、初、トク、マアゆつくり話でもしたがよからう、左様

なら」

初公「ヤア、これは遠方の所御勞足でムいました」

源公は、

「エー八釜しワイ」

と云ひすて、自分の宿舎へ歸つて行く。

初公「お徳さま、お前一體この先何うするつもりだ。何處迄も後家を立通すつも

りカイ、好い加減に婿を定めぬと年がよつたら困るぢやないか」

トク「何ほど婿をきめよと云つたつて、廣い世界に妾の夫になるやうな男がない

ぢやないか」

「馬鹿いふない。これだけ澤山な鰥がそこら中にあるぢやないか。どれなつとお

望み次第願をかけて見たらどうだい」

「妾も今迄どれだけ探したのか知れないが、まだ一人だつてありはしないわ」

「お前の氣に入る夫といふのは一體どんな男だ。聞かしてくれ。さうすりや私も

世間を歩くから考へておかぬものでもない」

「初さま駄目だよ。今の男に碌な奴はありやしないよ。私の理想の夫はマア、ザ

ツとこんなものだ。先づ第一に三日月眉毛の男、其次に黒目勝な目許の涼しい、

何とも言へぬ優味のある目で、鼻は高からず低からず、小鼻の出ない鼻筋のよく通つた口許は尋常で、八の字髯がピンと生え、耳たぶの豊かな、額口のみあまり狭くない廣くない、色白で、而も體は中肉中背で、而して仕事は朝から晩迄よく働き、夜分は女房の守をしてくれ、糞や小便は肥料になるから些でも餘計垂れて、味ないものを些と食ひ、うまいものは女房に澤山食はし、さうして心意氣のよい人で一言も女房の云ふ事を反かす、外の女に心を移さない、一寸も外へ出ずに、女房と朝から晩まで顔見合して暮す職業を持つてゐる人で、手先の器用な、世界に名の出た男でないと、おトクさまの氣には入らぬのだよ。馬は馬連、牛は牛連といふ事があるからなア、あまり完全に生れすぎたものだから相手がなくて困つてゐるのよ。何處か一所でもよいから不完全に生れて來なかつたのだらうと、それが神様に對して恨めしい位だ。アア、いい女に生れて來るのも迷惑なものだ」

「何を吐しやがるのダイ。オタンチン奴が、貴様はそんな事を望んで待つてゐたとて、假令千萬年経つても出て來る氣遣ひはないぞ。自惚れも好い加減にしとつたがよからう。お前の完全なといふのは頭の禿と、出齒と、獅子鼻と、鰐口とで、

しかもトベラで兩屏風と来てゐるのだから天下第一品だ。ようマアそんな高望みが出来たものだなア

「ナア二何時か小説を読んだら、そんな事が書いてあつたのだ。その話をしとるのよ、オホ、、、」

「コラおトクさま、人を馬鹿にすな、エー」

「馬鹿にしよたつて馬鹿の骨頂に達した男を、どうして馬鹿にする餘地がありませんか。お前も分らぬ事を云ふ男だなア」

斯く他愛なき雑談に耽つてゐる所へ、カンテラに火をとぼし、恭しくやつて來たのは受付の文助さまであつた。

文助「これこれ皆さま、此夜更まで何をしやべつてゐるのだ。一寸も寝られはせぬがなア。サア早くお寢間へ歸つて休んで下さい、皆が迷惑だからなア」

初公「ハイ、一緒に寝ると御迷惑だと思つて、實は此處に御通夜をさして頂くもりで居りますのだ」

「何故又そんな事を云ふのですか」

「なんといつても牡丹餅〔ひぜん〕だから、寝さしてくれませぬワイ。それだから、遠慮して此處に徳義を守つて居るのですよ」

「ソレは感心だ。併しお徳さまは休んだら好いぢやないか」

トク「ハイ、一緒に休みたいのだけれど、皆の連中さまが、妾が側へ行くと麝香の匂ひがして鼻が曲るとか云つて、ワイワイ仰有るものだから、遠慮して此處に夜伽をして居りますのですよ」

文助「アーそれはどうも仕方がない。それなら成る可くおとなしうしてゐて下さい。受付までお前さま等の大きな聲が筒〔ぬけ〕になつて、寝られなくつて困るからなア。私は朝早うから日の暮れ一杯まで受付の御用を勤めねばならぬのだから、何卒静かにして下さい」

初公「ハイ畏まりました、左様なら」

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 外山豊二録)

第三篇 神明照赫

第一四章 打合せ（一二二四）

松姫館には夜の更くるまで雑談が始まつてゐる。

五三 『モシ松彦さま、思はず、暇を小北山で費しましたなア。治國別の宣傳使は、

さぞ待つてゐられますでせうなア。何うです、神様をスツパリ祀りかへて行くと

いふお話ださうですが、これだけ澤山のお宮さまを一々祀りかへて居つた日には、

二日や三日では埒があきますまい。そんな事をしとつたら肝腎の御用が後れるぢ

やありませんか』

松彦 『ソレもさうですが此儘にして行く譯にも行かず、困つたものです。私達は

都合によつたらエルサレム迄行つて來なくてはなりません。さうすれば一年位は

早くてもかかりますから、イツソの事、松姫に一任しておいたら何うでせうなア』

五三「萬公さまも一緒に暫く残しといたら何うでせうか」

アク「モシ先生、こんな男を残しておかうものなら、又狐につままれて駄目です

よ。お寅さまに魔我彦、萬公の欺され三幅對です。が、欺され三幅對をこんな處

へ置いておかうものなら、又候狐狸の巢窟となつて了ひます。而して萬公さまは

齋苑の館からお供に連れて治國別さまがムつたのだから、貴方の勝手にはなりま

すまい」

松姫「ソラさうですなア、五三公さま、一つ貴方神様に伺つて見て下さらぬか」

五三「ハイ承知致しました。それなら一つ伺つて見ませう」

と言ひながら手を組んで暫く無我の境に入つた。

五三「ヤア解りました。未だ三日ばかりは差支ない様です。明日早朝から神様の

御祀りかへをする事に致しませう、それに就てはお寅さま、魔我彦さまの承諾を

うけておく必要はありますまいかなア」

松姫「それが第一です。テクさま、すまないが一つお寅さまと魔我彦さまを此處

へ来て頂くやうに頼んで下さいなア」

テク「承知致しました」

と座を立つて階段を下り行く。

アク「松姫さま、随分貴女は此處へおいでになつてから日日が経つたやうですが、

妙な神さまばかり祀つたものですか」

松姫「本當にをかしくて忪らぬのです。幾何にでもへぐれてへぐれてへぐれ

廻す神さまですからなア」

「へぐれ神社に種物神社、生羽神社に大門神社、其他随分妙な名があるぢやあり

ませぬか。ヨウマアこんな出放題な神名や神社名がつけられたものですか」

「ソレでも世間は廣いものですよ。誰も彼も一生懸命になつて詣つて來るのです

から、不思議なものですよ」

「大變に變性男子をほめて變性女子をくさしてゐるぢやありませんか」

「二三年前迄は極力變性女子を惡の鏡だとか言つて攻撃して居りましたが、此頃

は變性男子の生宮が昇天遊ばしたので、仕方がなく一生懸命に變性女子の辨解ば

つかりしてゐるのですよ。男子と女子とが經と緯とで錦の機を織るのだ。而して

義理天上日の出神が世界中の事を調べて、變性女子にソツと言つて聞かすのだと、

ソレハソレハ偉い權幕でしたわ」

萬公「餘程改心が出来たと見えますねえ」

松姫「イエイエさうではありません。三五教の信者を占領しようと思へば、此

頃は女子の勢力が強いのだから、兩方をうまく言はねばひつかかつて來ないもの

ですから、策略であんな事を云つとるのですよ。九分九厘行つたところで女子は惡

の鏡だと云つてクレンとひつくり返すのですから油斷は出來ませぬよ。併しなが

ら變性女子の眷屬がかうして澤山やつて來たものだから、肝腎の教祖が女と手に

手をとつて驅落したのも、つまり神罰が當つたのでせう」

松彦「曲神は善の假面を被りつつ

世を欺くぞゆゆしかりける。

表には愛と善とを標榜し

裏に曲をば包む醜道。

何時いつの世よにも榮さかゆるものは偽善者きぜんしやよ
正ただしきものは衰おとろへて行く。
さりながら五み六ろ七くの神かみの生あれし上うへは
最早もはやあくま惡魔あくまの榮さかゆ術すべなし〆

松まつ姫ひめ「蝶いもり蛸わけ別まが、魔ま我が彦ひこ、お寅とらばあ婆あさまの

心こころは猫ねこの眼まなこなりけり。

夜よも晝ひるも酒さけに腸はらわたくさらせつ

曲まがの宮みや居ゐとなれる憐あはれさ。

良うの婆ばさまと自みづから稱となへつ

坤ひつじ神かみ何時いつもこぼちつ。

曲まが津つ見みの醜しこの教をしへに迷まよひけり

何なにを言いうてもきくらげの耳みみ。

これだけによくも迷ひしものぞかし

誠まことの教のりは一言ひこともきこえず〃

五三いそ 齋苑館いそやかたうづ 珍うづの宮居みやゐに比くらぶれば

天あめと地つちとの如ごとくなりけり。

小北山こぎたやま峰みねの嵐あらしはつよくとも

早はやをさまりて松風まつかぜの音おと〃

萬公まんこう 〃 ここへ來きて怪あやしき事ことの數々かずかずを

【たこ】になるまで耳みみに入れいける。

耳みみも目めも口くち鼻はな迄までも痺しびれける

曲まがと曲まがとに圍かこまれし身みは。

さりながら神の御稜威は灼乎に
逃げ失せにけり醜の曲神

アク『あくせくと心なやむる事勿れ

ただ何事も神に任せて。

悪神を追ひそけちらし根本の

神祀るとて世人あざむく

タク『ユラリ彦、上義の姫の生宮と

信じあるこそ可笑しかりけれ。

さりながら信じてくれたそのために

小北の山を立直すなり。

高姫たかひめや黒姫くろひめ司つかさがきくならば

さぞ懐舊くわいきうの念ねんに燃もゆべしし

テクを尾しろ白あたまし頭しろも白ふるぎつねし古狐

騙だましけるかな三人みたりの人ひとを。

蝶いもり別わけ今いまは何處いづこにひそむらむ

お民たみの後あとを慕したひ慕したひて。

魔ま我が彦ひこの心こころはさぞやもめぬらむ

戀こひにこがれしお民たみとられてし

これよりお寅とら、魔我彦まがひこ、お菊きく、文助ぶんすけなどを加くはへ、松姫館まつひめやかたの奥おくの間まで明朝みやうてう早くよ
り三五あななひの大神おほかみを鎮祭ちんさいすべく修祓しうぱつ、遷座式せんざしき其他そのたの件けんに就つて打合せうちあはをなし、各自かくじの居あ
間まに歸かへつて其夜そのよを明あかす事こととなつた。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一二・一五 舊一〇・二七 外山豊二録)

因に、本日午前九時より午後十一時まで十四時間に原稿紙八百一枚を口述し終れり。これ今日までのレコード也。(瑞月)

第一五章 黎明(一一二二五)

一日の太陽が神の御守りの下に静に暮れ行きて、頓て平和な閑寂な夜が地の上に訪れ、遠寺の鐘の音、埒求むる鳥の聲など漸くをさまり、四邊は死んだ様に静かになつて來た。鐵瓶の蓋が湯氣に煽られて鳴る聲が、何となくお寅婆アさまの胸に響いて、浮木の村の侠客時代を偲ばせる様であつた。蝶蝟別に命の綱の戀と金とを奪はれて、眠りもやらず、胸に轟く狂瀾怒濤を抑へることにのみ疲れはて、

次の間の鏡臺の前に向つて、マジマジと自分の姿を見れば、兩頬の瘦せこけたの
を見るにつけても、吾身の老い行きしこと、蝶蠟別の逃去りしもさこそ無理なら
じと思ふにつけ、其兩眼がスグツと涙になる。

「あゝこんな事ではいけない。モウ少し確りして、神様のお道を歩み直さねばな
るまい」

と吾と吾手に心を引立てようとしてみたが、夜前の無念さ口惜しさが骨の節々に
までしみ込んである悲しさが一時に飛び出して、忽ち金剛不壞的の信仰と覺悟を
打破らうとする。

「あゝあゝわしの今宵の苦しさと云つたら、石を抱かされ、算盤の上へすわらさ
れて、無實の拷問をうけてゐるやうな苦しさだ。人と人とを繋いでゐた絲が切れ
て、行方も知らぬ荒野を獨り寂しげに逍遙ふ心地がし出した。あゝどうしたらよ
からうかな。安心立命を得むとして神を信じ神を愛し、舍身的活動をやつて來た
のだ。それに又何として斯様なみじめな目に會つたのだ。世の中に不幸な人は
此お寅ばかりではあるまい。さりながら又妾の様な悲痛な残酷な憂目に會つた者

も又とあるまい。馬鹿らしさ、恥しさを、腹立たしさを、モウ立つてもゐても居られない様になつて来た。あゝどうしようぞいなア」
と鏡臺の前に、老軀を投げつけるやうにして愚癡つてゐる。

「あゝさうださうだ、人には三つの寶がある。其寶は決して物質的の寶でも、變則的情欲でもない、神様に對する戀愛だ。第一に愛、第二に信仰、第三に希望だ。此三つの歡喜を離れては、一日だつて暗黒の世の中に立つてゆく事は出来ない。

あゝ誤れり誤れり、誠の神様、三五教を守り給ふ太柱神素盞鳴大神様、今日まで仁慈無限のあなたの御恵を蒙りながら、少しも辨へず、蠚螋別の邪説に従ひ、御無禮ばかりを申しました。其心の罪が鬼となつて、今私を責めて居るので、いませう。あゝ吾敵は吾身體の中にひそんで居りました。拂ひ給へ清め給へ神素盞鳴尊……」

と合掌し、悔悟の涙にくれ、少しばし沈黙の淵に沈みつつあつた。暫くすると、何處ともなく燦然たる光明が輝き來り、お寅の全身を押し包むやうな氣分がした。お寅は何時とはなしに夢路を辿つてゐた。チツと眠つてゐる目の底には美はしき

天國の花園が開けて来た。牡丹や芍薬やダリヤの花が錦の様に咲き盛つてゐる中を、紅白種々の胡蝶と共に遊び歩いてゐるやうな、えも言はれぬ氣持になつて来た。お寅はフと目をさまして獨言、

「あゝ仁慈深き五六七大神様の光明に照らされて、轉迷開悟の花が吾胸中に開きました。薰しき風が胸を洗つて通るやうになりました。今まで人を救ひたい救ひたいとの念は時々刻々に沸騰して、胸に火を焚いた事は幾度か知れませぬ、併しながら萬民所か、自分一人を救ふ事も出来なかつた、かよわい私たる事を徹底的に悟らして頂きました。自分一人の徹底した救ひは、やがて萬人の救ひであり、萬人の救ひは自分一人の自覺即ち神を信じ神を理解し、眞に神を愛し、自分は其中に含蓄される以外にないものだ」と云ふことを、御神徳に依つて深く深く悟らして頂いた事を有難く感謝致します」

と悲哀にくれた涙は忽ち歡喜の涙と變り、心天高き所に眞如の日月輝き渡り、幾十萬の星は燦然としてお寅の身を包むが如き高尚な優美な清淨な崇大な氣分に活かされて来た。お寅は俄に法悅の涙にむせ返り、褥をけつて起上り、口を滌ぎ手

を洗ひ、人の目をさまさないやうと、差足拔足神殿に進んで感謝祈願の祝詞を、
始めて心の底より嬉しく奏上する事を得た。實に理解と悔悟の力位結構なものは
ない。其心靈を永遠に生かし、其肉體をして精力旺盛ならしむるものは、實に眞
の愛を悟り、眞の信仰に進み、そして眞に神を理解し、己れを理解するより外に
途はないものである。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

暴風一過忽ちに 吾身を包みし黒雲は

拭ふが如く晴れ渡り 五六七の神の御慈光に

迷ひ切つたる魂も 瑠璃光の如く照らされて

やつれ果てたる身も魂も 俄に無限の神力を

與へられたる思ひなり 眞如の月は村肝の

心の空に輝きて 清光燦爛身を包む

銀河は長く横たはり 東や西や北南

天津御空も地の底も 只一點の疑雲なく
地獄は化して天國の 至喜と至樂の境域に
樂しく遊ぶ身となりぬ あゝ惟神々々
人の身魂は皇神の 廣大無邊至聖至貴
清きが上にも清らけき 大神靈の分靈
吾身一つの魂の 持ちよに依りて世の中は
天國淨土となるもあり 地獄修羅道と變るあり
地上の小さき欲望に 魂を汚され心をば
紊しゐたりし淺ましさ 天國淨土は目のあたり
而も吾身の胸の内 開けありとは知らずして
私利と私欲の欲界に 漂ひ苦しむ世の人よ
其境遇を窺へば げに淺ましの至りなり
われ先づ神に救はれぬ 神に救はれ天國の
至喜と至樂を味はひぬ あゝこれからはこれからは

尊たふとき神かみの仁じん徳とくに 報むくゆる爲ために身みを碎くだき

魂みたまを捧ささげて道みちの爲ため 世よびと人の爲ために何どこ處こまでも

盡つくしまつらでおくべきか 情なさけは人ひとの爲ためならず

吾わが身を救すくふ寶たからぞと 悟さとりし今けふ日の嬉うれしさよ

仁じん慈じ無む限げんの大神おほかみの 恩みたまのふゆ頼たのむをかかぶりて

地ぢごく獄くと修しゆ羅らに迷まよひたる われは全まく救すくはれぬ

吾わが身を地ぢごく獄くにおおきなながら 憂うれせににおおちちてて苦くるめる

世よびと人を普あまねく救すくはむと 思おもひし事ことの愚おろかさよ

之これを思おもへば蝶いもり蝮わけ別わけ お民たみの君きみは吾わが爲ために

心こころの門もんを開ひらきたる 仁じん慈じ無む限げんの救すく主ひぬし

かく宣のひ直なほし見み直なほせば 天あめが下したには敵てきもなく

恨うらみもそねみも消きえ失うせて ささなながら神かみの心こころしぬ

思おもへば思おもへば有あり難がたき 吾わが身の垢あかを洗あらひます

瑞みづの御み霊たまの御おん恵めぐみ 神かむ素す盞さん鳴なり大神おほかみが

仁慈じんじの餘光よくわうを地ちになげて 暗やみに苦くるしむ人草ひとぐさを

救すくはせ給たまふ御心みこころを 今いまや嬉うれしく悟さとりけり

高姫たかひめ司つかさが稱となへたる ウラナイ教けうは表向おもてむき

仁慈じんじ無限むげんの神様かみさまの 救すくひの言葉ことばと聞きこゆれど

表裏へうり反覆はんぷく常つねならず 忽たちまち天候てんこう一變いつぺんし

雷鳴らいめいひらめき暴風雨ばうふうう 吹ふき來くる如ごとき恐怖きようふしん心

起おこさせ靈たまをよわらせて むりに引ひきこ込こむ横よこしまの

曲津まがつの教をしへと悟さとりたり 末代まつだい日の王天わうてんの神かみ

其妻そのつま上義じやうぎ姫ひめの神かみ リントウビテンきそよしひめや木曾きそよしひめ義ぎ姫ひめや

生羽いきば神社じんしやや岩照いはてる姫ひめや 五み六ろく七しち成じやう就じゆの肉にくの宮みや

旭あさひの豊榮とよさか昇のぼり姫ひめ 日ひの出神でのかみの義理ぎりてん天上じやう

玉則たまのり姫ひめや地ちの世界せかい 日ひの丸まる姫ひめの大御神おほみかみ

大將軍だいしやうぐんや常世とこよ姫ひめ ヘグレたねもののヘグレじんしやのヘグレごふうムシヤ

ヘグレじんしや神社おほみかみの大御神たねもの 種物じんしや神社ごふうの御夫婦ふしん神

大根本の神木の
十六柱の靈の神

なぞと怪しき御教を
ひねり出して愚なる

世人を欺く曲言を
此上なきものと迷信し

朝な夕なに村肝の
心を痛め身を削り

心肉共に瘦せこけて
苦みゐたる地獄道

今から思ひめぐらせば
さも恐ろしくなりにけり

天津御空の日は歩み
月行き星はうつろひて

銀河流るる地の上の
高天原に住みながら

知らず知らずに根の國や
底の國へと陷落し

日に夜に修羅をもやしつつ
戀と欲とに捉はれて

苦みゐたるぞ果敢なけれ
悔悟の涙はせきあへず

滂沱と腮邊に流れおつ
無明の暗もあけ放れ

今日は歡喜の涙雨
腮邊に傳ふ尊さよ

あゝこの涙この涙
世人の魂を洗ひ行く

瑞みづの御靈みたまの露つゆならむ 乾かわかであれよ何時いつまでも

流ながれ流ながれて河鹿川かじかがは 清きよき水瀨みなせの何處どこまでも

盡つくることなく暗黒あんこくの 海うみに沈しづめる曲人まがびとの

身魂みたまを洗あらはせ給たまへかし 神かみは汝なんぢと俱ともにあり

人ひとは神かみの子神こかみの宮みや 神かみに等ひとしきものなりと

のらせ給たまひし聖言せいげんは 仁慈じんじの光明くわうみやうに照てらされて

悔悟くわいごの花はなの開ひらきたる 吾身わがみに依よりて實現じつげんし

證明しょうめいされしものぞかし 曲まがに汚けがれし吾身わがみをば

自みづから救すくひよく生いかし 榮さかえて後のちに世よの人ひとの

靈みたまを生いかし救すくひ上げ 莊嚴さうごん無比むひの天國てんごくを

普あまねく地上ちじやうに建設けんせつし 國くにはるたちのおほみかみ 國治立大御神

豊國主大御神とよくにぬしのおほみかみ 神素盞鳴神柱かむすさのをのかむばしら

其外百の神等そのほかももかみたちの 大御心おほみこころを體得たいとくし

いよいよ進すすんで宣傳せんでんし 神かみの氏子うぢこを助たすけ行ゆく

尊たふとき司つかさとなさしめよ

今いままで暗やみに迷まよひたる

お寅とらが御前みまへに愼つつしみて

懺悔ざんげし感謝かんしやし畏かしこみて

恩頼みたまのひゆを願ねぎまつる

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはひましませよ[〽]

お寅とらは斯かくの如ごとく精神上せいしんじやうより生き返かへり、天國てんごくに復活ふくくわつしたる心地ここちして、入信にふしん以來いらい

始はじめて愉快ゆくわいな爽快さうくわいな氣分きぶんに酔よはされ、感謝かんしや祈願きぐわんの祝詞のりとを三五あななひけう教まもを守り給たまふ仁慈じんじ無むげ

限んの大神おほかみの御前みまへに奏上そうじやうし、欣然きんぜんとして吾居間わがゐまに歸かへつて來きた。此時このとき夜よはカラリと明あ

け放はなれ、山やまの尾をの上へを飛とびかつて、常世とこよの春はるを祝いはふ百鳥ももどりの聲こゑ、鵲かささぎの聲こゑ、いつもよ

りはいと爽さはやかに頼たのもしく聞きこえ來くるのを沁しみ々と身みに覺おぼゆるに至いたつた。

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 松村眞澄録)

第一六章 想おもひあひ暖ぬる〔一一二二六〕

お寅婆さまは小北山開設以来の打つて變つた活々とした水々しい顔をしながら、身も軽々しく、棕櫚箒や采拂を持ちて、パタパタパタ、スー、スーと心の清潔法をすませ、室内の掃除に餘念なかつた。そこへ寒さうに筒袖の中へ手を入れて、フーフーと冷たい空気を吹きながらやつて来たのは魔我彦であつた。殆ど失望落膽の極に達し、地獄の底から捕手の出て来たやうな、えも言はれぬ淋しい容貌を曝け出して入つて来た。

お寅「魔我彦さま、一寸鏡を見て御覽、お前の顔は年の若いにも似ず八十爺さまのやうな菱びやうだよ。チツト心の持方を變へなくちや駄目ですよ」

魔我「餘り馬鹿らしくて、世の中が淋しくなり、何とはなしに不平の雲が襲つて来て、地の上に身をおく所もない様な思ひが致します。それにお寅さま、貴女は今日に限つて、大變水々しい愉快さうな顔をしてゐるぢやありませんか。博

士の若返り法でも研究なさつたのですか。但しはニコニコ雑誌でも耽讀されたのですか。大變な變り様ですワ」

「ニコニコ雑誌や若返り法位で、さう俄に元氣が出るものですか。そんな人間の

頭腦から捻り出した厄雜物で、何うしてこんな愉快な気分になれるものですか
□それなら何うすればよいのです。何だかそこら中がウチウチして来て、冬の冷たい日に雪隠の中へ突つ込まれたやうな、クソ面白くもない空気に襲はれて仕方がありません

□お前さまは神様に對して、眞の理解がないからだ。神さまへ理解すれば、すぐに私のやうに、地獄は忽ち化して天國の境域に進むことが出来るのだよ

□神を理解せよと云つたつて、人間の智慧には限りがあります。これだけウラナイの尊き教を信じ神々様を念じながら、狐につままれて馬鹿を見せられるのだから、私は神の存在を疑ひます

□神の存在を認めず、神の救ひを忘れた時は心身共に衰耗廢絶するものだ。そして神の愛と神の信とに直接觸れ、眞に理解した時は忽ち歡喜の夕立、吾全身を浸し、靈肉共に不老不死的に榮えるものだ。併しながらへグレ神社や種物神社では駄目ですよ。お前さまもよい加減に、義理天上日の出神の雅號を返上しなさい、そして一個の罪人とおなりなさい。卑しき一個の下僕となり、乞食の靴を取る謙

讓の徳を心の畠に培ひ養ひさへすれば、忽ち天國は開けますよ」

「それだと云つて、今まで一生懸命に信仰して来たユラリ彦様やヘグレ神社、種物神社、大門神社の神々様を捨てる事は出来ませぬ。さうクレクレと此頃の空の様に変つては、誠が貫けますまい」

「お前さまは神素盞鳴大神様の御仁慈を有難く思ひませぬか。救世主だといふ事が理解されませぬか」

「何處迄も私は信じられませぬ。お寅さま、よく考へてごらん、素盞鳴尊を信ずるのならば、別にウラナイ教を立てたり、小北山の神殿を造營し、一派を立てる必要はないぢやありませぬか」

「そこが改心といふものだ。間違つて居つたといふことが分れば、直様改めるのが人間の務めだ。何程魔我彦さまが神力が強うても、荒金の土を主管し給ふ瑞の御靈の御神徳に比べては大海の一滴、どうして比較になりませう。チツと胸に手を當てて御考へなさい」

「お寅さま、貴女はさう生々として元氣さうに言つてゐるのは、要するに三萬兩

のお土産を蠓蠓別から貰ったからだらう」

「エ、あた汚い、お前さまはそれだから苦むのだ。吾と吾心に造った鬼に責められてゐるのだよ。物質的の欲望なんか物の數でもありません。それよりも、モツトモツト尊い寶が、そこら中にブラついてゐることをお悟りなさい。夢の中で貰った三萬兩は、物質的の寶としては使へばなくなるものだ。假令それが現實の黄金にした所で、一つお宮を建てたら、それで仕舞ぢやないか。何程使つても使ひ切れぬ、使へば使ふ程殖える無限の寶がおちてゐるのだよ。それを捨ふのが神を信仰する者の餘徳だ。その尊い神の御餘光を毎日日日ふみつけてゐるのだから、駄目だよ。お金で譬へたら、幾十萬億兩とも知れぬお寶を、私は頂戴したのだ、つまり世界一の富者になつたのだ。それだから此通り若やいで活々としてゐるのだよ」

「お寅さま、世の中に阿呆と氣違位幸福な者はありません。お前さまは夜前狐に生まれて、三萬兩の金を貰つたのでせう。そして蠓蠓別さまとしつぱり會つたのでせう。それから二世も三世もといふお目出度い情約を締結し、批准交換が

すんだと思つて喜んでゐるのでせう。そんな泡沫に等しき喜びは、霧の如く煙の如く、瞬く間に消滅して了ひますよ。其時にアフンとせないやうになさいませや」

「お前も狐に騙され、お民さまと手に手を取つて、二十萬兩の持參金と共に小北山の教祖になると云つて、顎まで外して居つたぢやないか。なぜそんな目に遇つたのか、分つてゐますか」

「三五教の曲津神が善の假面を被り、六人もやつて來やがつて、いろいろと奇怪な事ばかり致し此聖場を蹂躪せむとして居るのですよ。私は昨日の事からスツカリ目が覺めました。お前さまはまだ年がよつて居るので、精神上の缺陷がヒドイと見えて、依然として狐につままれ、糞壺へ投込まれて結構な温泉へ入つたと思ひ、牛糞や馬糞をつきつけられて結構な牡丹餅と信じ、瓦かけを持たされて三萬兩の黄金だと思つてゐるのだから、本當にお目出度いものだ。一層の事、お前さまのやうに無知識に生れて來たら、此世を夢現で喜んで暮せるのだけれど、何と云つても知識の光が強いものだから、お前さまのやうな氣にはなれませぬワイ。鑑別だとか、認識だとか、肯定だとか、否定だとか、いろいろの什器が心の寶庫

に充實じゅうじつしてるのだから、私の悲痛わたしのひつうな思おもひは、要えうするに將來しやうらいの歡喜くわんきの源泉げんせんとなるも
のだ。お前まへさまの歡喜くわんきは、丁度ちやうど阿片煙草あへんたばこに熟睡じゆくすいして世事せじ萬端ばんたんを忘わすれ、夢ゆめの世界せかいに
逍遙せうえうし恍惚くわうこうとし靈肉れいにくを蕩とろかしてるやうなものだ。丁度ちやうど田螺たにしの母親ははおやが、自分じぶんの生う
だ澤山たくさんな子こに、體からだを餌食えじきにされ、いつとはなしになめ盡つくされて、愉快ゆくわいな氣きになつ
てゐる間に、自分じぶんの肉體にくたいをスツカリ食くひ殺ころされてる様な愉快ゆくわいさだ。コレ寅とらさま、
チツト氣きをつけないと駄目だめですよ。變性へんじやう女子によしの惡御靈あくみたまが、全力ぜんりよくをあげて小北山こぎたやまを
滅亡めつぼうせしめむとして千變萬化せんぱんばんくわの畫策くわくさくをめぐらしてゐるのだからなア。燈臺とうだい下暗もくらし
と云いふからは、中々なかなか油斷ゆだんがなりませぬぞ。お前まへさまがそんな心こころで、何どうして此小このこぎ
北山たやまの本山ほんざんが立つて行ゆきますか。チツトしつかりして貰もらはないと、淋さびしくてたま
らぬぢやありませぬか』

『あゝ困こまつた男をとこだなア、これ程ほど言いつても目めが覺さめぬのかなア』

『あゝ困こまつた婆ばアさまだなア、何なんと云いつても思想しさうが單純たんじゆんだから、私わたしの言いふ事ことが、
充分じゅうぶん魂みたまに沁しみ込まないと見みえるワイ。女子ぢよしと小人せうにんは養やしなひ難がたしとは、あゝよく言いつ
たものだ』

「本當にお前と私と斯うして寢食を共にし、口の中に入れたものでも食ひ合ふやうにしてゐる親しい近い仲でも、心は千里の距離があるのだから、どうしても容易にバツが合はないのだ。これ魔我彦さま、一つ直日の靈に見直し聞直し、省みたら何うだい」

「あゝ寅さまは、たうとう地獄の底へ落ちて了つたのだなア、本當に可哀さうだ。世界の人民も救うてやらねばならないが、肝腎要のお寅さまから救ひ助けておかねば、到底萬民を助ける事は出来ない、困つた事になつて來たワイ」

「魔我彦さま、お前は救はれてゐる積かい。貴方御自身が眞の神の愛にふれ、眞の信仰に接し、眞の神を理解することが出來て、お前の魂も肉體も天國淨土の歡喜を味はふ事が出來ましたか。それから一つ聞かして貰ひたい」

「始から何事も都合よく行くものぢやない、私は今煩悶苦惱の最中だよ。本當に此世が厭になることが幾度あるか知れない。そこを耐へ忍んで行きさへすれば、所謂天國の門が開かれるのだ。人間は悲境のドン底に沈んだ時に於て始めて幸の種を蒔くものだ。幸の時、得意満面の時に却つて地獄の種を蒔いてゐるのだ。お

前は曲神に誑惑されて地獄に落ちながら、まだ目が覺めないのだよ、本當に可哀さうなものだなア。此魔我彦は今や天國の門を開かむとする首途にあるのだ。よい後は悪い、悪い後はよいと云つてなア、今の間に苦みをしておけば、永遠無窮の歡喜の園を開く事になるのだ。あゝ惟神靈幸倍坐世……どうぞお寅さまの曇り切つた魂が豁然として開けますやう、魔我彦が願ひ致します。ユラリ彦の大神様、五六七成就の大神様……」

「コレ魔我さま、ユラリ彦さまも、ヘグレ神社さまも、モウ言つておくれな、私は本當の信仰を握つたのだから。よく考へて御覽なさい。人間は永遠無窮に生き通しだよ。僅か二百年や三百年の肉體を受得する爲に生れて來たのではない。天國淨土に於て永遠無窮に繁り榮え、天國の御用をする爲に生れて來たのだ。吾々の意志も觀念も記憶も正しい知識も一切残らず高天原の天國へ此儘留存して行くのだから、現肉體のある間に歡喜の雨にぬれ、此身此儘天國の住民となつておかねば、どうして死後の生涯が楽しく送れませうか。此世の中は神の造り給うたものだから悩み苦みなどのあるべき筈がない。豁然として神の眞の愛にふれ、眞の

知^ち慧^ゑにふれ、神^{かみ}様^{さま}を理^り解^{かい}する事^{こと}が出來^{でき}たならば、此^{この}世^よ此^{この}儘^{まま}最^{さい}上^{じやう}天^{てん}國^{こく}だよ。悲^ひ痛^{つう}な思^{おも}ひをしたり些^さ々^さたる欲^{よく}望^{ぼう}に心^{こころ}を惱^{なや}めてゐるのは、所^{いは}謂^{ゆる}此^{この}世^よからなる地^ぢ獄^{ごく}道^{だう}に陷^{かん}没^{ぼつ}してゐるのだ。お前^{まへ}さまは小^{せう}智^ち小^{せう}欲^{よく}が勝^かつてゐるから、自^{みづか}ら造^{つく}つた地^ぢ獄^{ごく}へ落^おち、自^{みづか}ら築^{きづ}いた牢^{らう}獄^{ごく}に呻^{しん}吟^{ぎん}してゐるのだ。一^{いち}日^{にち}でも此^{この}世^よに於^{おい}て歡^{くわん}喜^きと感^{かん}謝^{しゃ}の生^{せい}活^{くわつ}を續^{つづ}け、假^{たとへ}令^{ひといき}一^ま息^まの間^まも悲^{ひく}觀^{わん}などしちや仁^{じん}慈^じの神^{かみ}様^{さま}へ對^{たい}して大^{たい}變^{へん}な罪^{つみ}になりますぞや。人^{ひと}は心^{こころ}の持^{もち}様^{やう}一^{ひと}つだよ」

「それでも、苦^く勞^{らう}を致^{いた}せよ、苦^く勞^{らう}致^{いた}さねば誠^{まこと}の花^{はな}は咲^さかぬぞよ……と神^{かみ}様^{さま}は仰^{おつ}有^{しや}るぢやありませんか。世^よの爲^{ため}、人^{ひと}の爲^{ため}、道^{みち}の爲^{ため}に苦^{くる}み且^かつ世^よを悲^{かな}しむのは最^{さい}善^{ぜん}の人事^{じんじ}ぢやありませんか。吾^{わが}身^みをすてて萬^{ばん}民^{みん}を救^{すく}ふといふ事^{こと}は善^{ぜん}事^じ中^{ちゆう}の善^{ぜん}事^じでせう。それだから私^{わたし}は何^どうなつてもいい、人^{ひと}さへ助^{たす}かれば、それで人^{にん}間^{げん}の本^{ほん}分^{ぶん}が盡^{つく}せるもの、神^{かみ}様^{さま}に對^{たい}して忠^{ちゆう}實^{じつ}な御^ご奉^{ほう}公^{こう}だと確^{かた}く信^{しん}じてゐるのだ」

「ホッホ、何^{なん}と分^{わか}らぬ男^{をとこ}だこと、どうにも斯^かうにも助^{たす}け様^{やう}がないワ。お前^{まへ}さま、自^じ分^{ぶん}が不^ふ幸^{かう}悲^ひ哀^{あい}の淵^{ふち}に沈^{しづ}み、涙^{なみだ}の生^{せい}活^{くわつ}を送^{おく}りながら、どうして人^{ひと}が救^{すく}へると思^{おも}つてゐますか、先^まづ自^じ己^こを救^{すく}ひ、自^じ己^こを了^{れう}解^{かい}した上^{うへ}で、始^{はじ}めて世^よを救^{すく}ひ、道^{みち}

を傳ふる完全な神力が備はるぢやありませんか。よう考へて御覽なさい、ここに一人の川はまりがある。今已に溺れ死せむとしてゐる所を人が通る、モシ其人が盲であつたならば、救ひを求むる聲は聞えても、決して救ふ事は出来ずまい。此時には水泳に達した人で、體の壯健な、目の見える人間でなければ、其溺没者を救ふといふ事は到底不可能でせう。それだからお前さまも、先づ自己を強くし、自己を照し、自己の神力を十二分に受けなくてはなりません。神力さへ備はらば、自然に歡喜の悅樂が吾身邊を襲うて來るものだ。私も夜前から神の慈光に照されて、悲哀の極、遂に歡樂境に救はれたのだ。どうぞして、お前を私と同じ精神状態に救うてやりたいのだが、餘り距離があるので、可哀さうながら救ふ事が出来ないのかな。併し乍ら私も第一着手としてお前を救ふ事が出来ないやうで、何うして萬民を救ふ事が出来よう。あゝ私は、大變な神様から試験をうけてるやうだ。魔我彦峠を突破するのは中々容易ぢやないワイ。あゝ神様、あなたの御慈光に依つて、私に誠の光と誠の愛をお與へ下さいまして、魔我彦が心に潛む曲を照し、どうぞ天國淨土へ靈肉共に導かして下さいませ。偏に神の御恩寵を御願ひ申上げ

奉ります』
たてまつ

「あゝあ、どうしても駄目だなア、可哀さうなものだ。私も此お寅さまを第一着手として救はなくちや到底萬民を救ふ事は出来ぬであらう。どうぞユラリ彦の神様、ヘグレ神社の大神様、あなたの榮光と權威と慈愛とに依りまして、可憐なるお寅婆アさま、魔我彦が最も敬愛する此老婦人の心に一道の光明を與へ下さいまして、あなたをよく信じ、あなたを理解し、あなたの愛を徹底的に悟る事が出来ますやうに、特別の御恩寵を此老婦人の上に垂れさせ給はむ事を、偏に希ひ上げ奉ります。あゝ惟神靈幸倍坐世、末代日の王天の神様、五六七成就の大神様、旭の豊榮昇り姫様、義理天上日の出神様、大廣木正宗様、大將軍様、常世姫様、偏にお願ひ申上げ奉ります』

「コレ魔我彦さま、モウ其神名は私の前で言つて下さるなといふに、譯の分らぬ人だなア、どうしても目が覺めぬのかいなア、あゝ何うしたらよからうぞ、惟神靈幸倍坐世、國治立大神様……』

「あゝ何うしたら、お寅さまの迷ひを解く事が出来るだらう、あゝ惟神靈幸倍坐

（大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 松村眞澄録）

第一章 惟神の道（一一二二七）

お寅婆アさまと魔我彦は互に顔を見合せ、友の一刻も早く善道を悟り、忠實なる神の下僕となり、且つ神の代表者、生宮たる實を擧げしめむと、互に親切にほだされて暫しが間默然として顔色ばかりを見つめてゐる。一方は老人にも似合はず十七八の娘のやうな色つやを浮べ、ぼつてりと太り、活々としてゐるに引替へ、一方は冬の木の葉が凧に叩き落され、雪に慄へて、えもいはれぬ淋しみを感じた様な悄然たる面を向けてゐる。恰も枯木寒岩に倚る三冬暖氣なしといったやうな、熱のあせた冷やかいかい氣分に包まれてゐる。昨日まで煩悶苦惱の淵に沈み、下らぬ情欲に捉はれ、且黄金に眼をくらましてゐたお寅婆アさまは、神の仁慈に照され

である。如何なる聖人君子智者勇者と雖も、天の御恵なくしては、到底救はるることは出来ない。廣大無邊の天然力即ち神の御威光によらなくては、地上一切の事は何一つ思ひの儘に出来るものでない。吾頭に生えた髪の毛一筋だも、或は黒くし、或は白くし得る力のない人間だ。此眞理を理解して始めて宇宙の眞相が悟り得るのである。これが所謂惟神であり、魔我彦が最善と思惟して採つたやり方は即ち人ながらであつて、神の御目より見給ふ時は慢心といふことになるのである。

要するに眞の惟神的精神を理解とも言ひ又は改心とも言ふ。假令人の前にて吾力量を誇り、吾知識を輝かし、吾美を現はすとも、偉大なる神の御目より見給ふ時は實に馬鹿らしく見えるものである。否却て暗く汚らはしく、惡臭紛々として清淨無垢の天地を包むものである。故に神は謙讓の徳を以て、第一の道德律と定め給ふ。人間の謙讓と稱するものは其實表面のみの虚飾であつて、所謂偽善の骨頂である。虚禮虚儀の生活を送る者を稱して、人間社會にては聖人君子と持て囃されるのだからたまらない。かかる聖人君子の行くべき永住所は、概して天の八

衢であることは申すまでもない。

人間が此世に生れ來り、美醜、強弱、貧富、貴賤の區別がつくのも決して人間業でない。何れも皆惟神の依さしの儘に、それ相應の靈徳をもつて地上に時きつけられたものである。富める者は何處までも富み、貧しき者は何處までも貧しいのは其靈の内分的關係から來るものであつて、決して外分的關係より作り出されるものでない。貧しき靈の人間が現界に活動し、巨萬の富を積み、金殿玉樓に安臥し、富貴を一世に誇ると雖も、依然として其靈と肉とは貧しき境遇を脱する事は出来ない。丁度如何に醜婦が絶世の美人の容貌にならむと、紅白粉を施し、美はしき衣服を装ひ、あらむ限りの人力を盡すと雖も、醜女は依然として醜女たるの域を脱せざると同一である。鼻の低い者は如何に隆鼻術を施すとも、美顔術を施すとも、到底駄目に了る如く、貧者は何處までも貧者である。凡て貧富の二者は物質的のみに局限されたものでない。眞に富める人は一筆の食、一瓢の飲を以て、天地の恵を樂み、綽々として餘裕を存し、天空海闊たる氣分に漂ふ。如何に巨萬の財寶を積むとも、神より見て貧しき者は、その心平かならず豊ならず、常

に窮乏を告げて欲の上にも欲を渴き、一時たりとも安心立命することが出来ない。金の番人、守銭奴たるの域に齷齪として迷ふのみである。又天稟の美人は美人としての惟神的特性が備はつてゐるのである。美人として慎むべき徳は、吾以外の醜婦に對し、なるべく美ならざるやう、艶ならざるやう努むるを以て道徳的の根本律としてゐるのは、惟神の眞理を悟らざる世迷言である。美人は益々装ひを盡せば、ますます其美を増し、神又は人をして喜悅渴仰の念を沸かさしむるものである。之が即ち美人として生れ來りし自然の特性である。これを十二分に發揮するのが惟神の眞理である。又醜婦は決して美人を妬みそねまず、自分の醜をなるべく装ひ、人に不快の念を起さしめず、且又美人に對して尊敬の念を拂ふのが醜婦としての道徳である。

富者となり貧者となり、貴人となり賤民となり、美人となり醜婦となり、智者となり愚者と生れ來るも、皆宿世の自ら生み出したる因果律に依つて來るものなれば、各自に其最善を盡し、賤民は賤民としての本分を守り、貴人は貴人としての徳能を發揮し、富者は富者としての徳を現はし、貧者は貧者としての本分を守

るのが天地惟神の大道である。斯の如く上下の萬民が一致的に其本分を守るに於ては、神示に所謂枘かけ引きならして、運否のなき五六七の世が現出したのである。瑞月が斯の如き説をなす時は、頑迷固陋の倫理學者、道德學者は、必ず異端邪説として排斥するであらう。併し乍ら天地の眞理の惟神の大道たる以上は、如何ともすることが出来ない。五六七仁慈の大神の心の儘に説示しておく次第である。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 松村眞澄録)

第一八章 エンゼル(一一二二八)

お寅、魔我彦兩人が、犬と猫とが互に隙を窺ひ、虚々實々論戦に火花を散らし、仁義の争ひ、最も酣なる所へ、エンゼルの如き美人が降つて來た。これは言ふま

でもなくお千代であつた。お千代は足早に二人の前かけ上り、雙手を組み、ウンと一聲、三尺ばかり空中に飛上り、キチンと二人の前に端坐した。お寅も彦も、威嚴備はり何となく優美なる乙女の姿に、思はず知らず頭を下げ、兩手をついて畏まつた。

千代『われこそはユラリ彦命なり。汝等兩人、小北山の祭神の善惡正邪に就いて論戦稍久しきを知り、天極紫微宮より降臨し、汝兩人が迷夢を醒まさむとす、謹聽あれよ』

とおごそかに宣示した。お寅は意外の感に打たれ、實否如何と、神勅の裁斷を待つてゐる。魔我彦は心の中にて……それお寅さま、御覽なさい、ヤツパリ私の信仰するユラリ彦命さまは誠の神だろ、此エンゼルの降臨に依つて、一切の迷夢を醒ましなされ……と口には言はねど、心の中に期待してゐる。

魔我『これはこれはユラリ彦様、よくマア御降臨下さいました。實の所はお寅さまと、神様の御事や信仰上の點に就て衝突を來し、互に論戦をしてゐた所であります。どうぞ明晰なる御宣示を願ひたうムいます』

天使「魔我彦、汝の苦悶をはらすべく降臨せしものなれば、遠慮會釋はいらぬ、何事でも質問をなされよ」

「然らばお言葉に甘へてお尋ね致しますが、此小北山にお祀りしてある神様は有名無實だとお寅さまが申しますが、實際は如何でございませうか。ある神ならばあると仰有つて頂きたい。なき神ならば、ないと仰有つて下さらば、それにて私は去就を決します」

「此小北山に祀られたる大小無数の神靈は、宇宙に存在せるは確なる事實である。生羽神社の大神、リンドウビテンの大神、五六七成就の神、木曾義姫の大神、旭の豊榮昇り姫の大神、地の世界の大神、日の丸姫の大神、義理天上日の出神、玉則姫、大將軍、常世姫、ヘグレ神社の大神、末代日の王天の大神、上義姫の大神、其他いろいろ雑多の祭神は、確に存在する神なることは證明しておくぞよ」

魔我彦は狂喜しながら、お寅の方を打見やり、したり顔にて、
「コレお寅さま、如何でげす、ヤツパリ私の考へは違ひますかな」
と稍得意の面をさらしてみせる。

お寅 『そりや祀つてある以上は神靈はなけねばなりませぬ』
魔我 『それ御覽なさい、それなら朝夕御給仕をしても差支はないぢやありませぬ
か』

天使 『神といへば皆齊しくや思ふらむ』

鳥なるもあり蟲なるもあり。

よき神も曲れる神もおしなべて

神と言ふなり天地の間は』

お寅 『どうも有難うございました。コレ魔我彦さま、神様には違ひないが、神の中
にも百八十一の階段があるのだから、そこを考へねばなりませんまいぞや』
魔我 『エンゼル様に重ねてお尋ね致します。小北山に祀られたる神々様は、上は
第一天國より、地の世界を御守護遊ばす主なる神様と聞きましたが、それに間違
ひ御座りますまいなア』

天使てんし 小北山宮居こぎたやまみやゐは數多あまた建たちぬれど

まつれる神かみは八衢やちまたにます。

八衢やちまたにさまよふ神かみはまだおるか

根底ねそこの國くにの醜神しこがみにます。

さりながら人ひとは天地てんちの司つかさなれば

汚けがれし神かみを救すくふも宜うべよ。

世よを守まもり人ひとの身魂みたまを守まもるてふ

誠まことの神かみは此神このかみならず。

此神このかみは罪つみや汚けがれを犯をかしたる

曲まがの靈みたまをいつきしものぞ。

拜をがむより救すくうてやれよ小北山こぎたやま

まつれる神かみの身みを憐あはれみて。

われこそはユラリの彦ひこと宣のりつれど

只魔我彦ただまがひこを救すくはむがため。

ユラリ彦神ひこかみとふ神かみは常世國とこよくに

ロツキー山ざんに蟠わたかまる曲まが。

松彦まつひこをユラリの彦ひこと尊たふとみて

敬うやまひ仕つかふる人ひとの愚おろかさ。

松彦まつひこも其真相そのしんさつは悟さとれども

汝なれ救すくはむとしばし忍しのびつ。

松姫まつひめも上義じやうぎの姫ひめは曲神まがかみと

云いふ事こと知らぬ生宮いきみやでなし。

さりながら迷まよへる人ひとを救すくふべく

あらぬ御名みなをば忍しのびゐる哉かな ㊦

魔我まが ㊦これはしたり世人よびとを救すくふ神々かみがみと

思おもひし事ことの仇あだとなりしか。

譯わけもなき神かみを山々やまやまいつかひて

世よを迷まよはせし事ことの悔くやしさ。

今いまよりは心こころの駒こまを立て直なほし

皇大神すめおほかみの道みちに仕つかへむ

お寅とら「エンゼルの嚴いづの言こと靈輝たまかがやきて

魔我彦まがひこの暗やみを照てらし給たまひぬ。

有あり難がたし心こころにかかる村雲むらくもを

拂はらひ給たまひし神かみぞ嬉うれしき。

魔我彦まがひこもさぞ今いまよりは村肝むらきもの

心こころの空そらに月つきを仰あふがむ

魔我まが 〇 久方ひさかたの心こころの空そらも晴はれにけり
神かみの使つかひのエンゼルの聲こゑに 〇

お寅とら 〇 吾言わがことば葉聞きき入いれざりし魔我彦まがひこも

神かみの使つかひにまつるふ嬉うれしさ。

身みに魂たまに光ひかりの足たらぬ吾われなれば

魔我彦まがひこ司つかさを救すくひかねつつ。

有ありがた難たき神かみの使つかひの下くだりまし

照てらし給たまひぬ二人ふたりの胸むねを 〇

天使てんし 〇 相生あひおひの松まつより生あれし愛娘まなむすめ

千代ちよの固かためを茲こゝに築きづきぬ。

これよりはこぎた小北の山やまの神々かみがみを

祀まつり直なほせよ神かみの詞ことばに」

お寅とら『いかにして神かみの御言みことを反そむくべき

勇いさみ進すすむで仕つかへまつらむ」

魔我まが『今はいま只神ただかみの御旨みむねに任まかすのみ

力ちからも知ち慧ゑも足たらぬ吾身わがみは。

掛卷かけまくも畏かしこき神かみの御惠みめぐみに

うるほひにけりかわきし魂たまも。

うゑかわき惱なやみ苦くるしむ吾魂わがたまも

瑞みづの御魂みたまに甦よみがへりける。

瑞御靈、嚴の御靈の神柱

おろそかにせしわれぞ悔しき。

今迄の深き罪科許せかし

心の曲の仕業なりせば

お寅 魔我彦よ心の鬼に罪科を

きせてはならぬ汝が身の錆。

迷ひたる汝が身魂に鬼住みて

あらぬ御業に仕へせしかな

天使 二柱迷ひの雲は春の水

氷となりて解けし嬉しさ。

主スの神かみの永遠とほにまします神國かみくには

常世とこよの春はるの花咲はなき匂におふ。

人ひとの身みは天あまつ御空みそらの神國かみくにの

眞人まひととならむ苗代なはしろにこそ。

地ちの上うへは汚けがれ果はてたるものなりと

思おもふは心こころの迷まよひなりけり。

村肝むらきもの心こころに神かみの國くにあらば

此地このちの上うへも神國かみくにとなる。

地ちの上うへに神かみの御國みくにを立ておほせ

おかねば死しして神國かみくにはなし。

地ちの上うへに住すみて地獄ぢごくに身みをおかば

まかれる後のちは鬼おにとなるらむ。

鬼おに大蛇をろち醜しこの曲靈まがひの猛たけぶ世よも

心こころ清きよくば神かみの花園はなぞの。

うつし世を地獄や修羅と稱へつつ

さげすみ暮す人ぞゆゆしき。

人は皆天津御國に昇るべく

生みなされたる神の御子ぞや。

主の神は青人草の靈體を

もらさず落さず天國へ救ふ。

救はむと御心いらち給へども

人は自ら暗におちゆく。

根の國や底の國なる暗の世へ

おちゆく魂を救ふ大神。

此神は瑞の御靈とあれまして

三五の道開き給へり。

三五の道の誠を守る身は

いかでおとさむ根底の國へ。

神かみの愛あい神かみの智慧ちゑをば理解りかいして

住すめば地ち上じやうも天てん國こくの春はる。

秋あき冬ふゆも夜よるをも知しらぬ天てん國こくは

人ひとの住すむべきパパララダイススなり。

永とこ久しへの花はな咲さき匂におひ木この實みまで

豊ゆたな神かみの國くにぞ樂たのしき。

主スの神かみは數あまた多たのエンエンゼルゼル地ちに降くだし

世よを救すくふべく守まもらせ給たまふ。

三あな五なひの教をしへ司つかさはエンエンゼルゼルよ

ゆめ疑うたがふな神かみの詞ことばを

魔ま我が 『ウウララナイの神かみの司つかさも皇すめ神かみの

珍うづの使つかひにおはしまさずや』

天使てんし □ ウラナイの神かみの司つかさは鳥獸とりけもの
蟲族むしけらなぞを救すくふ正人まさびと □

魔我まが □ 蟲族むしけらも神かみの御水みい火きに生うれたる
ものとし聞きけば救すくはむとぞ思おもふ □

天使てんし □ 大神おほかみの心こころ用もちひて救すくふべし
人ひとの愛あいする神かみならざるをし知しれ □

お寅とら □ 此山このやまにまつれる神かみは蟲族むしけらの
救すくひ求もとむる神かみにますらむ □

天使「さに非ず蟲族までも取りて食ふ

曲の神ぞや心許すな」

魔我彦は始めて、エンゼルの訓戒に依り、心の闇をはらし、俄に顔色清く、元氣百倍して無限の歡喜を得得する事を得た。魔我彦はエンゼルに向ひ、涙と共に其神恩を感謝した。

魔我「尊き清きエンゼルの御降臨、御蔭に依りまして、今までの私の迷ひも春の雪が太陽にとけるが如く氷解する事を得ました。實に無限の努力と生命とを賦與されたやうな思ひに漂ひます、歡喜の涙にうるほひました。此上は今迄の愚なる心を立直し、只一心に誠の神様の爲に全力を注ぐ考へでムいます」

天使「魔我彦、汝は今神様の爲世の爲に盡すと云つたが、神の力は廣大無邊、汝の力を加ふべき餘地は少しもないぞよ。只汝は天の良民として汝の身につける一切の物を完全に照り輝かし、萬一餘裕あらば之を人に施すべきものだ。併し乍ら人間として、どうして世を救ひ、人を救ふ事が出来ようぞ。汝自らの目を以て、

汝の顔及び背を見る事を得るならば、始めて人を幾分なりとも救ふべき力が備はつたものだ。之を思へば、人の身として、如何でか餘人を救ふ事を得む。斯の如き考へを有する間は、未だ慢心の雲晴れきらぬものなるぞ

「ハイ、いろいろの御教訓、誠に以て有難うございます。併し乍ら吾々は自分の身を救うて、それで決して満足は出来ませぬ。憐れな同胞の身魂を救つてやりたいのでございます。宣傳使の必要も吾身を救ふ爲ではございますまい。ここをハッキリと御教示願ひたいものでございます」

「宣傳使は讀んで字の如く、神の有難き事、尊き事を體得して、之を世人に宣傳する使者である。決して一人なりとも救ふべき権利はない。世を救ひ、人を救ふは即ち救世主の神業である。只宣傳使たるものは、神の國に至る亡者引である。此亡者引は、ややもすれば眼くらみ、八衢にさまよひ、或は根底の國に客を導き、自らも落ち行くものである。それ故何事も惟神に任すが一等だ。何程人間が知識ありとて、力ありとて、木の葉一枚生み出す事も出来ないではないか。一塊の土たりとも産出する事の出来ない身を以て、いかでか世人を救ふ力あらむ。只宣傳

使及び信者たるものは、神を理解し神の國の方向を知り、迷へる亡者をして天國の門に導く事を努むれば、これで人間としての職務は勤まつたのだ。それ以上の救ひは神の御手にあることを忘れてはなりません」

「ハイ、何から何まで親切なる御教訓有難う存じます」

「最前お寅どのの口をかつて、惟神の説明を致しておいたが、其方はお寅の肉體を輕蔑して居るから、誠の事を云つて聞かしても其方は分らなかつた。そこで今度は清淨無垢の少女が體をかつて、神は魔我彦の爲に訓戒を與へたのである、決して慢心致すでないぞや」

魔我彦は歡喜の涙をしゃくり上げ、疊を潤はし蹲まる。お寅は有難涙にくれ、顔もえ上げず、合掌して伏拜む。四邊に芳香薰じ微妙の音樂耳に入るよと見る間に、エンゼルは元つ御座に歸り給ひ、可憐なるお千代の優しき姿は、依然として十二才のあどけなき少女と變つて了つた。

魔我彦は初めて前非を悔ひ、神の光に照らされ、松彦の指揮に従つて小北山の祭神を一所に集め、嚴肅なる修祓式を行ひ、誠の神を鎮祭する事を心より承認し

たのである。いよいよこれより松彦まつひこを齋主さいしゅとし、五三公いそこうを被戸主はらひどぬしとなし、嚴肅げんしゆくな遷座式せんざしきに着手ちやくしゆすることとなつた。

あゝ惟神かむながらたま靈幸ちはへ倍坐ま世せ。

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 松村眞澄録)

第四篇 謎なぞの黄板わうばん

第十九章 怪あやしの森もり〔一二二九〕

小北こぎたの山やまを包つつみたる

醜しこの八重やへ雲くも隈くまもなく

吹き拂ひたる時津風
齋苑の神風しとやかに

世人の心に積りたる
塵や芥を拂ひつつ

平和の花園忽ちに
神の館に開けけり

あゝ惟神々々
八十の曲津の醜魂に

とらはれ苦しむ枉人も
漸く眠りの夢覺めて

お寅婆さまを始めとし
魔我彦、文助其他の

神の司や信徒は
誠の神の恩恵を

心の底より攝受して
勇みの聲は天に充ち

地上も揺ぐばかりなり
三五教に仕へたる

松彦司を始めとし
五三公、萬公其他の

清き司は身を清め
心を淨め天地の

誠の神と祀り替へ
以前の神を一所へ

齋ひをさめて一同に
嬉しき別れを告げながら

館を後に宣傳歌
歌ひ歌ひて進み行く

お寅婆さまは松彦の

後に従ひ吾は今

誠の神に救はれぬ

悪魔の虜となり果てし

蝶螭別やお民をば

誠の道に誘ひて

眼を覺まし救はねば

天地の神に相對し

何の辨解あるべきか

何處までもと追ひ行きて

是非とも眞理を傳へむと

松彦一行に従ひて

老軀をひつさげスタスタと

進み行くこそ健氣なれ。

小北山には松姫、魔我彦、お菊、お千代が重なる神柱となり、文助は依然とし

て受付を忠實につとめ、其他百の役員信者は喜んで三五の誠の教を遵奉し、天國

の福音を詳さに説き諭され歡喜法悅の涙にくれて居た。

一方松彦一行七人は小北山の神殿を伏拜み、河鹿川の橋を渡つて浮木の森をさ
して進み行く事となつた。

話は後へ戻る。浮木の森の三里ばかり手前に一寸した小さき森がある。ここは

河鹿峠の本街道と間道との別れ道である。治國別、松彦が通過したのは、山口の森から近道を選んで間道を来たものであつた。此森は怪しの森と云つて絶えず不思議があると思へられてゐた。此森へ入つたものは到底無事で歸れないと云ふ噂が立つてゐる。それだから追手に出會つた時等は、必ず此森へ隠れさへすれば追手も大抵の時は追及せないので例となつてゐる。故に一名難除の森とも稱へられてゐた。此森の入口、河鹿峠の本道、間道と分れてゐる辻の角に四五人の荒男がバラモン教の目附と見えて車座となつて退屈ざましに雑談に耽つてゐた。

コー「おい、ワク、此寒いのに火も焚かず、晝となく夜となく、こんな道へ辻地蔵の代用を仰せ付けられて居つてもつまらぬものだな」

ワク「一體此戦は如何なるだらうかな」

「どうなるつて、勝敗の数は正に歴然たるものだ。衆寡敵せず、窮鼠猫を噛むと云ふ事があるだらう。衆は所謂寡に敵する事が出来ないのだ。愈となれば鼠が猫を噛むやうなものだ。愈眞劍となつた時にや、どうしても小人數の方が心が一致して大勝利を得るものだよ」

「それだつて衆寡敵せずとは多勢と一人とは敵はぬと云ふ事だ。多勢と小人數とは數に於て益に於て、凡ての點に於て敵はないものだ。強いものが勝ち、弱いものは負けるのは天地の道理だ。それだから衆寡敵せずと云ふのだ。貴様の解釋は矛盾してゐるぢやないか」

「衆寡敵せずと云ふのは衆が寡に敵せずと云ふのだ。寡が衆に敵せぬ時は寡衆に敵せずと云ふのだ。然しあまり寡衆に敵せずと云ふ事は聞いた事がない。其證據には河鹿山の戦ひを考へても分るぢやないか。敵は僅に四人、而も武器を持つて居ない敵に對し、數百の勇士が脆くも潰走したぢやないか。之が衆寡敵せずの實例だ」

エム「時に兄弟、小北山にはウラナイ教とか云つて大變な信者が集まつてゐると云ふ事だが、こんな衛兵の役さへなければ、一遍何んな事をやつてゐるか研究のため行つて見たいものだな」

コー「随分澤山の女があるさうだ。浮木の里の女と云ふ女は大方あの小北山とかへ避難してゐるさうだ。然し、あこへ行つたものを奪つて來ると云ふ事は到底出來

ないさうだ。何でも神變不思議の術を使ひ、素盞鳴尊でさへも如何する事も出来ないといふ勢だからな」

エム「さうすると、餘程強い奴が居ると見えるな。吾々の大將は素盞鳴尊の弟子の奴等三四人に脆くも敗走したのだ。三五教は偉いと思つてゐたが、小北山はさうするとそれ以上だな。何と上には上があるものだな」

コー「きまつた事よ。無茶ほど強いものはないからな」

エム「だつて片彦將軍だつて、ランチ將軍だつて、無茶で行つたぢやないか。無茶が勝つのなら、あんなみつともない敗北はとりさうな筈がないぢやないか」

ワク「そこが人間の智慧で分らぬ所だ。勝敗は時の運と云ふからな。時に俺達も斯う毎日單純な無意味な生活を續けて居つてもつまらぬぢやないか。女房はあつてもハルナの都に置いてあるなり、本當に陣中の無聊には閉口せざるを得ないな」

コー「誰か此處へナイスでもやつて來たら、面白いがな」

エム「さう詔向にいつたら宜いが、こんな物騒な所へナイスが通る筈があるか」

ワク「それでも小北山には澤山の女が寄つて居るさうだから、ここを通らなくち

や通る所がないぢやないか」

エム「此頃は吾々が浮木の森に張つてゐるから、どれもこれも恐れて、橋から此方へは来ないと云ふのだから、サツパリ駄目だよ。夜も大分に更けたし、寒うはあるし、火を焚けば軍律上敵に所在を知られるとか云つて八釜しいなり、本當に因果な商賣だな」

斯く話して居る處へ、髪振り亂し息せき切つて走つて来る一人の女があつた。

コー「おい、向ふを見よ。詔向にやつて来たよ。如何やら月に透かして見れば、

あの足許と云ひ女らしい。一つ俄に泥棒と化けて嚇かしてみようぢやないか」

兩人「そりや面白からう」

かかる處へスタスタやつて来たのは小北山を逃げ出したお民であつた。お民は野中の森をさして行くつもりだったが、何とはなしに人聲が森の中へ聞えて居るので、引返して道を此方へとり、本街道に出るつもりでやつて来たのであつた。コー「そこなお女中、一寸待たつせい。ここを何處だと考へてゐる。女の身として妄りに通行は許さない處だ」

お民「ホ、ホ、ホ、天下の往來が何故通れないのですか。此道はお前さまが造つたのぢやありますまい。通るなと仰有つても私の権利で通ります。構うて下さいますな」

コー「何と云つても通さないと云つたら金輪際通さないので。俺を誰様と心得てる」

お民「【あた】阿呆らしい。誰様も此方もあつたものか。お前さまは立派な男に生れながら、こんな道の辻の番をさされてゐるのぢやないか。技能と知識とあればランチ將軍の陣營にあつて帷幕に參じ重要な相談に與るのだが、何處も使ひ場のない屑人足だから、石地藏の様に、こんな辻番をさされてゐるのだ。そんな男が空威張をしたつて誰が恐れるものがありますぞ。すつこんでゐなさい」

ワク「何と澁太い尼つちよだな」

お民「澁太い尼つちよだよ。何程女が弱いと云つても、お前さま等のやうな番犬の代理をつとめて居るやうなお方に弱るやうな女は、廣い世界に一人だつてありやせないワ」

ワク「番犬とは何だ。あまり口が過ぎるぢやないか」

お民「過ぎたつて事實なれば仕方がないぢやないか。お前、そんな事云つて居れ

ば、今に吠面かわかなくちやなりませぬぞや。小北山に時めき給ふウライ教の

教祖蝶蝮別が今直ぐお越したから、神變不思議の術を以て、お前さま等の五十人

や百人は一息に吹いて飛ばされる様な目に遇ひますよ。そんな馬鹿な事を云はず

に其處退きなさい。こんな夜の道に髯武者の狼面した男が居つては通る事が出来

ぬぢやないか。往來妨害の罪でバラモン署へ訴へて上げませうか」

エム「おい、ワク、コー、何と押尻の強い代物だな。此奴ア只の狸ぢやあるまい

ぞ。一つ非常手段をとつて何々しようぢやないか」

お民「ホ、ホ、お察しの通り只の狸ぢやありません。小北山の大神の眷屬

ですよ」

コー「何、狼の眷屬、此奴ア又太う出よつたものだ」

お民「何も太くも細くも、ありやせないよ。お寅さまと喧嘩して此處まで来たの

だ」

コー「何、大虎と喧嘩する。此奴ア、素敵な代物だな」

エム「此奴ア、さうすると狼が化けてゐやがるのだな。道理でお内儀さまの風になつてゐやがる」

ワク「何、狼ぢやない。大神さまの眷屬と云つて居やがるのだ。さうしてお寅婆さまと云ふ、酢でも葷弱でも行かぬ悪垂婆が居るさうだから、そのお寅婆に苛められて逃げて來よつたに相違ない。何程強い女だと云つても多寡が女一人、此方は三人だ。まだ其他にお添物として弱い奴が二匹慄うて居る。此奴、やつつけようぢやないか。これ女、貴様は、婆に恪氣されて放り出されて來たのだらう。どうも慌てた様子だ。さア此處を通過するなら通過さしてやらぬ事もないが、身のまはり一切を俺様に渡して行け」

お民「オホ、オホ、甲斐性のない男だこと、大きな體を持ちながら、人の物を盗つて生活せなくては此世が渡れぬとは、憐れなものだな。衛兵になつたり泥棒になつたり、よう「へぐれる」代物だな」

コー「馬鹿な事を云ふない。軍人と云ふものは強盜強姦を天下御免でやるのが所

得だ。所謂役徳だ。或時は正義の軍人となり、或時は財寶掠奪の公盜となり、或時は猥褻公許者となるのだ。さうだから男と生れた甲斐にや、如何してもバラモン教の軍人にならなくちや幅が利かないのだ」

お民「えー、八釜しい、耄碌、其處除け」

と無理に通り返す。三人はお民に喰ひつき一歩も進ませじとあせる。お民は全身の力を籠めて荒男をヤスヤスと柔術の手で投げつける。かかる所へ「おーいおーい」と苦しげな聲を出して此方へ向つて馳せ來る一人の男があつた。

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 北村隆光録)

第二〇章 金の力(一一二三〇)

コー、ワク、エムは一人のお民を相手に、投げられては起き、投げつけられては起き、武者振りついて挑み戦うてゐる。そこへ、枯草の野道を分けて「おーい

「おーい」と呼はりながら近寄つて来た一人の男、此態を見て、

「やあ、お前はお民か」

と云つたきり、ドスンと腰を抜かし倒れて了つた。お民は、三人を相手にしながら、

「あゝ蠓蠓別さま、よう来て下さつた。私、野中の森まで行つた處、あまり澤山の人聲がするので、本街道へ出ようと思つて此處までやつて来た處、泥棒の様な奴が出て無體な事を云つて通そまいとするのよ。それで此方も仕方がないから一つ思ひ知らしてやらうと思つて活劇をやつてゐる所だ。よい所へ来て下さつた。

さあ、一つ貴方も手傳つて下さい」

蠓蠓別は腰を抜かして身體の自由が利かなくなつてゐる。然し敵に弱身を見せ
ては一大事と心を定め、

「アツハ、お民、それしきの蠅蟲を俺が出るまでもないぢやないか。俺や
此處でゆつくりと、煙草でも飲んで見物するから、一つお前の活動振りを見せて
貰はう」

「最前から永らく揉み合つてゐるのだから、私息が絶れさうなのよ。さあ貴方、入れ替つて一つ此奴を懲してやつて下さい。何ゆつくりして居なさるの」

「さあ、さう急いだつて仕方がないぢやないか」

お民は蝶螭別の吃驚腰が抜けた事を直覺した。

お民「こりや三人の男ども、大將軍のお出ましかから一つ此處で水を入れたら如何だ。いづれ勝敗はきまつてゐるが、お前も随分喉がひつついただらう」

コ「それなら一寸一服しようかな。おい、ワク、エム、もとから親の敵でもなし、怪我しちや互によい損恥だ。國には妻子もあるのだからな」

ワク「うん、そりや、さうだ。それならまあ、一寸休戦かな」

エム「俺は中立國となつて平和の調停に努むる事しよう」

お民「ホ、ホ、まあ皆さま、多少負傷をなさつた鹽梅だから、此處を赤十字病院として敵味方の區別なく傷の癒えるまで休戦しようかな」

エム「至極妙案だ。そいつあ面白い、一、二、三」

と云ひながら三人は蝶螭別の一閒ばかり隔たつた處に、單縦陣を張つて腰を下し

休息しながら汗を拭いてゐる。

お民「もし、蠓蝨別さま、貴方あまり冷淡ぢやありませんか。女房がこれ程苦戦してるのに、高見から見物するとは不人情極まる、併し大方、吃驚腰が抜けたのだらうね。敵の中だから、そんなに慌ててはなりませんよ」

と耳の端で囁く。コーは早くも此聲を聞きとつた。

「ハ、ハ、ハ、何だ、俺達の武勇に恐縮して吃驚腰を抜かしよつたのだよ。おい、ワク、エム、最早大丈夫だ。恐るる事は少しもないぞ。糞落着きに落着いて居やがると思つたら、アハ、ハ、ハ、抜かしよつたのだ」

ワク、エム一度に、

「アツハ、ハ、ハ」

蠓蝨「吾々は神の國の軍人だ。肉體の人間に對しては門外漢だ。これしきの敵に對して腰を抜かすやうな卑怯者が何處にあるか。見違ひするにも程があるぞ」

コー「ヘン、惚れた女の前だと思つて瘦我慢を張つたつて、チャンと見抜いてゐるのだ。それが若し見違つて居るのなら立つて御覽」

蠓いもり 蠓いもり 「いや其儀そのぎなら、たつてお断ことわり申まをす。腰こしは立たたないが腹はらは随ず分ぶん立たつてゐる」

コ― 「俺おれも何なんだかナイスの顔かほを見みると立たつて來きたやうだワイ。立たつて立たつて立たち向むかふと云いふ鹽あんなばいしき梅ばいしき式しきだ。「武士もののぶの【さちや】た挟はさみ立たち向むかひ、いる【まとかた】は見るにさやけし」と云いつて、まとかたと云いつて氣き分ぶんのよい名めい所しよだな」

蠓いもり 蠓いもり 「こりやこりや三人さんにんの奴やつ、こんな處ところに【まとかた】があるか。そんな地名ちめいは自おの凝ころ島しまの名めい所しよだ」

エム 「何なんだか知しらねえが、吾われわれ々れは一ひとつの【まとかた】があつて活くわつどう動どうを開かい始ししてるのだ」

蠓いもり 蠓いもり 「その【まと】と云いふのは一いつ體たい何なんだ」

エム 「云いはいでも推す量りやうしたが宜よからうぞ。軍ぐん人じん兼けん泥どろ棒ぼうさまだ。おれさまの要えう求きうする所ところは決けつして石いしでも瓦かはらでもない、又また水みづでも茶ちやでもないのだ」

蠓いもり 蠓いもり 「アハ、々、々、貴き様さまは金かねさへ與やれば濟すむのだな。金かねで濟すむのなら安やすい事ことだ。此こ處こにちつとだけれど九きう千せん持もつてゐる。如ど何うだ、之これをちつとばかり貴き様さまにやらう

か」

コー「そんな目腐れ金に目をかける泥棒があると思つて居るか」

蠓「一千ばかり與らうか」

エム「三人の中へ一錢位貰つても三厘三毛よりならぬぢやないか。馬鹿にしゃが
るない。まだ此處に弱蟲が二人も慄つて居るのだから、頭割りにすれば二厘にし
かならない。饅頭の半分も買へない様な目腐れ金を持ちやがつて、金だなんて、
あまり人を馬鹿にするない」

蠓「ハ、ハ、ハ、感違へしやがったのだな。俺の九千と云ふのは九千圓の事だ。
それだからお前達に一千圓やらうと云ふのだ」

コー「ヤア、そいつは結構だ。頂戴する事にしようかな。強奪すれば純然たる泥
棒だが、向ふから與らうと云ふのに貰ふのは當然だ」

蠓「貰つても盗つても同じ事ぢやないか。名分のみ貰つたにした處で、實際は
脅迫されて與るのだから盗られたやうなものだ。オイ泥棒、それなら千圓此處に
あるから受取れ」

エム「オイ、ワク、ワク、コー、貰つても泥棒同様だと云ふぢやないか。泥棒と云はれ

ちや馬鹿らしい。一千圓位貰つても、つまらぬぢやないか。九千圓全部強奪して

やらうかい。同じ泥棒と云はれるのなら太い方が得だからな

蠓螞 實の處は、俺もお寅婆さまが貯へて居つたのを泥棒して來たのだ。此お民

だつて共謀の上だ。さうすりや俺もお民も其一部分に加はるだけの資格が具備し

てるのだから、貴様等三人に三千圓やらう。さうして、そこに居る人足には二人

に千圓やる事にしよう。残り五千圓はまあ俺の所得にして置かうかい。俺は之か

らまだまだ遠國へ行かなくちやならないからな

コー 何と比較的欲のない腰抜けだな

蠓螞 ウン、腰抜けだ。腰さへ立てば一文だつてやる氣遣ひはないのだが、何れ

貴様等に盗られて了ふ可能性があるのだから、俺の方から、くだけて出たのだ。

一人に千圓と云ふ錢儲けは、貴様が一生働いたつて出來やしないぞ。オイ、三人

の奴、按摩賃だと思つて俺の腰を揉んで呉れ。さうすりや。又三圓ばかり改めて

恵んでやらぬ事もないから

ワク iya、生れてから見た事もない千圓の金を貰つて、又其上頂くやうな事を

しちや冥加につきます。もう一厘も要りませぬから腰を揉まして下さいな」

蠓いもり 蠓いもり 「ウン、差許す。さあ、しつかり揉め」

お民たみ 「千圓がとこ、親切に揉むのですよ。然し腰から下は揉んじやありませんよ」

エム 「アハ、ハ、ハ、御心配なさいますな。假令揉んだ所で吾々は女ぢやありません」

ぬから、何卒御心配はなさいますな」

五人は蠓別より四千兩の小判を受取りホクホクものである。そこへやつて來

たのは一人の大目附であつた。

「こりやこりや、コー、ワク、エム、何を致して居るか」

ワク 「やあ、これはこれは大目附のエキスさまですか。今吾々この怪しの森の辻

番を致して居ります所へ、向ふの方より「スタスタスタ」と勢ひ凄じくやつて來

たのは此女、なかなかの強者で此關門に通らうとするので、此女の襟を取り無理

に叩いてみました所へ、又もや此女の夫と見えて、矢を射る如く飛んで來るもの

がある。見ればウライナイ教の神力無雙の蠓別、エム、コー他二人は倉皇ワクワ

クとして縮み上つてゐるにも拘らず、此ワクは襟髪握りスツテンドウと投げやれ

ば……流石の蝶鰯別も、斯くの如くクタばつて身動きもならぬ此淺間しさ、何卒お褒め下さいませ」

エキス「アハ、ハ、ハ、うまく芝居を致すのう。内職は如何であつたか、随分懐が膨れただらうな」

エム「エー、大切な軍人の職にありながら、内職等とは思ひもよりませぬ。軍律厳しい此陣中、如何して左様な内職なんか出来ませう」

エキス「それでも役徳と云ふものがあるだらう。オイ、コー、ワク、其方も役徳の収入があつた筈だ。各二分の一づつ此方に納めたらよからう」

コー「折角千圓の金を手に入れたと思へば、二分の一出せなんて、あまりだ、五百圓になつて了ふわ」

エキス「コーが五百圓、ワクが五百圓、エムが五百圓、兩人の名もなき供人どもは二百五十圓づつ此大目附に獻るのだ」

エム「もし、エキスさま、貴方は泥棒の上前をはねる大泥棒ですな。吾々は折角、骨折つて五百圓の収入、貴方は手を濡らさずに、しめて二千圓の収入があるぢや

ありませぬか。せめて十分の一位にして貰ひたいものですな」

エキス「それが上に立つものの役徳だ。人間は一段でも上の役人になるに限る。

大臣なんかになつて見よ。知らぬ間に何十萬圓、何百萬圓の株券が一文もかけな

いのに降つて来る。山林田畑が何時の間にかチャンと登記済になつてる様なもの

だ。それだから大目附役の地位は棄てられないのだ」

蠓螞「エキスさまとやら、私は蠓螞別と云ふウライ教の教祖ですが、此處に五

千圓ばかり金を持つて居ます。此内千圓ばかり献上致しませうかな。あまり澤山

胴巻に巻いて居ると、重くて困つて居ます。ちと助けて貰ひたいものですな」

エキス「何、助けてほしいと申すか、よし五千圓全部でも助けてやらう」

お民「オホ、あ、あの蠓螞別さまの綺麗な事、あた、それが好きで惚れたの

よ」
蠓螞「それならエキスさま、お前エキス（益吸ふ）と云ふ名だから、綺麗薩張持

つて去んで下さい。其代り一つお頼みがある。聞いて貰へるだらうかな」

エキス「頼みとは何でムるか」

「

蝶螭「外でもムらぬ。實はランチ將軍の家來にして欲しいのだ」

エキス「そりや大變都合の好い事だ。實の處、吾々の軍隊は三五教の言靈戰に、

もちあぐんで居る所だ。お前さまはウライナイ教の教祖だと聞いて居る。ウライナイ

教は人は少なくても大變な神徳があるさうだ。素盞鳴尊さまさへも如何ともする

事が出来ないと聞いた上は末頼もしい。屹度ランチ將軍も二つ返事でお取り上げ

になるのは請合つて置きます。さあ蝶螭別さま、陣中へは最早何程もありませぬ。

然らば賓客としてバラモン軍の參謀として御採用になるやうに私が努めます」

蝶螭「然し生え腰が抜けて動けないのだ。あまり俄に走つたものだから、腰の蝶

番が如何かなつたと見える。何分朝から晩まで坐り通しで、道を歩いた事がない

のだから」

エキス「御心配なさいますな。今に駕籠を呼んで来て、從卒に擔がせて御夫婦と

もランチ將軍の陣營へ鄭重に送り届けます。そして此エキスも及ばずながらお伴

致し、將軍様の許へ執りもち致す考へなれば御安心なさい」

蝶螭「ハイ、有難うムります。お民、もう安心せい。これだけの軍隊の中へ入つ

て居る以上は、お前も最早大丈夫だ」

お民「假令何んな處へでも私をお見捨てなく連れて行ってさへ下さいませれば、何んな處へでもお伴を致します」

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 北村隆光録)

第二章 民の虎聲(一一二三一)

小北の山の靈域を

闇に紛れて逃げ出し

戀の欲望を達せむと

蝾螈別と語らひつ

河鹿の橋を打ち渡り

野中の森に來て見れば

思ひがけなき人の聲

幾十人ともわかぬ程

ザワザワザワと聞え來る

お民は驚き倉皇と

元もと來きし道みちに引ひき返かへし

野の中なかの森もりを目め當あてにて

廻まはらむものと進すすみ行ゆく

四し五ごの男をとこは胡床座あぐらざに

耽ふけりて冬ふゆの夜寒よさむをば

斯かかる事こととは神かみならぬ

淋さびしさ身みにしむ冬ふゆの道みち

すたすた來きたる人ひとの影かげ

女をんなに向むかつて聲こゑをかけ

バラモン軍ぐんの御關所おんせきしょ

唳ど鳴なれば女をんなは打うち笑わらひ

通つう行かうするのなが何なに悪わるい

一いっ切さいかまはず行ゆかむとす

一いっ歩ぽもやらじといきまけば

息いきをはづましノソノソと

河鹿峠かしかたうげの本道ほんだうに

怪あやしき森もりの木下蔭こしたかげ

なりてヒソヒソ雜談ざつだんに

慄ふるひながらも明あかし居ゐる

身みの知しるよしも泣なきながら

後あとに心こころを引ひかれつつ

コゝ、ワク、エムの三人さんにんは

いづくの奴やつか知しらねども

通つう行かう罷まかりならぬぞと

天てん下か御免ごめんの大道だいだうを

邪魔じやまひろぐなと云いひながら

男をとこは兩手りやうてを打うち擴ひろげ

お民たみは聲こゑを荒あらげ

小童武者よ後のため 懲しめ呉れむと云ひながら

前後左右に詰め寄せる 男の素首ひん握り

右や左と打ち倒し 挑み戦ふ折もあれ

大地をどんだん響かせて 枯草しげる細道を

走つて来る男あり 此有様を見るよりも

お前はお民と言つたきり 腰を抜かして道の邊に

ウンと倒れた可笑しさよ お民は後を振り向いて

お前は蠓螋別さまか ようまあお出で下さつた

どうぞ助太刀頼みます 蠓螋別は落ち着いて

アハ、ハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、御供にも立たぬ蠓螋を

相手になすとは何事ぞ 俺は此處にゆつくりと

さも勇ましい活劇を 見物致す精出して

愉快的芝居を見せて呉れ あゝ面白い面白い

何ぞと俄に負惜しみ 其場を繕ふをかしさよ

お民も相手も疲れ果て

互に路傍に息やすめ

遂に和睦の曙光をば

認めた上に蝶螭別が

所持の大金放り出して

賠償氣取りになつて居る

かかる所へバラモンの

目附の役と選ばれし

エキスが一人現はれて

又もや茲に談判を

開設せしぞ面白き

無欲恬淡金錢に

心を寄せぬ蝶螭別は

有金すつぱり投げ出して

エキス目附のお氣に入り

お民諸共陣中に

駕籠に乗せられ將軍の

帷幕に參じ三五の

教を叩きやぶらむと

胸に一物抱きつつ

本陣さして進み行く

コー、ワク、エムの三人は

怪しの森に元の如く

警固を勤むる折もあれ

遠く聞ゆる宣傳歌

雷の如くに響き來る

一同兩手で耳押へ

木蔭に潜んでブルブルと

聲の過ぐるを待ちにける。

松彦は小北山の聖地を離れ、一本橋を渡り、直に宣傳歌を歌ひ出した。

神が表に現はれて
善神邪神を立てわける

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

唯何事も人の世は
直日に見直し聞き直し

身の過を宣り直す
三五教の神の道

國治立大神の
嚴の教を畏みて

産土山の高原に
神素盞鳴大神は

珍の御舍千木高く
仕へまつりて永久に

鎮まりいました天の下
四方の國々蒼生に

救ひの道を宣べたまふ
教にまつらふ宣傳使

治國別の一行は

河鹿峠を乗り越えて

南の坂の下り口

進み來ませる折もあれ

バラモン教の片彦が

久米彦將軍引き具して

ランチの先鋒とつかへつつ

河鹿峠の八合目に

進む折しも三五の

治國別の言靈に

打ちなやまされ散々に

秋の木の葉の散る如く

逃げ散り往くぞ果敢なけれ

吾は片彦將軍の

帷幕に參じ祕書となり

齋苑の館の征討に

向ふ折しも皇神の

慈光に觸れて蘇り

不思議の縁にて戀慕ふ

兄龜彦にめぐり會ひ

別れて程經し物語

茲に兄弟名告り上げ

玉國別に暇乞ひ

祠の森を立ち出でて

峻しき坂を下りつつ

山口の森に一泊し

不思議な神の經綸に

驚異の眼見張りつつ

野中の森に來て見れば 又も怪しき事ばかり

一夜を明す其中に 治國別に立ち別れ

何と詮方泣く泣くも 五三公、萬公初めとし

アク、タク、テクの三人を 從へ野路を進みつつ

小北の山の向岸 一本橋に來て見れば

又もや不思議の神縁に 引かれて登る小北山

潛む曲津を言向けて 正しき神を祀り込み

思ひも寄らぬ吾妻や 娘と廻り會ひつつも

神の仁慈を喜びて 感謝の涙せきあへず

再びここを立ち出でて 治國別の後を追ひ

浮木の森の敵陣へ 旗鼓堂々と進み行く

あゝ面白し面白し 正義に刃向ふ神はなし

神素盞鳴大神の 無限の神力賜りて

これの使命を恙なく 終へさせ給へ惟神

嚴いづの御前みまへに願ねぎまつる 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

神かみに任まかせし此體このからだ たとへ死しなうが倒たふれうが

決けつして悔くやむ事ことはない 只ただ何事なにことも神様かみさまに

心こころのままに打うち任まかせ 進すすみ行ゆく身みは大丈夫だいぢやうぶ

大和心やまとこころは胸むねに充みち 腕かひなは唸うなり肉にく躍をどり

幾いくひやくまん百萬てきぐんの敵軍てきぐんも 怯おめず恐おそれず堂々だうだうと

進すすみて行ゆかむ魂たましひと 早はやくも生うまれ變かはりけり

あゝ勇いさましし勇いさましし 神かみの力ちからは目まのあたり

いやしき吾身わがみに添そひたまひ 群むらがる敵てきの陣中ぢんちゆうも

無人むじんの野のをば行ゆくごとし あゝ惟かむながらかむながら神々かみ々々

御靈みたま幸さち倍はましませよ

萬公まんこうは又また歌うたふ。

齋苑いその館やかたを立たち出いでて

漸やうやく此ここ處こに來きて見みれば

思おもひもよらぬお寅とらさま

お菊きくにまでも廻めぐり會あひ

切きるに切きられぬ宿縁しゆくえんの

涙なみだを拭ぬぐふ折をりもあれ

神かみの恵めぐみに生いかさされて

小北こぎたの山やまの聖場せいぢやうは

再ふたび春はるの花盛はなざかり

常世とこよの暗やみも晴はれ往ゆきて

月日つきひは清きよく照てり渡わたり

空くう氣きはいとも澄すみきりて

今迄いままで惡魔あくまの巢すぐひたる

みやまも今いまは神かみの國くに

天國てんこく淨土じやうどとなりけり

松彦まつひこ司つかさに從したがひて

惡魔あくまの征途せいとに上のぼり行ゆく

神かみの下僕しもべの萬公まんこうは

世よにも稀まれなる宣傳せんでん使し

治國はるくに別わけのお伴ともして

ハルナの都みやこは未まだ愚おろか

神かみの鎮しづまるエルサレム

黄金山わうごんざんに向むかひたる

鬼春おに別はるの軍隊ぐんたいを

一人ひとりも残のこらず三五あななひの

誠まことの道みちに言こと向むけて

救すくひ助たすけむこの首途かど

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら

神かみの恵めぐみの幸さちはひて
神かみの依よさしの神業かむわざを
貴うづの御前みまへに萬公まんこうが
一日ひとひも早はやく片時かたときも
盡つくさせたまへ天地あめつちの
畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる
『

(大正一一・一二・一六 舊一〇・二八 加藤明子録)

第二章 五三嵐(一一三二)

五三いそ公こう 天教山てんけうざんに現あれませる 日ひの出神でのかみや木この花はなの
咲耶さくやの姫ひめの命みこともて 千變萬化せんべんばんくわに身みを變へんじ
卑いやしき人ひとの體たいに入いり 名なも五三いそ公こうと改あらためて
治國はるくにわけ別の弟子でしとなり 尊たふとき神かみの御教みをしへを

四方の國々八十の島 傳へて世人を天國に

導き救ひ助けむと 河鹿峠を乗り越えて

祠の森や山口の 大森林に宿泊し

風に曝され雨にぬれ 又もや吹雪に追はれつつ

野中の森の木下闇 一夜を明かし河鹿山

橋の袂に来て見れば ウラナイ教に魂を

曇らせなやむお寅さま お菊親子に廻り會ひ

松彦司と諸共に ウラナイ教の本山に

一夜二夜を明かす中 醜の曲神は忽ちに

誠の神の神力に 恐れて姿をくらましつ

怪しき女を引きつれて 跡白浪と消えたまふ

吾はこれよりフサの國 月の御國は云ふも更

メソポタミヤの顯恩郷 エデンの園を乗り越えて

神の現れますエルサレム 黄金山に攻めよせる

醜しこの曲津まがつを悉ことごとく
生言靈いくことたまを打ち出し

一人ひとりも残のこらず天國てんごくの
花咲はなき匂にほふ樂園らくえんに

導みちびきゆかむ吾心わがこころ
思おもへば思おもへば勇いさましし

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ大地だいちは沈しづむとも
天てんは地ちとなり地ちは天てんと

かへる暗夜やみよが來きたるとも
神かみの依よさしの神業かむわざを

如何いかでか忘わすれまつらむや
松彦まつひこ司つかさよ萬公まんこうよ

アク、タク、テクの三人みたりづ連づれ
ウラナイ教けうのお寅とらさま

神かみの光ひかりに照てらされて
愛あいと信しんとを完全くわんぜんに

悟さとりし上うへは世よの中なかに
もはや恐おそるる事こともなし

浮木うきぎの森もりに屯たむろせる
ランチ將軍しやうぐん、片彦かたひこや

久米彦くめひこ如何いかに勇ゆうあるも
神かみの依よさしの言靈ことたまを

いと穩おだやかに打ち出だして
言こと向むけ和やはし三五あななひの

仁慈じんじの神かみの高徳かうとくを
心こころの底そこより悟さとらしめ

地上にさやく醜風を

科戸の風に吹き拂ひ

花咲き匂ひ鳥歌ふ

清き涼しき天國を

地上に立てむ、いざさらば

進みて行かむ神の道

勇めや勇めや皆勇め

進めや進めや皆進め

悪魔の軍勢の滅ぶまで

醜の魔神の失するまで

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましませよ

お寅は道々歌ひ始めた。

浮木の村に名も高き

白浪女の博奕うち

良婆さまと讚へられ

數多の乾兒を養ひて

弱きを助け強きをば

挫くと云ひしは表向き

其内實は弱きをば

いぢめて強きに怯ぢ恐れ

弱肉強食の醜態を

現はし居たる淺ましさ

今いまの世せ界かいの俠客けいかくは いづれも表裏へうりのあるものぞ
決して弱よわきを助たすげない 又またもや強つよきに敵てきせない
唯ただ世よの中なかを渡わたりゆく 手段しゅだんに如しかぬものぞかし
年としはおひおひ寄よつて來くる 頭かしらに霜しもを戴いただ
白浪しらなみ言葉ことばのきかぬ儘ままに 商賣しやうばい替がへをせむものと
隙すきを窺うかがひ居ゐたる中うち 小北こぎたの山やまにウラナイの
教をしへの射場いばが開ひらけしと 聞きくよりお寅とらは雀躍こをどりし
善ぜんの假面かめんを被かぶりつつ 篤あつき信者しんじやと見みせかけて
日ひごと夜よごとに通かよひつめ 蝾螈いもりわけ別とに取り入いつて
内事ないじの司つかさとなりすまし 會計くわいけい一切いっさい手に握にぎり
一いち萬圓まんゑんの金かねをため 老後らうごの準備じゆんびを計はかる中うち
昔むかしに捨すてたる古爺ふるおやぢ 熊公くまこうの野郎やらうがやつて來きて
外聞ぐわいぶんの惡わるい大勢おほぜいの 中なかで胡床あぐらをかきながら
卷舌まきじたづくめに呶鳴どなり立たて 手てこずらしたる苦くるしさに

忽ち一計案出し 熊公を奥に連れ込んで

酒でいためて呉れむものと 喋々喃々お世辭をば

雲雀の如く竝べたて 酒酌み交はし悦に入り

熊公弱らせ神の道 酷しく強く言ひ聞かせ

追つ拂はむと思ひしに 豈計らむや熊公は

悪胴据ゑて白を切り 一萬圓の金出せと

云ひたる時の驚きは 身も世もあらぬ思ひなり

五三公さまの仲裁で 一千圓の手切れ金

その場の「ごみ」は濁せども まだ納まらぬ胸の中

ウラナイ教の神様が きつとお守りある上は

熊公の奴は途中にて 體が痺れ口ゆがみ

スツパリ改心致します お金を受取り下されと

吠面かわくであらうぞと 思つた事も水の泡

熊公は金を懐に 深くもかくしスタスタと

當^あてどもなしに足^{あし}まめに 逃^にげ往^ゆく時^{とき}の憎^{にく}らしさ
 神^{かみ}も佛^{ほとけ}も世^よの中^{なか}に こいつアてつきりないものだ
 こんな事^{こと}だと知^しつたなら 朝^{あさ}から晩^{ばん}まで水^{みづ}垢^ご離^り
 體^{からだ}を冷^{つめ}たい目^めにあはせ 神^{かみ}を拜^{をが}むぢやなかつたに
 大小^{だいせう}幾^{いく}多^たの神^{かむ}館^{やかた} 碎^{くだ}いて無^む念^{ねん}を晴^はらさむと
 思^{おも}ふ折^{をり}しも白^{びやく}狐^こさま 蝶^{いもり}蛸^{りわけ}別^{すがた}の姿^{すがた}して
 三^{さん}萬^{まん}圓^{えん}のお土^{みやげ}産^げを 渡^{わた}して呉^くれた嬉^{うれ}しさに
 又^{また}もや神^{かみ}を拜^{をが}まうと 惡^{あく}心^{しん}忽^{たち}ちひるがへし
 喜^{よろこ}ぶ閒^まもなく蝶^{いもり}蛸^{りわけ}別^{わけ}は 黒^{くろ}き狐^{きつね}と早^{はや}變^{がは}り
 貰^{もら}うた金^{かね}は石^{いしか}瓦^{はら} 馬^ば鹿^かげた夢^{ゆめ}を見^みたものと
 悔^{くや}めどかへらぬ胸^{むね}の暗^{やみ} 忽^{たち}ち晴^はるる神^{かみ}の聲^{こゑ}
 やつと吾^{わが}身^みに立^たち復^{かへ}り 直^{なほ}日^ひに見^み直^{なほ}し聞^きき直^{なほ}し
 天^{てん}地^ちの神^{かみ}に平^{ひれ}伏^ふして 謝^{しや}罪^{ざい}し奉^{まつ}れば村^{むら}肝^{きも}の
 心^{こころ}は俄^{には}か明^{あか}くなり 眞^{しん}如^{によ}の月^{つき}は心^{しん}天^{てん}に

輝き初めしうれしさよ 吾等は神に救はれぬ

この喜びを獨占し 居るべき時に非ざらむ

心を盡し身を盡し 神の御爲め世のために

誠一つの三五の 教の道を宣傳し

尊き神の眞愛と 眞智にさとりし高恩の

萬分一に報いむと 進む吾こそ嬉しけれ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

星は天より落つるとも 一旦神に誓ひたる

心を如何でかへさむや 天地の神も御照覽

良婆さまの改心を 完全に委曲に諾なひて

尊き神の御使に あたらせたまへ惟神

尊き神の御前に 謹みゐやまひ祈ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

アクはまた歌ふ。

バラモン軍の片彦や
ランチ將軍一隊の

斥候兵と選まれて
妖怪窟と聞えたる

森のかたへに来て見れば
俄に足が立ちどまり

魂はをののき魄ふるひ
やむなく路傍に腰おろし

ひそびそ話す折もあれ
片方の木蔭に松蟲の

さへづる如き細い聲
ホ、ホ、ホといやらしく

三人の耳をかすめ來る
こりや耐らぬと息をつめ

様子を窺ひ居る中に
將軍さへも恐れたる

治國別の一行が
社のあたりに宿泊し

眠り居たるぞ恐ろしき
それより三人は大野原

枯野を分けてノタノタと
野中の森まで四つ這ひに

進み行きしぞ苦しけれ
野中の森に現はれし

怪しき聲に肝つぶし

戦く折しも三五の

教の道の松彦や

五三公、萬公に助けられ

誠の道に歸順して

後に從ひ居たる中

小北の山に導かれ

日の出神の義理天上

肉の宮なる魔我彦が

失戀話や萬公が

夜食に外れた不足顔

お寅婆さまの荒びをば

面白をかしく拜見し

二夜さ三夜さ息やすめ

變化の變化の變化武者

變化神社を初めとし

末代日の王天の神

リントウビテン大神宮

種物神社ユラリ彦

ブラブラ彦と現はれた

怪しき神を拜まされ

面白をかしく日を送り

松彦さまに從ひて

惡魔の征途に上るべく

今やここ迄來りけり

あゝ惟神々々

神は吾等と俱にあり

吾等は神の子神の宮

如何いかでか曲まがの敵てきすべき

進すすめや進すすめやいざ進すすめ

ランチ將軍しやうくんほろ亡ほろぶまで

片彦かたひこ、久米彦くめひこ甲脱かぶとぬぎ

わが軍門ぐんもんに降くだるまで』

と一足ひとあし々ひとあし拍子ひやうしを取とり、怪あやしの森もりをさして進すすみゆく。

(大正一・一二・一六 舊一〇・二八 加藤明子録)

第二三章

黄金華わうごんくわ〔一二三三〕

お寅とらは途中とちゆうに立止たちどまり、一行いっかうを顧かへりみて、

『モシ皆みなさま、あの向方むかふにスンと立たつて見みえる野中のなかの森もりは、怪あやしの森もりといつて、

此頃このころはランチ將軍しやうくんの部下ぶかが見張みはりをしてゐるさうです。あの森もりの角かどから左ひだりへとれば
本街道ほんかいだう、今いま此道このみちは間道かんだうとなつてゐるのですから、あの人字街頭じんじがいつうに往來ゆききの人ひとを、ど

うせ査べてゐるに違ひありません。一つ此處で相談をして無事突破する用意をいたしましてどうか」

松彦「吾々は天下晴れての三五教の宣傳使候補者だ。たとへ幾十人の敵が張つて居らうとも、別に怖れる必要はないぢやないか」

お寅「イ工滅相もない、バラモンは三五教の神館ウブスナ山を目的として進軍の最中ではありませぬか。三五教の宣傳使、しかもウブスナ山から派遣された貴方等が御出になるのは、飛んで火に入る夏の蟲、可惜命を棒にふるやうなものです。

こんな所で我を張つちやなりません。皮固ければ脆くして破れ易く、梢軟らかなれば風に折れず、齒は如何に固くとも、柔らかき舌より前に亡ぶといふ事がありますぞ。強いばかりが神の心ぢやありません。兔も角此處で一服致しませう。

妾も永らく歩まなかつたので交通機關が怪しくなつて來ました。何卒休んで下さいな」

松彦「コレだから婆アさまの道伴は困るのだ。併し仕方がない。オイ一同、お寅さまの提案に賛成して暫くコンパスの休養をしようぢやないか」

五三「ハイ、宜しうムいませう」

と路傍の草の上に蓑を布いて腰を下した。お寅婆アさまの坐つた前に湯津爪櫛が一本落ちて居る。お寅は手早く拾ひ上げ、よくよく見れば見覚えのある自分の櫛である。これはお寅が侠客時代に金にあかして拵へた鼈甲の櫛であつた。お寅はつくづくと打眺め、

「ハ、アー、此櫛は永らく小北山へ來てから紛失してゐたが、こんな所へ落ちてゐるとは、夢にも知らなかつた。大方蠚蠚別がソツと何々してお民に與へたのだろ。さうすれば、お民が此處を通る時落したのだろ。お民が通つたとすれば、矢張り蠚蠚別も通つたに違ひない」

といふ結論を立てた。されど只今のお寅は最早昨日のお寅でない。執着心も恻氣も綺麗薩張と拂拭され、青天白日の魂になつてゐた。昨日までならば、この櫛を見て忽ち形相一變し、頭に無形の角を生やし、獅子の如く、虎の如く吼えたけるのであつたらう。されどお寅は、神の光に照されてより、戀の仇なるお民の持つてゐた自分の櫛を拾ひ上げて少しも嫉妬を起さず、且顔色も變へず、平然とし

て微笑することを得たのは、全く神の教の賜である事はいふまでもない。

萬公はお寅の拾ひ上げた櫛を覗き込み、

「お寅さま、意味ありげな櫛ぢやありませんか。此櫛に就ては貴女に何か不可思議な因縁がまつはつて居るやうですなア」

お寅「さうです。昨日迄ならば大に因縁の縁がコンがらがつて居つたでせうが、もはや今日となつては何にもありません。何處かの女が落ちて行つたのでせう。

何れ此先で追ひつくか、或は出會ふかもしれませぬからネー。萬公さま、貴方何處かに入れて落失主に會ふまで保存して下さるまいかなア」

萬公「鼈甲の櫛なんかは男の持つものぢやありませんか。女の貴女がお持ちになつて居れば、似合つたり叶うたり、こればかりは軽いものでは無いですが、平に御斷り申したうムいます。さうして櫛を拾うのはよくないぢやありませんか。悔み事が出来るといふ事です。何でも大變な心配があつてクシクシする時には、其心配を免れるために櫛を道に捨てるさうです。それを拾うたものはクシクシを拾ふのだから災難に會ふに違ひありませんよ。一層の事、其處へ打捨ててはどうで

す」

お寅 『此櫛は決してそんなものぢやない。あまり嬉しうて落したのだから、喜びを拾ふやうなものだ。これは形見だから萬公さま、お前も若い身體で、此先で妻帯をせなくてはならぬ身の上だ。此櫛を持つてあやかつたらどうです。九千兩の金子をもつて夫が屹度後追うて来てくれますよ、オホ、』

萬公 『何だ、お民の櫛だなア、アーさうすると蠨蛸別さまが後を追うて此處を通つた檜舞臺だ。オイ、テク、貴様はあやかる爲に此櫛を御預りしたら何うだい』
テク 『イヤだい、何程女にかつゑたつて、他の惚れて居る女を横取りして逃げるやうな不人情な事にはあやかりたくないワ』

萬公 『お寅さま、此通り誰も預り手がありません。元は貴女の所有品でせう。貴女のもものが貴女に返るのは當然だ。なかなか二百兩や三百兩で買へる物ぢやありません。ませぬデ。貴女、お持ちになつたら何うです』

お寅 『一旦欲しいと思つて盗んだ此櫛には靈がやどつて居るから、此お寅は手にふれるのも嫌です。頭が痛うなりますからなア』

松彦「サア参りませう」

と又もや宣傳歌を歌ひながら怪しの森指して歩みを急ぐ。コー、ワク、エムの三人は細い道に胡床をかき、シブシブしながら番卒をつとめてゐる。

コー「オイ、又誰かやつて来たぞ。どうやら今度は痛手らしいやうだ。あの宣傳歌は屹度三五教だ。ウラル教が通りよるとボロイんだけどなア」

ワク「オイ、そんな陽氣な事をいつて居る處ぢやない。森の木蔭へでも隠れたらどうだ」

コー「何のための番卒だ。假令殺されたつて此處を離れる事が出来るものか。八尺の男子がサウ無暗に敵に怖れて逃げるといふ事が出来ようかい」

エム「ソレでも片彦將軍、久米彦將軍は數百名の騎馬隊を引率れて、言靈を打出されて脆くも敗走したぢやないか。吾々の如き一兵卒は逃げたつて恥にもならねば、職務不忠實の罪に問はれる筈がないぢやないか」

コー「大將が逃げても失敗しても決して咎めはないが、吾々は一つ失敗しようものならソレこそ首だよ。それだから、なるのなら牛の尻尾になるよりも、雀の頭

になれといふのだ」

エム「そんな不公平な事が何うしてあるのだらうな。大將だつて俺だつて、生命の惜しいのは同様ぢやないか」

コー「なアに俺達は戦に臨めば矢受けに代用されるのだ。一將功成らむとすれば萬卒骨を枯らさなくてはならぬのだ。つまり言へば築港の埋草見たやうなものだ
なア」

エム「そんな事聞くと阿呆らしくて、こんな職務は出来ないぢやないか」

コー「だつて外に藝があるぢやなし、學問があるぢやなし、商賣しようにも資本はなし、又世間の奴からはゲジゲジの様に嫌はれ、行き詰つたから仕方なしに、こんな處へ墮落したのぢやないか。今のポリスだつてさうだろ。誰も相手にしてくれないから、安い月給で人民に威張るのを役徳として仕へてゐるのだ」
ワク「それだけ信用のないものが、ポリスになつても人間が云ふ事を聞くだらうかなア」

コー「豫言者と同様に郷里では駄目だ。それだから百里も二百里も遠い處へやつ

て使ふのだ。さうすればドンナ極道だつて、戸倒しものだつて、博奕打だつて、立派な御役人様になれるのだからア。俺だつてさうだらう。チヨイ博奕も打ち、バサンしやていに、カ、しやてい、【さくい】女のシリを追ひ廻して村中から忌み嫌はれ、叩き出され、乞食になつてハルナの都へ彷徨ひ、到頭生命の的の商賣にありつかして貰つたのだ。貴様だつて皆さうだらう。宅に女房が待つて居るなんて、何程偉さうにいつても女房のあるやうなものが、こんな事をするものかい。エム『ソレはさうだ。自分の親類や近所の事をいつてゐるのだよ。併し俺だつて、ワクだつて、貴様だつて、人交はりもせず、家庭もつくらずに、此儘朽ち果つるやうな事は滅多にあるまい。併し世の中は几帳面に渡ると損だ。今彼處にやつて来る宣傳使に對しても甘く下から出るのだね』

斯く話す處へ、松彦一隊は早くも近付き來り三人に向つて、

松彦『一寸物を伺ひます。貴方はバラモンの軍人と見えますが、此處を二十才ばかりの女と、四十格好の男が通りは致しませぬか』

コー『其方は三五教の宣傳使であらう。若い男女の道行きを尋ねて何といたすか。

それよりも此關門を通過さす事は罷りならぬぞ。浮木の村にはランチ將軍様の軍隊が宿營して假本營が出来て居る。それ故汝如きものは一歩たりとも、これより踏み入らず事は罷りならぬのだ。サア早く歸つたがよからうぞ。召捕へられて本陣にひき行くべきところなれど、其方の心次第に依つては許してやらぬ事もない

「別に貴方の許しを受けなくとも、吾々は自由に此處を通過いたす權利を保有してゐるのだ。併し何か要求すべき事があらば聞いてやらう。それと交換に此關門をゴテゴテ言はずに通したがよからう」

「オツと御出でたよ。流石は三五教の宣傳使、實の處はランチ將軍も片彦將軍も三五教ときけばビリビリものです。併しながら今度は充分の軍備を整へ、手具脛ひいて待つてゐるのだから、うっかり御出でになれば命がない。それだから貴方の出様一つによつては安全な間道を教へてやらぬ事もないのだ。今通つた男は蠚蠚別といふ氣の利いた奴で、俺達に千圓の氣づけを呉れ居つた。三人で千圓ぢやないぞ、一人に千圓だぞ。勘定違ひをせぬやうに其方も何とか考へねばいけない」

「ヤア有難い、重たいけれど其千圓を頂いて行かう。今の世の中は強いものの強

い、弱いものの弱い世の中だ。弱い奴に金をやつてたまらうかい。其方は三人で三千圓持つて居ると言つたな。其處に二人の男が居るやうだ。其方は二人で千圓持つてるのだる。さうすれば四千圓だ。俺は三五教の宣傳使兼大泥棒だ。サア、サツパリと四千圓耳を揃へて此處へツン出せばよし、グツグツ吐すと承知いたさぬぞ」

「オイ、ワク、エム、サツパリだ。エー、モ千圓儲けようと思つたに、サツパリ出せと吐しやがる。あんな事をいつて俺達を威かすのだらう」

「アハ、ハ、ハ、威してゐるのだ。其方も威して取つたのだらう。今の處世の上手な奴は上から下まで皆威してゐるのだ。弱點のある人間を威さなくて誰を威すのだ。サ其方は蠨螋別から四千圓の金子を取つた泥棒だらう。此方に渡せばとて決して其方の會計に缺損の行く道理はなからう。其の金は今此處にゐるお寅さまの臍繰金を盗んで逃げた性念の入つた金だ。サア、キリキリチャツと渡さぬか」

「モシ、渡さぬ事はありませぬが、折角喜んで目の正月、心の餓辛では堪りませぬからな。何卒百圓だけ私に貰ふ譯には行きますまいかなア」

「アハ、ハ、ハ、嘘だ。取る奴も取られる奴も因縁があるのだろ。因縁がなくては取られようと思つたつて取られず、取らうと思つても取れるものぢやない。やつぱり貴様が御蔭を頂いたのだろ」
「ハイ、實は先方の方から請求せないのに下さつたのです。それで味をしめて又お前さまに一つ威して見たら呉れるだらうかと思つたのに、反對に威かされて肝を冷しました」

松彦 「その金が懐にあると愉快だらうなア」

エム 「へー不思議なものです。寝ても覺めても千兩の金があつたらあつたらと思つてゐましたが、今千兩の金が入れば、何れ程嬉しいかと思つてゐたのに、どうしたものか些も嬉しいはありません。貰うた金でさへ此通りですから、盗つた金なら尚更の事でせう。只今では却つて心配が重なつて來ました。今も貴方に威かされ、此金を取られぢやならないと思つて大變に氣をもちましたよ」
松彦 「アハ、ハ、ハ、金が仇の世の中だなア。コレお寅さま、お前さまの一萬兩の金を九千圓まで蠟蝋別が盗み出して此處迄やつて來たのだが、どうも氣分が悪い

と見えて四千圓をバラまいて行ったのでせう。蠨螋別も嘸辛かつたでせう」

お寅「妾だつて神様の御社の下へ一萬兩を隠し置き、寒い晩にもよう寝もせず、何遍となくお金の面をあらために行き、晝は晝とて随分氣がもめました、蠨螋別がもつて行つてくれるから、氣樂に暖い炬燵に前後も知らず休まして頂きました。かうなる上は金の必要はありません」

松彦「空飛ぶ鳥も、野邊に咲く山百合の花も、神は之を完全に養ひ給ふのですから、人間は物質上の欲を去らねばなりません。禽獸蟲魚さへも何の貯蓄もせず、其日を送つてゐます。況して吾々人間に神の恵の降らない事がありますか」

コー「モシモシ此千圓の金、何卒お寅さまとやら元へ收めて下さい、モウ要りませぬワ。そんな話を聞くと怖ろしくなつて來ました。なあワク、エム、貴様も同感だらう」

ワク「何だか胸がワクワクして來たやうだ」

エム「エムに襲はれたやうな氣がするよ」

松彦「金は婦女子小人の持つべきものだ。聖人君子に金はいらない。お寅さまも

